1 「子どもたちと記録する“家族や地域の肖像”
ワークショップを通して地域の教育力を高める」研究概要

2 東日本大震災　被災地の現状と課題

3 石巻でのワークショップから見えたもの研究報告

4 ワークショップ的な授業（中学校３年）「映像で考える3.11子どもの人権」がつなぐもの

5 学生と家族や故郷そして「私の3.11」映像ワークショップがつなぐもの
～「記憶を語る」ことについて

6 ９５万人アンケート子どもに映像で何を残したいですか

7 子どもと地域が向き合う力ワークショップがつなぐもの

8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性

9 可能性と研究

10 付録DVD

平成24年度文部科学省
「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」共同研究委託事業

「子どもたちと記録する“家族や地域の肖像”ワークショップを通して地域の教育力を高める」

● 研究報告書 ●

（株）グループ現代
本研究実行委員会 編

斉藤修平
仲條雅昭
米田進
松谷幸英
田野 稔
川井田博幸
遠藤 学
佐藤博昭
服部かつゆき
中村純子
野里元宏
岩橋直樹
西条美智枝

平成24年度文部科学省
「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」共同研究委託事業

「子どもたちと記録する“家族や地域の肖像”ワークショップを通して地域の教育力を高める」

● 研究報告書 ●

はじめに

田野 稔
(株)グループ現代代表

映像の新たな役割について

映画が誕生して１１８年、テレビ放送を開始して６０年、そして今や携帯情報端末が隆盛し、映像も電波やスクリーンという「公」からインターネットを利用した「私」へとめまぐるしい変容を遂げています。誰でも手軽に撮影でき、編集でき、そして発信まで可能になった今、映像は日常の中で生活の一部として日々進化し続けています。映像製作会社としてスタートしたグループ現代も、最先端の技術や設備の変遷とともに、高度な機材を用いクオリティ優先の立場で、フィルムの時代からデジタル時代へと製作スタイルも変化させて参りました。一方で、国民の間にタブレット端末などが出回ることで、誰でも写真や動画を高品質のままにリアルタイムで撮影することが出来、編集を加えてインターネットなどで容易に発することまで出来るようになりました。今回の研究プロジェクトは、「映像」の社会的価値やスタンダードをテーマにした教育というより、むしろ「道具」としてのメディアが、人々の中でどういう役割を果たしうるか、という点に重きを置いて研究を進めて参りました。たとえば、タブレット端末を用いた映像ワークショップを通して、周囲の人たちを注意深く観察したり、その人たちとの思いもよらない「会話」を誕生させることによって、相互の関係性を見直したり、共に「楽しみ、考え合う」関係性を生んだり、又、セルフポートレートという方法で自分自身の記憶を探り記録する、というような人間としての根源にかかわる問題に踏み込んだ実践も積んで参りました。この経験は、文明の発達とともに人と人とのつながりが希薄になっている今日において、人間同志における関係性の回復やセルフ・エスティーム（自尊感情）の回復にも応用できるのでは、という期待がもてるのではないかと思います。ここに新たな映像の役割が誕生しているのではないでしょうか。我々が、「私」の文化（領域）へこれからどれだけ踏み込んでプロとしての指導性を発揮できるかが、いま問われています。これからも、映像文化の益々の発展に貢献していきたいと考えています。

斉藤修平
本研究実行委員長
埼玉県立大学講師

主観の復権—語ること、語り直すこと－

私たちはワークショップ技法（魔術）とタブレット端末iPad（呪物）を抱えて問いの旅に出発しました。旅先は被災地・石巻、川崎市の中学校、埼玉の大学の教室。終着駅はさいたま芸術劇場映像ホールでした。問いの内容は地域で育んできた社会教育力の源泉を人々の語りの力のなかに見いだそう、というものでした。大学の小さな講義室、私が担当した場所でした。そこに集う学生諸氏にiPadに向かって「私」の故郷について、「私」の3.11について語ってもらいました。iPadを手渡しながら「語り尽くせないところまでがんばって」と無理なお願いをしました。エビデンスを揃えて客観的に語ることが優先され、主観的な語りや騙りが許容されにくい学習社会にあって、すでに講義室という空間は自分について語る場所とはなっていません。論議を交わす雰囲気も消失していることに気付いていた私はiPad上に映像と音声で語り残す行為を学生に要請しながら、その先に主観が復権していく兆しを確認したい、そのような強い願望が働いていました。ワークショップが始まってすぐに、一人一人が定型化された語りから解き放たれ、自らの体験とその記憶がしだいに滑らかにiPadに吸い込まれていきました。大きな物語りとは違った語りが、まさに語り直されていく場面を私は目撃したのです。一人一人の差異を含んだ記憶と語りは、決して対立していくものとはならず、静かに重なり合っていくような感じでした。講義室は小さな映画館。iPadから放映された語りの映像を通して、教室の学生が「見る、見られる関係」に変換されていきます。また、映像に登場する学生は「語っている自分」に出会いはじめます。そんな光景が展開していったのです。

自分の記憶、語り、感情といった主観世界がこのワークショップでは徹底的に肯定され、忘れられていた自尊感情が回復してきたことを感じることができました。社会教育力とは、自尊感情が裏打ちされた人々の語りのなかに宿っている、そのような見解にたどりつくのに、それほど時間はかかりませんでした。

はじめに ……003
もくじ ……005

1 「子どもたちと記録する“家族や地域の肖像”
ワークショップを通して地域の教育力を高める」研究概要 ……008
研究の背景と実施拠点……009
研究方法と目的……009
被災地、中学や大学ワークショップ・ 全国アンケート・シンポジウム ……011

2 東日本大震災　被災地の現状と課題 ……014

3 石巻でのワークショップから見えたもの研究報告 ……022
ワークショップ ドキュメント ……031
8月７日いしのまき寺子屋ワークショップ ……031
8月８日石巻ワークショップ　石巻市仮設追波川多目的団地集会所 ……036
8月９日石巻ワークショップ　石巻市仮設追波川多目的団地集会所 ……039
8月10日いしのまき寺子屋ワークショップ ……040
中村純子被災地レポート ……041
石巻市仮設追波川田的団地ワークショップ　構想と現実 ……045

4 ワークショップ的な授業（中学校３年）
「映像で考える3.11子どもの人権」がつなぐもの ……048
ワークショップ的な授業（中学校３年）
「映像で考える3.11子どもの人権」がつなぐもの ……049
西生田中学校３年生のiPad　ビデオレター ……057

5 学生と家族や故郷そして「私の3.11」映像ワークショップがつなぐもの
～「記憶を語る」ことについて ……060
埼玉県立大学　学生代表　野沢宏子さん ……065
学生たちの映像一人語り ……066
レポート ……074

6 95万人アンケート子どもに映像で何を残したいですか ……076

7 子どもと地域が向き合う力ワークショップがつなぐもの ……086
パネルディスカッションより ……087

8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性……097

9 可能性と研究 ……103

10 付録DVD ……105

1

「子どもたちと記録する“家族や地域の肖像”ワークショップを通して地域の教育力を高める」研究概要

ワークショップ開催地
いしのまき寺子屋・石巻市仮設追波川多目的団地
川崎市立西生田中学校　埼玉県立大学

1 「子どもたちと記録する“家族や地域の肖像”ワークショップを通して地域の教育力を高める」研究概要

子どもたちと記録する
小学校３年生から撮影編集体験ができる

家族や地域の肖像
家族や友達、地域の姿や証言が財産となる

ワークショップ
楽しい話合いが増え連帯感が生まれる

報告者 川井田博幸
株式会社 グループ現代
株式会社 グループ現代 記録映画プロデューサー

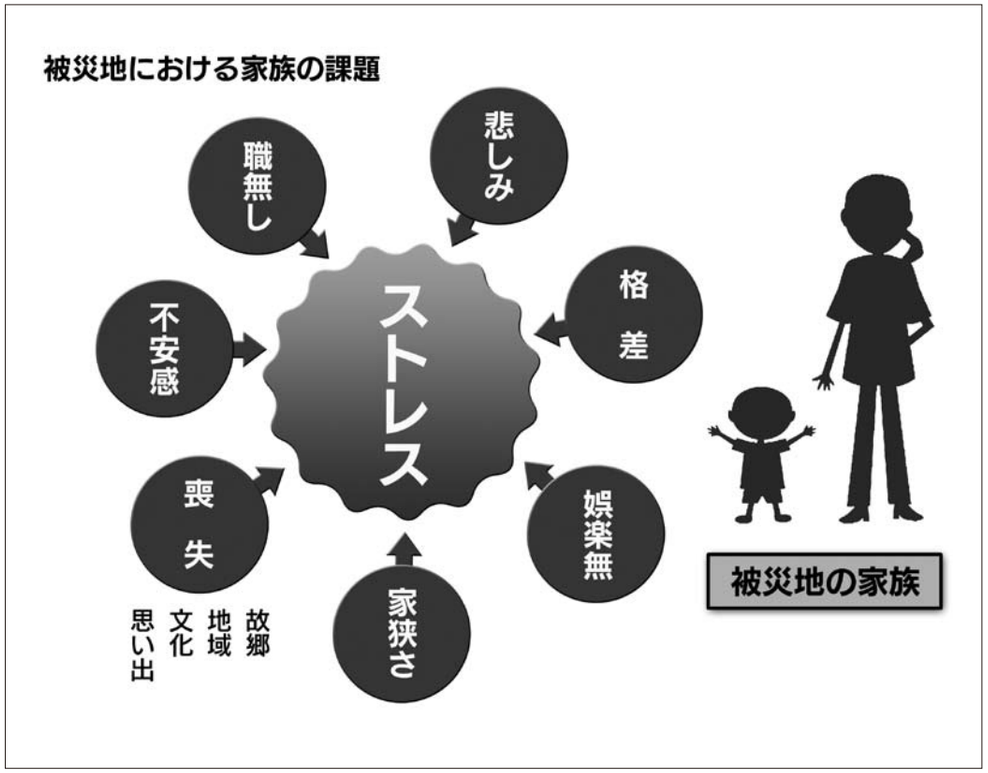
現在福岡の町並みの記録映画を地域の人たちと制作中。
消え行く文化遺産、町並みの保存活動を映像に記録し、価値を訴える。
記憶財産として記録の重要性を訴える。

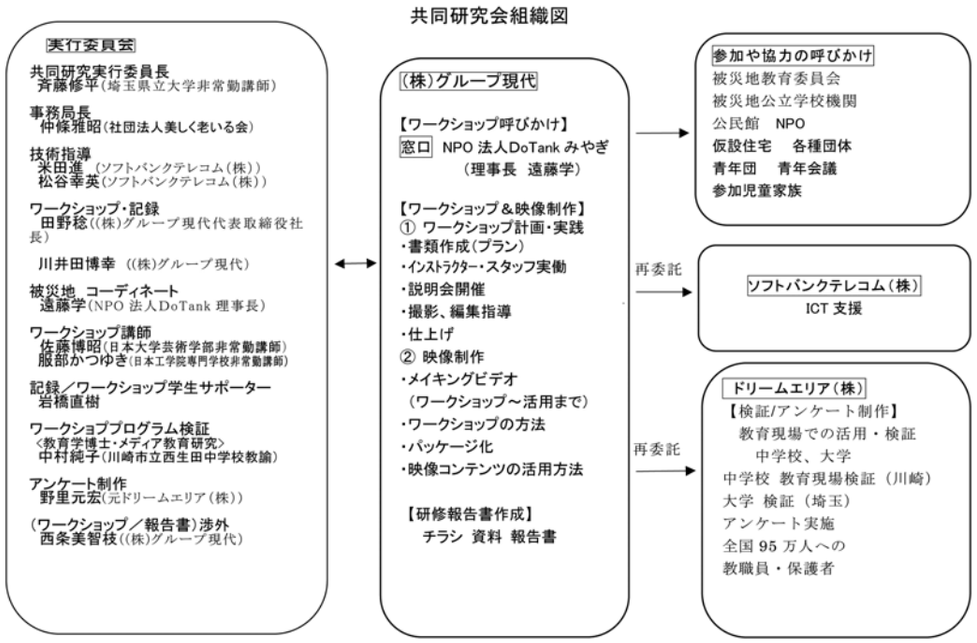
■研究の背景と実施拠点

日本列島を震撼させた東日本大震災から２年。あの津波や原発事故で長年住民が大切にしてきた地域の様々な文化や歴史の記憶が次第に風化しようとしています。それは、故郷の喪失であり、まさに自分自身のルーツ、自分自身のアイデンティティの喪失なのです。さらにそれを支えてきた家族や地域の繋がりまでもが今、疲労や不安とともに崩壊の危機に晒されています。 この度、大切な記憶を取り戻し、家族や地域の絆を取り戻すために映像がどのような役割を果たせるのか、誰にでも容易に扱えるタブレット端末を使用して、身近な視点からどれだけ課題にアプローチできるかをテーマに進めて参りました。被災地石巻のワークショップに始まり、首都圏の中学校や大学でも実践の輪を広げていきました。さらに９５万人へのアンケートも実施し致しました。

■研究方法と目的

本事業では、簡単な映像メディアによるワークショップ活動を通し、子どもたちとともに故郷を再確認し、アイデンティティを回復させ、新たな未来へ向かっていくきっかけを作ることを目標としました。同時に、撮影や編集の作業を通し、友達や家族や地域のコミュニケーションを活性化させることも目標として掲げました。失われた故郷の思い出と現在の家族の状況を映像に収めることは、地域の文化に対する愛着と誇りと良さを再確認することで地域の活性化にも役立つと確信するからです。目標に向かって実践していくと、映像記録だけではなく、多くの会話には笑いが起こり、子ども、大人、中高生、大学生、地域の方々それぞれに活力が湧いてきているように見えました。また同じグループに、仲間意識が湧いてきて積極的に楽しむという成果を発見するにいたりました。今後の課題もあります。それらを明らかにしていこうと考えます。





1．被災地石巻の子どもと その家族のワークショップを開催

本事業では、親や祖父母、地域の証言を映像記録し、故郷を再確認し、アイデンティティを回復し、新たな未来へ成長していくきっかけを作ることを狙いとしました。見知らぬ地域の住民との共同生活が課せられたそれぞれの家庭では先行きの見えない避難生活に疲れ、様々なストレスを抱えて暮らしておられます。不安から鬱状態になり、近隣の人と付き合いもままならなくなっている方もいらっしゃいます。家庭では、母親の不安に影響され、家族の会話も少なくなっているケースが多いようです。

この度、1日目は被災者の方々へさらに寄り添った場（石巻市仮設住宅の集会所）へ開催場所を移し、2日目は発表の場として、映写会を開催するため地域の公共ホール（石巻市河北総合センター）で行いました。そこでは、被災地に暮らす子どもやその家族自らがタブレット端末を用いてまず、「遊び」のなかから周りの面白さを発見するという形式でワークショップを試みました。最新のタブレット型PCを使用して、その映像制作機能を学びながら、機材の扱い方を通して楽しく学べる環境作りを行いました。ワークショップでは撮影、インタビュー、編集、上映に至るまで、子どもや親たちがスタッフといっしょになって「映像作り」の面白さを実際に体験し大型スクリーンでその成果を確認しました。

2．東京近郊の中学生や大学生を 対象にワークショップを開催

被災地の実情を東京近郊の中学生や大学生が視聴することで、同様な効果を目指していました。タブレット端末を用いた共同作業を通し、お互いのコミュニケーションを活性化させ、タブレット端末へ向かって語ることで自らを発見し、共に支え合うネットワークを目指し、地域の教育力向上に努めました。

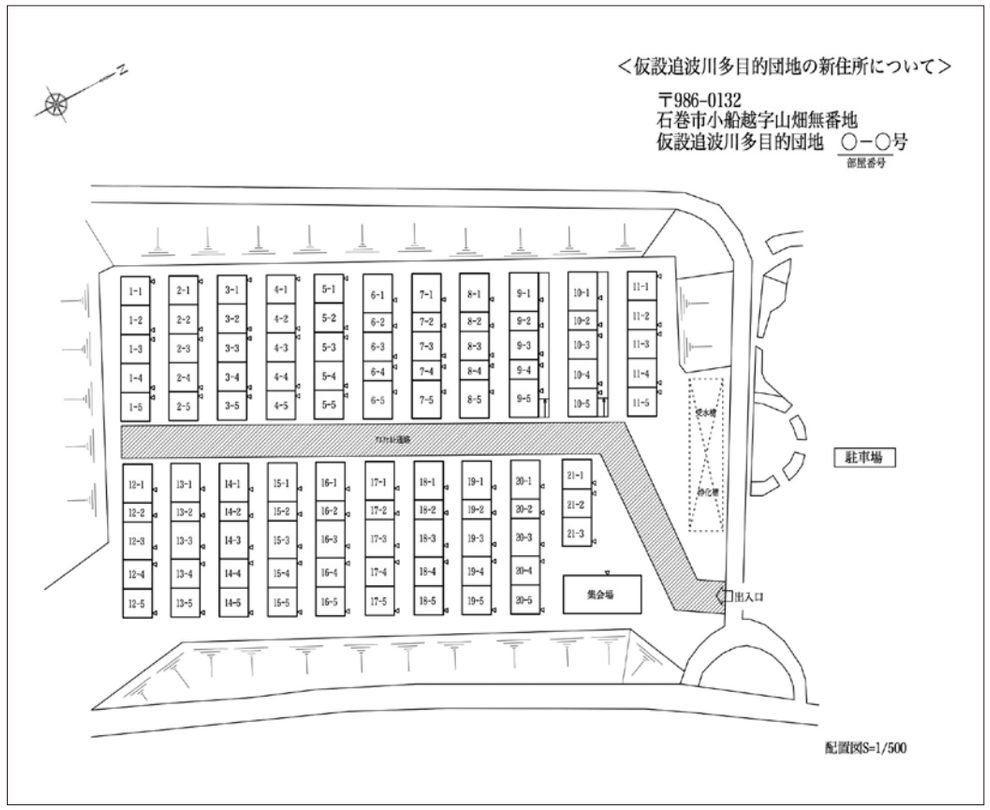
川崎市立西生田中学校では、中村純子教諭のもとで、授業を考案していただき実践いたしました。内容としては、中学校における道徳の授業で被災地の作品視聴とともにその感想をアンケートにまとめました。そして、実際にタブレット端末を用いたワークショップで実践活用をして頂きました。また埼玉県立大学では、同様の視聴講義とともに被災地との新たな関係性について学ぶ場を設けました。さらに映像制作ワークショップでは、「家族」や「自分」「故郷」などといった観点から、実際にタブレット端末を用いて、記録・編集作業を実践致しました。

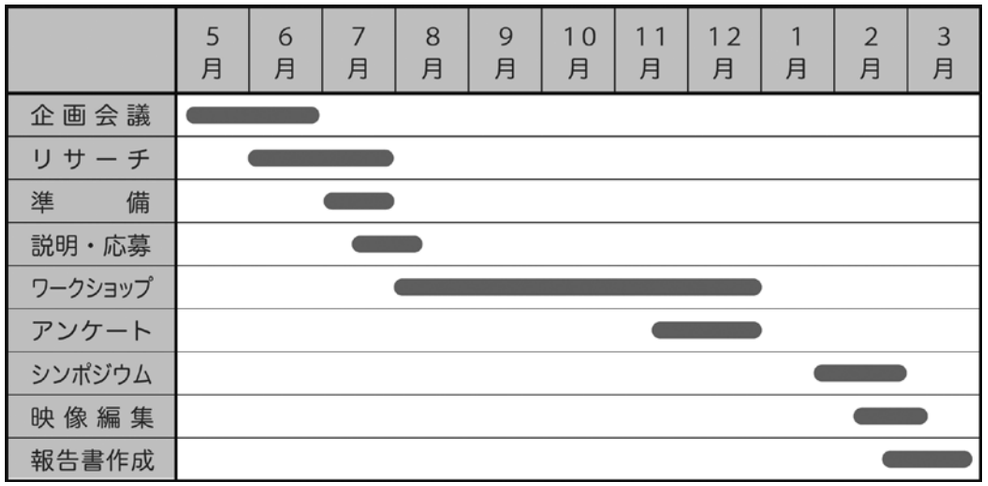
2．全国の保護者への アンケート調査と報告書の制作

ワークショップ事業に関する参加者のアンケート調査の他に、日本全国の教員・保護者95万人に向けて一斉にネットアンケート調査を実施致しました。内容は、「地域への関心」映像で記録することの関心」など、地域へ関心がどれくらいあって、記憶を伝えることへの大切さをどのように感じているのか、などの意識調査を行い、その結果を分析致しました。

4．シンポジウムの開催

本事業による「地域の教育力向上」への効果を検証するために映像を用いて、被災地の現状報告と本事業の各報告を行い、パネルディスカッションでは、参加者とともにさまざま質問に答え課題検証の掘り下げを行いました。





2

東日本大震災
被災地の現状と課題

宮城県石巻市

2 東日本大震災 被災地の現状と課題

遠藤学
NPO法人 DoTankみやぎ

遠藤さんは、宮城大学で社会教育系の研究をされていましたので
大震災を期にさらに復興に向けた主に仮設住宅等の市民の精神的な
健康をめざした支援活動を行っています。
今回のプロジェクトで、ご協力をいただきました。

今被災状況　南浜町にある門脇（カドワキ）小学校っていうところで、こちらは津波が２回ぐらいまではあるのですけども、そのあと火災が起きて、この火災っていうのは車の衝突による火災が起きて、一日中ずっと火事で燃えてしまった場所です。ここは津波によって、基礎ぐらいしか残っていない状態で、ほとんどみんななくなっちゃったエリアです。石巻の場合は、死傷者が３０００人を超えてまして、まだ行方不明の方も５００人ぐらいいるエリアです。雄勝地区の雄勝小学校というところで、小学校の上に本当は民家が乗っかっているぐらい津波で運ばれて。この公民館の上には大型バスが乗っかったりというような状況で、津波の高さが１０数mとなっていますけども、イメージ的には２０mも３０mも高いぐらいの津波が押し寄せました。この中学校の三階の屋上のほうまで津波を受けていて、このエリアは、街ひとつなくなりました。ほとんどの方が、雄勝の隣のエリアに河北町というところがありまして、そちらの方の仮設住宅に多く移られています。

石巻市雄勝町の仮設団地への分散

雄勝は、雄勝の５カ所の団地と河北の仮設団地に固まっています。自治会の区長さんの負担が大きいです。集会所管理となると役所が自治だと言って任せるのですがいろいろと介入はします。自治会組織になりきれないというところがあり区長さんの負担が大きいから逆にそういう集会所を管理する団体とかが別に入った方がいいなあと私は思っています。そうしないと区長さんが結局仕事で皆さんがいないとなると機能しなくなってしまうのでそうなると区長さんの都合でしかできないみたいになってしまうのです。そうすると活動とか支援も減ってしまうところがあります。そこの調整というのが必要です。河北の団地では今吊るし雛をつくっている人たちが、けっこう利用されています。僕らも支援で行くのですが、集会場を利用した支援のイベントは去年に比べると数はかなり減っています。住人の健康被害と心の病は、今ぐらいがいっぱい出てくるのでそうするとその専門家チームに継続的に定期的に来てもらわないとこまります。もともとDVだけの問題ではないと思うのですがそれが、噴出してきてしまうのです。数字としては出てないかもしれないですけど潜在的にあるというのは、聞いています。これからが大変かなと思います。

仮設住宅での子どもの課題

次に子どもたちの問題ですが、仮設住宅は住環境的に部屋が少ないので子どもの部屋をキープするということはまず出来ないです。仮設住宅なので隣の部屋の音が普通に聞こえて来ます。そういう意味では子どもの居場所がないというのが一番の問題だと思います。仮設住宅が建てられた場所というのは、だいたい公園を平地にして建てたり学校の校庭に建てるというパターンが多いので子どもたちの遊ぶ場所も奪われている状態です。そういう意味で子どもたちが集まって勉強したり、遊ぶだけでもいいのですがそういった場所の確保が、近々の課題ではあると思います。また学校自体が被災して教室を間借りされているお子さんたちは肩身がちょっと狭かったり学校自体が肩身が狭かったりというのがあります。また間借りされている学校には教育委員会も間借りということであまりちゃんと整備してくれません。学校備品について僕らで足りないのは何ですかって伺って支援したりしていたました。被災した状況でそういうふうになってしまっているのですが子どもたちが、悪い訳でもなんでもないことなのでその環境の整備というのは、早いうちにしないとそれも結局学力の差に結びついてしまいます。経済力の差だけではなくて被災してしまったことが原因で学力差が出来るというのはちょっと不幸というか次の世代につなぐためには、そういったところの格差も埋めていかないといけないかなと思います。

親子の遊び時間がとりずらい

親子の時間がなかなかとりづらくなっているというのは、確かにあると思います。勿論部屋もそうですがみんなゲームだったらゲームをしっぱなしの状態になっていいます。で親子で遊べる企画とか遊べる場所をキープできるような環境をつくらないと多分、これからの成長にも何かしら影響出るではないか。

長期的に調査に入る方々とか専門家がいるといいと思うとともに阪神淡路での調査結果があるならここで生かしてほしいと思いますね。新潟の方の地震被害もありました。だから何かしら災害で突然に環境が変わってそういったものでどういう風な状況に陥ってどういう支援をしたらどうなったかみたいな研究が何個かあればそういったものを複合的に見てどうものが本来求められるのかというのが、提示できると一番、いいと思います。今回の震災では、事例がいっぱいあるのですが数が多すぎて調査研究が追いつかないのかもしれません。ただ何かしら研究で入っていってもらった方が後々の人たちに重要なデータとか研究を残せると思うのでそこまで考えてもらえればと思います。

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3・11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

改めまして「NPO法人DoTankみやぎ」の遠藤です。生まれも育ちも石巻です。元は大学院で国際政治学などを研究していたのですが。自分の身の回りのコミュニティだったら少しずつ変えられるんじゃないかということで、ちょっと、街づくり活動を始めました。最初は本当にたった一人で始めて自分のお金を使って、事務所を借りて、みなさんの意見を聞こうというところから始めまして町おこし活動ということで、イベントなどを中心に行っていました。石巻は漫画の街、イシノモリショウタロウさんの漫画館がありますのでマンガを使ったイベントだったり、ホヤという食材が震災前に日本一の生産量だったのですが、そういったPR活動をしたり、あと環境問題に取り組んだり、職業の職育セミナーを、一般の市民の方に、自分のお仕事の話を、高校生や大学生にしてもらって、将来の職業選択に生かしてほしいというセミナー等をしていました。先ほどのように震災がおきまして僕も被災しまして、自宅は、二所帯規模半壊、津波が１ｍ５０ぐらい入りました。今は、両隣の家が解体されてなくなって、街中穴だらけになっているのですけども、そういったなか、僕も避難所生活させていただいて、その間ほかの避難所を回って、救援活動をしていました。炊き出しとか、ずっと救援物資を届けたり、１０月ぐらいまで本当に、休みなくそういう活動をしていました。だんだんですね、救援活動をしている中で、依存体質っていうようなものを感じるようになったので、これでは自立できないなと思ったので、産業的な支援をしようということで、何か月も、体験業務をやったりとか、子育て支援事業をやったりとかで、今は、地元の大学生と、こういう石巻の地図作りをしたり、石巻を紹介する雑誌「石巻人」を発行しています。ウエブの方でも地図づくりをしているところです。一つだけ問題点を絞って、コミュニティの問題を取り上げてみました。最初は避難所生活をしたときに、その時は、避難所の中でのコミュニティができるのですね。今は、次の段階に入っていて真ん中のフェーズというか、この段階に来ているのですが市街県外にも移住される方もいれば仮設住宅に入られる方、あとはみなし仮設といって、家賃を補てんしていただいて、入っている方とか、あと本当に自分の家に戻っている方とか。また、今コミュニティというのが生まれているのですが、さらに次の段階に入ろうとしています。今、復興住宅の整備が徐々に始まっています。これまでの流れを見ると、仮設住宅の中でもコミュニティが維持されている団地と、本当に抽選でいろんな地区から入った団地がありまして、それぞれの団地の性格があって、バラバラなんですね。それと仮設住宅は、支援が集まりやすいけど、他は、集まりにくい。みなし仮設とか、在宅の方というのは、そこにいるのかいないのかというのは、ローラーをかけないと分からないという状況で、そういった支援格差が同郷だった方々の、人間関係をこじれさせている要因にもなっています。仮設住宅は、本当に隣の家の会話が普通に聞こえてくる状態で、みなさんは、ストレスが溜まっています。みなさん、ちょっとデータがありましてDVの件数も増えているそうです。これが、関係者の方に聞きますと奥さんさけじゃなくて子どもに向うDVもけっこうあります。そういった子どもたちが学校に来ると様子が変わっていて分かるというお話でした。仮設住宅というのは、公園とか、学校の校庭にいっぱい建てられていて、遊ぶ場所がないのです。そういった中で子供たちは遊ぶ場所もなければ、部活動もなかなかできないような、状況です。そういった中で、小学校のこの前、調査があったのですが、低学年の方は２０％以上の方が体重の減少、成長が足りていないというデータと、逆に中高学年は１５％ぐらいが肥満になっているそうです。今、第３のフェーズっていうか、復興住宅の整備をしているところなんですが、石巻の地域内に移転したいという希望の方は５０％弱で、市外、県外に出たいっていう方は１８％ぐらいいます。だから元の場所に戻れない状況になっています。ある校長先生に伺ったのですけども、仮設住宅と仮設校舎での生活環境によって、今、すごく子供たちが我慢しているというお話でした。で、この我慢がどこで爆発するかわからない。今爆発するかもしれないし、その、復興住宅が整備された数年後に爆

DVの問題とトータル支援への課題

以前、学校関係の方からお聞きした話ですが、例えば、定職につけない親がいた場合にそれがDVになって現れて奥さんに対するDVもそうですがお子さんに対するDVというのもあるそうです。子どもが学校にくると様子が変なので先生方も気づくそうです。経済的な問題が親をそういう風にさせてしまっているということもありますがそれが、子どもにもおよび、子供たちが学校に来ると様子が変わっていて、わかるっていうようなお話でした。

被災地での地域の教育力向上を考える

僕は、石巻のものなので外の地域からの支援、例えば東京とか大阪とかあっちからこられた方よりは、現場になじみやすいというか石巻の人間なので入りやすいところは、あります。また震災前から「街づくり人づくり」そういうセミナーみたいなことをやったり、自分が講師で行ったりとしていましたのでそういう意味でも行動しやすかったことはあります。ただ今回の震災の支援で子どもたちや若者に体験漁業という形でその未来の漁業者を育成するということと今の漁師さんたちにも少しでも支援できればと、漁業をもっとひろく知ってもらうということをやっていると改めて地域が持っている「資源」は何なのかというところを強く思うようになりました。こちらの雄勝地区ですと漁業も盛んですし、すずりも盛んで、すずりも復興活動に取り上げられています。街づくりといっしょでその地域にしかないものは何なのかという改めて発見するなり、発掘するなりしてそれを次の世代にいかにつないでいくかというのが、地域としての教育力かなと思います。

本研究映像ワークショップの良さ

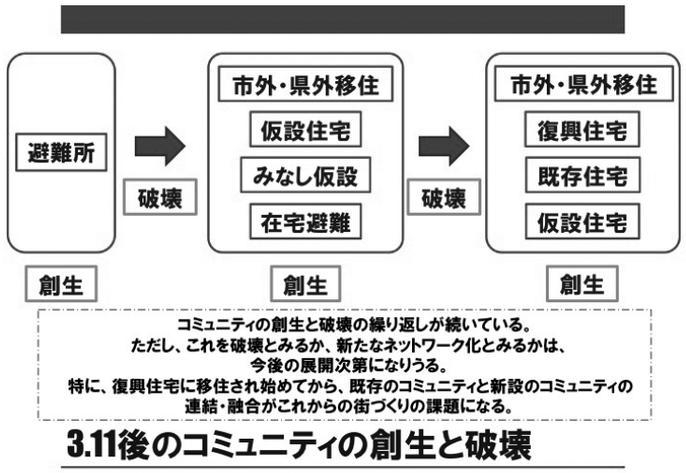
今回のipadを使ったり、というのは、多分普段あまり使ってないお子さんたちが多いこともあったし実際にまあ教えてもらってやるというとちょっとまた違う感覚になると思います。普段、ゲームしかやらない子たちもちょっとなんか大人っぽいことができるんだみたいなところがあります。普段写真を撮ったりとかはやっていたとしてもそこからさらに発展したことというのはあまりやったことがないと思うのでそういう意味では、面白い試みだと思います。これまでのプロジェクト支援事業は、参加した意見を集めて事業展開にいかすというとアンケートだけとって終わりという流れが多いです。今回、そのipadを使って動画編集となると今後ご家庭でも気軽に出来るという部分では、継続してノウハウ提供をするという形になると思います。支援の形というのは、いろいろあって物資提供だと多分、一回で終わってしまうのですけどその後にやっぱり、生きたお金というのも変ですがお金を使うけれどもノウハウを落としてもらうというのは、次の子たちにつながることだと思います。そんな違いを感じます。みんな支援となると物とかお金だけという意識が強いのですけどそうじゃなくてやはりノウハウだったり、いろんな教育です。そういうのをしてもらえた方が地域的なもともと教育レベルがそんなに高くないというのも言い過ぎかもしれない教育レベル的にやっぱりそういうあたり新しいものを教えてもらうとなるとそれぞれの潜在能力だけじゃく選択肢が増えていくそういう意味でいろんな刺激を与えてもらった方が地域の教育力が底上げされるのだと思います。

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3・11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

発するかもしれない。だから、そういったことがすごく心配だというお話でした。このコミュニティの変遷を見ると、創成と破壊ってちょっときつい表現かもしれないのですけれど、この破壊というふうに見るかどうか、それとも、ネットワーク化されて広がっていると見るかというのは、これからの人と人とのつながりの部分になってくると思います。

今回の被災した沿岸部っていうのはもともと、こういった地方の問題、特有の問題を抱えています。石巻ももちろんこれと同じですが、石巻の場合人口流出が今回の減少がけっこう激しくて、1万人ぐらいは震災後人口が減っています。これらの問題と実は、被災地特有の問題ではないのですが、被災地の中でこういった地方問題を解決できるモデルがつくられれば、おそらくほかの地方周辺都市にも応用がきくと思っています。今、震災というので、特に、工学系とか、都市計画の先生が良く復興会議だとか、研究で、出てらっしゃるんですけど、実はそういうハード面を整えたところで、そのコミュニティの問題まではなかなか解決できない。そういう意味ではいろんな学問分野の先生方や、そういったことを支援されている方々に、ご支援いただければ、新しい産業を生み出す可能性があると思っています。そういった、いろんな産業分野がつながっていくことによって、そういうつながりによって、これはセーフティネットになると思っています。子供たちが早い段階でそういった、産業だとかそういったノウハウに、早いうちから知り合うことによって、子供たちの選択肢が増えるんですね。今まで石巻っていうのはたぶん、アイパッドっていうのを子供たちもあんまり使ったことがない子も多かったので、こういったワークショップをしていただいたことはとてもいい刺激でしたし、やっぱりゲームはやるけど、それ以上のことってあんまりやっていない子どもたちだったので、こういったノウハウの提供っていうのはまさに教育っていうことだと思います。こういった将来的な進路の選択の中で、こういったことが、増えるっていうことは、これがやがて、生きる希望につながると思っていますので、今後も何かしら、いろんな支援を頂ければと思いますし、自立できる支援をしていただければと思います。

ありがとうございました。



3.11後のコミュニティの創生と破壊

復興支援の考え方

復興していくと簡単に十年二十年がスパンになってしまうとは思うのですが長期的な活動を皆さんにやっていただければなと思います。石巻も一万人減少してしまっています。市外、県外に出た方がもどってこれるかどうかというのとそれをもどす、何も残ってないところに強制的にもどって来いというのは、変ですけれど、「もどって来い」と言えるのかなという思いもあってそれは、ジレンマです。復興となると被災地だけを考えてしまうことが多いですが、震災で影響のない人はいないです。東北だけの問題じゃなくて日本全体の問題なのだということを根本的に考え直してほしいです。例えば、千葉だって液状化現象が起きたりとか長野で別の地震から派生した問題が起きたりとか被災したところは、東北だけじゃないし東北で今復興に向けて展開されていることは他のエリアにも生かせるような形にしていかないといけないと思います。今、これから地震がどこで起るかわからない状況なので逆に言うと阪神淡路大震災での皆さんが経験されたことが本来は東北に生かすべきだと思います。仮設住宅整備の問題もそうですが追加工事追加工事で何回もやっていて前に作ったノウハウが生かされていないのかと思うのです。これからの問題をどういう風に対処したらいいかというのがこの被災地で分かると思うのです。それは、教育分野に限らず、いろいろな行政も、僕らの民間団体もそうですがそういったところに生かせるようにみんなで連動しあえるような研究効果をあげるべきものだと思います。瓦礫問題も見ていただければ、分かる通り、石巻だけで100年分以上のごみの量が出ていてそれは、勿論一つの自治体では処理できない量です。放射能の風評被害がすごく多く、福岡でも受け入れ反対されていましたけど実際、放射能は、検出されていません。全国の皆さ正しい情報によって動いてほしいですし、正しい情報で支援してほしいと思います。

メディア等の映像との関わり

メディアについての課題です。地元で頑張っている人を出してほしいとすごく感じます。お店を再開した方、商店街の方、普通に自分の店を再開する方は、なかなか取り上げられない。復興しているところは、勿論取り上げたいし取り上げやすいけれども全体を見てもらえれば復興なんてまだまだ先の話です。東京から来ていた支援者の方も寄付がもう集まらなくて動けなくなっているという話も聞きました。今僕らも復興している店とか一軒ずつ廻っていってアンケート調査というか、そのお店の情報として被災からどう再開にいたったかというインタビューをして廻っていてウエブに掲載してそういったことでの宣伝で少しでも力になれればということがあります。またボランティアで25万人が石巻に来られたデータがあります。泥かきをした店が今こうなっていますよというのもみんなに知ってもらって今度は、観光客として来ていただいてお金を落としてもらうそういう風にしてもらえればなとそういう支援活動を今やっているところです。

自立できる支援を求めたい

事業展開をするというノウハウを提供したりとかそういった資金を援助して自分たちで自立するというのをこれからしていかないとなりません。雇用がぜんぜんできていないし、失業者が多いということ再開できない人が多いです。高齢者の方でお店を失った方は、希望が持てない、夢が持てない、そういった方たちが、少しでも何かしらこう希望が持てる子どもたちも勿論大事ですけど、そういった方々にも何かしら次のステップになる事業展開というのを僕らだけでは勿論できないので行政の方とも民間団体、企業さんもそうですけどそういったものを被災地でいかにその新しい事業展開すると社会貢献になり、雇用が生まれるというのを支援として考えていただけたらと思います。

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3・11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

3

石巻での映像ワークショップから見えたもの
研究報告

石巻での
映像ワークショップから
見えたもの

佐藤博昭
服部かつゆき

3 石巻での映像ワークショップから見えたもの

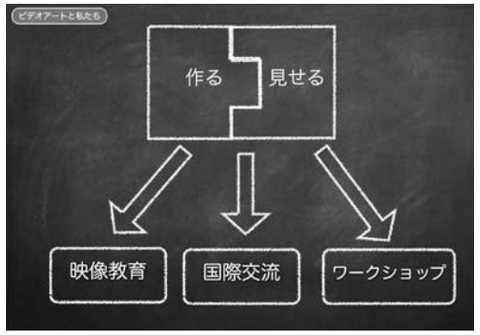
佐藤博昭
ビデオアーティスト
日本大学非常勤講師
ワークショップ講師
各種審査員公民館等で大人と子どものワークショップで活躍

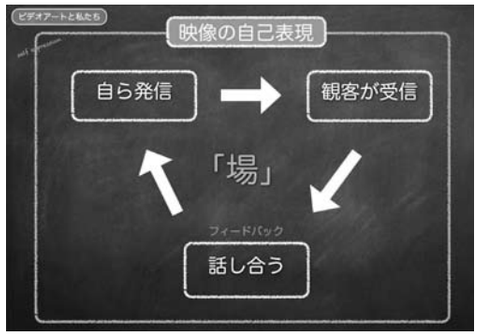
佐藤です、よろしくお願いします。僕と服部かつゆきは、今回のワークショップのデザインと運営をやらせていただきました。これから実際にそのプログラムがどのように進行していったかという経緯と、そこから我々なりに見えてきたものを見ていただこうと思っています。

今回、我々がワークショップで使用したiPadですが、このiPadで何ができるかということは、我々にとってもひとつのチャレンジだったわけです。我々は「映像」のワークショップを行ってきたわけですが、今回はこのiPadを使ってのワークショップをやってみようというのが、ひとつの課題だったわけです。それで、ちょっと簡単に我々の自己紹介をさせていただきたいと思います。僕も服部さんもビデオアートというひとつのバックグラウンドを持っています。ビデオアートというのは映像表現なのですけれども、どういうことをやっているかというと、自己表現の手段として映像を使っていくというのが主なところです。それでその中にビデオアートというジャンルがあるわけです。作るということと見せるということが、一体になっていくような形のものを考えています。ビデオアートというと何か、小難しい芸術表現の映像で、見ていてもよく分からないとか、そういうような印象があるかもしれませんが、実はビデオアートの初期にコミュニティビデオということに着手した人がたくさんいたわけですね。もちろん「映像」の中心には当たり前のように作る・見せるということがあるわけですけれど、その形が変わっていくということが重要なのです。つまりテレビというシステムがあって、テレビ制作者というプロの人たちがいて、そこから大量の情報が一方的に流れていくということが従来のテレビのスタイルです。それに対してビデオアートというもの、つまりビデオカメラを手にした一般の人たち、あるいは芸術家の人たちが、じゃあどうするかという時に、もうひとつ別の文脈のものを作れないかって考えたのが、ひとつのビデオアートの原点になります。それは芸術という表現でもあったわけですけれど、もうひとつはコミュニティの中に、テレビを大きなネットワークから解放して、作る・見せるというのが小さなコミュニティの中で成立しないかということを模索した人たちがいます。我々が今やろうとしていることもそういうことで、そこから派生して映像教育あるいは国際交流であるとか、もうひとつ別の流れとか、色んなことができるひとつの循環だと思っています。映像教育、国際交流、ワークショップなどを含めて、その活動そのものも我々の表現活動であると考えています。映像とアート表現というものを、こうした循環の中で考えていくということです。

それで、個人映像・ビデオアートの共有の「場」というのは、美術館とかギャラリーとか、この会場のようなスペースですね。あるいは今回行ったようなワークショップといったところで共有されていく活動だ

というふうに僕らは考えています。映像の自己表現ということは若干、テレビ番組を作るということとは違っています。ひとつは、まずは自分自身がその映像の発信者になるということが挙げられるわけです。その発信された映像をもとに、色々と循環をしていくというプロセスがあるわけです。とにかく自ら発信していくということが、我々にとっては大きなテーマのひとつです。つまりビデオカメラや発信するシステムを、自分たちの元に引き寄せていくということです。そのことをもとにディスカッションしていって、それがまたフィードバックされていくという、こういう循環を作っていきたいというのがワークショップの中の大きな目論見としてあるわけです。こういう循環をひとつの総体として考え、映像を自己表現として、あるいはビデオカメラを、自分自身の考えを発信するための道具として使っていくことができるのではないかということです。

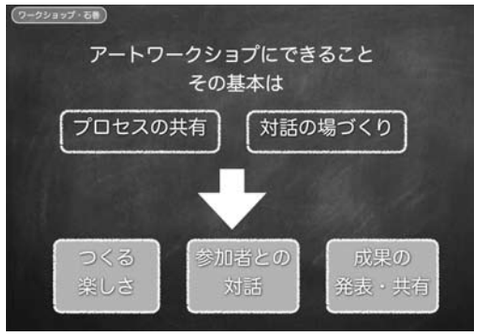




これから、具体的に僕らがやってきた色々なセミナーとかワークショップの事例をちょっと紹介します。国際交流とか、例えば中東の学生たちと映像制作を通じてつながっていくということ。それからこの写真は、マレーシアのアーティストや学生たちですね。この写真にあるのは、USM・マレーシア科学大学です。そこでも我々の活動を紹介したりというようなことをやっていました。その後は、マレーシアからアーティストたちを呼んで、日本で彼らの作品を紹介するというようなことをやっていました。色々やってきたのですが、この写真にあるクラッシュ・パッドというのは、マレーシアにあった児童館のような施設なのですけれども、ここは美術館と政府からの助成金あるいは企業からの寄付や助成金で運営されている小さなコミュニティ・スペースです。このエリアというのがあまり豊かでないエリアでした。それで周りもあんまり治安が良いとはいえなくて、この地域に住む子どもたちが放課後に通ってきてここに集まって勉強したり、楽器の演奏をしたり、いろいろなことをして楽しむ場所です。僕らがマレーシアに滞在した期間の中で、ぜひこのクラッシュ・パッドというところで、一日のワークショップをやってくれないかという依頼があったので、この時はビデオカメラを使って、石巻でやったようなことをここでもやってみました。とにかく、「みんなで遊んでみよう」というなことをやりました。

こういう経過で我々は、いくつか日本でも小学校でワークショップをやったり、あるいは中学校、高校、それから今、東京都新宿区の大久保、新大久保の地区でも「しんじゅくアートプロジェクト」を母体にして、子どもたちとワークショップをやったりしています。その流れの中で今回、石巻でワークショップをやってほしいと依頼をされました。

その時に課題として考えていたことは、ひとつは石巻の「子ども」を中心にしていく。それから石巻という固有の「地域」です。そこに映像が加わった時に、そこで何が現れてくるのかということです。さらに、被災地という状況が重なってくる。この、子ども・地域・映像。今回は、ある意味で特別なことがあった土地で、何ができるのかというようなことが、我々にとって大きな課題になっていったわけです。課題として、こう



いう「被災地・地域・子ども」というようなことをキーワードにしていきながら、我々がどういうふうに考えていかなければいけないかということがたちあがってきました。

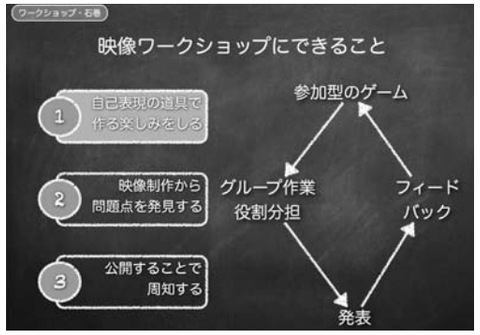
これはアートワークショップというもののひとつの前提だと思いますけれど、プロセスを共有していくっていうことがすごく意味があることだと思います。ワークショップというのは、ずいぶん言葉としては普及してきましたが、まだまだ誤解の多い言葉です。「ワークショップって何ですか？」というようなことが釈然としない部分もありますね。それでいわゆる住民参加の公聴会とか住民参加をしてみんなで意見を出した、みたいな形で、極端なことを言うと事業推進のアリバイ作りみたいに使われることがあるのです。アートワークショップ、つまり何かを作っていくということを前提にした場合の基本というのは、そのプロセスを共有していくということ。それから、対話の場をちゃんと作っていけるかということ。その「場」そのものに意味を見いだしていこうというようなことがアートワークショップの中にはあります。

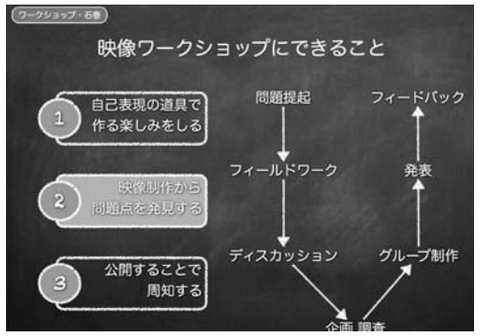
そこで出来上がってくるものというのがあるわけですけれど、それが今回は映像なんですね。その時にまず我々が考えたのは、「作る」ということを面白がってもらいたいっていうのがありましたので、子どもたち、あるいは地域の人たちが「作る楽しさ」を知っていただきたいと思いました。それから対話をする中で一体どういうことが生まれてくるのか。これはあらかじめ想定できることではないんですね、その場で対話をしていくっていうのはその時々の展開ですから。そのことをどれぐらい、我々の作った場が包括していけるか、共有していけるか、大事にしていけるかっていうようなことが問題になりました。そして、そこで作ったものを、参加者全員で共有していくということがまた非常に重要なことです。今回の場合はできあがったものをみんなで見て、それに対してみんなでわいわい「良かった」「もっとこうすれば良かった」っていうようなことを話し合ったりするわけです。その成果を発表して必ずその場で共有していく。これを持ち帰って、成果を見るまでにタイムラグがあったりするとまたちょっと違ってきます。その場で「今日やったことはこういうことだったんだよ」っていうのを、参

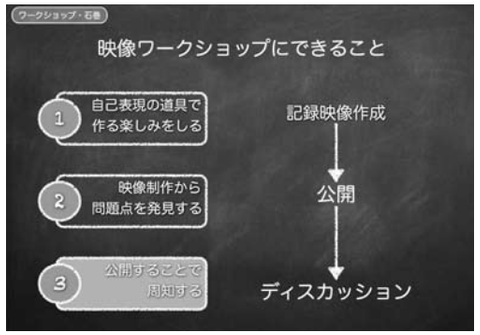
加者が持ち帰ってもらうことは非常に重要と考えています。

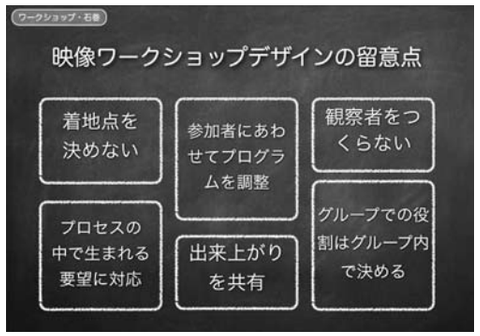
「映像ワークショップにできること」を考えるうえで、アートという側面から映像表現に少し絞りこんでいきます。図にあるように、映像の中でできること、これはまあ、さっきの点と同じようなポイントなのですけれども、「自己表現の道具で作る楽しみをしる」、それから「問題点を発掘する」、「公開することで周知する」というようなことがあるわけですが、この三つは同時に起こりうることでもあり、段階的に言うと1番、それから2番、3番という順番に進んでいくようなステップだと思います。つまり1がその導入の部分ということになるでしょうか。それで、2番目が問題提起。これはいわゆる「まちづくり」の中で行われたりすることです。こういう町の中でどんな問題があるか、その問題をきちっと発見して実際に地図を持って町を歩いて、その問題点を抽出して、ディスカッションをして、そこからどうすればいいか、というような段階に入りますね。その過程で「映像を自分たちでつくること」が使われることもあります。3番目の部分っていうのは、もっとプロフェッショナルな仕事になってくるわけです。記録映像を作って、それをもっと大きな形で公開する。そのことによって、たとえば被災地の状況であれば記録映画を作って被災地の状況を色々な地方で公開するというようなことです。

こういうことが映像ワークショップでできるわけですけれども、この場合、我々が留意した点というのがありまして、それはまず、「着地点を決めないでおく」ということです。これはワークショップの方法のひとつの問題点として時々指摘されることですけれども、あらかじめ準備された到達点があって、そこに誘導されていくようなワークショップというのがあります。これは僕らは絶対にそれをやらないようにしようと決めています。それから次が、参加者に合わせてプログラムを調整していく。これも僕らは、理想的なワークショップというのはお客さんたちと対面した時に初めて、顔が見えて初めて今日何をやろうっていうのが、実は理想的なプログラムだと思うのです









が、あらかじめ用意されていたプログラムを参加者の人数とか年齢とかそういうことで少しずつアレンジしていく、そのアレンジをできるだけの幅を持って臨まなければいけないと思っています。

それから、グループ作業をする場合もそのグループの内部で役割を決めてもらう。これは学校なんかの場合、時々あるのですけれど、「○○ちゃんが、よくリーダーシップ取っているから彼女にやらせたら良いんじゃないか」とかそういう話もあるのですが、我々の場合はもう、その内部で、メンバーで話し合って、今日誰がリーダー、誰がカメラっていうようなことを決めていってもらっています。制作していく過程の中で、もっとこうしたいとかああしたいということが出てくるわけですが、そういうことに対してもできるだけ対応していけるようにフレキシブル視点を持ちたいということです。

それから、できあがりを共有すること。これはもう必ずいつもワークショップでやっていることです。それから、これ意外と重要なのですが、「観察者を作らない」というのは、そこに集まった人たちにできるだけ参加をしてもらう。我々がワークショップをやっていると、見学に来られる学校の先生がいます。その場合も、目的は見学でいらしたのですが「どうぞ一緒にやりましょう」という感じで参加をしてもらう。オブザーバーのような役割の人がいると、どうしても内部で盛り上がらない時があるのです。見学者が居てはだめだというわけじゃないですけが、できるだけ観察者を作らないということが重要かと思っています。

今までお話ししたようなことを総合して、今回は石巻の2ヵ所が想定されていたわけです。ひとつは石巻寺子屋とい場所です。もともとは避難所に集まっていた子どもたちがその後、石巻寺子屋という施設、児童館というふうに言ってもいいのかもしれないですけど、放課後のスペース、学習の場所であったり、独自に寺子屋でイベントをやったりもしているのですけど、そういう子どもたちのための場所です。それからもうひとつが、仮設住宅、追波川というところの仮説住宅でした。その2ヵ所で実施する時に、図にあるような献立を用意して、これを全部やるということではなかったのですけれど、その参加者によって、このプログラムの中からアレンジして少しずつやっていこうと考えて臨みました。いくつか写真がでました

が、子どもたちがiPadをまず触ってみて遊んでいるところですね。それから上映の様子です。最後にみんなで見ているところです。これも女の子のチームが「私の好きなもの」ということで、寺子屋にあったピアノを撮っているところです。それから、この写真は追波川の仮設住宅の方ですが、これは公園の敷地内に仮設住宅が建っていまして、その中の集会所です。ご覧のように割とお年寄りの方もいらしてましたし子どもたちもいらっしゃるという、非常に年齢の幅というのが広かったです。これはしりとりビデオを作っているところです。この時に我々スタッフの、先ほど紹介した斉藤先生も一緒に行っていまして、このチームの中に入ってみんなで遊んでいたのですけれど、実は大人チームは大人が夢中になって一生懸命遊んで楽しんでいたという、そういう状況がありました。

これは「しりとりビデオ」ですね。「赤いカメラ」っていっていますけど、「あ」になったので服部さんがぶら下げていたカメラを撮って「赤いカメラ」って言うと。そういう、いくつかの課題のようなものを用意していたのです。これは、さっそく見ていただこうと思いま

すが、いくつかの課題、段階がありまして、自己紹介をしていって、みんなで使ってみる、自分を撮ってみる。そういうところからスタートして、次に「しりとり」をやってみようか、とつながっていきます。それから宝探しというのが出てきますが、宝探しというのは紙に書いて、指令を渡すわけです。このグループに　赤いもの、黒いもの、白いもの、そういうものを探して撮ってきなさいと指令を渡す。撮ってきた映像を僕らが見て「お、これは確かに赤い。確かに白い」などと確認します。まあ、そういうふうに色を探してくるというようなことをやって、その後に今度は「動くもの」とか「回るもの」とかそういうものになってきます。そして、「楽しいもの」とか「固いもの」とか、少し工夫しないと撮れないものに難易度を上げていくというようなことをやってきました。そこの一連の作業でどういうものができたかというのがここに短くまとまっていますので、それをご覧いただこうと思います。よろしくお願いします。

《映像》

最後のがボールリレーというプログラムだったのですが、ボールリレーというのはコマーシャルの応用です。ボールを投げて、次にいろんなところで取って、それを撮る。ボールを取って次の人に投げると、また別の場所で取って、でも映像上で見ていくとつながっていくように、ちゃんとキャッチボールされているように見えるというわけです。それをいろんな参加者全員でやってみようという課題です。まあ、ゲームなわけですが、意外とこれは、いろいろなところでやって評判が良くて、みんなが面白がって、どうやったらボールがちゃんとつながっているように見えるのかとか、意外と高度な映像的な感覚を要求されるのですよ。ただ、だんだんやっていくうちに覚えていきます。さっきこっち側に飛んだから、今度こうやって撮らなきゃとか。やっていることと映像がつながっていくっていうことも同時に覚えていくことができて、もちろん最後にみんなで上映をしたわけですけれど、とてもみんな面白がってもらえました。

このあと、服部さんから、このワークショップで見えてきたことで、補足を一部していただこうかと思います。

服部かつゆきさん

ビデオアーティスト
日本工学院非常勤講師

佐藤さんといっしょに親子や、
小中高校生のさまざまなワークショップの講師を務める

服部：さっきプレゼンテーションをしていたのが、この二つの課題です。【子ども】と【地域】と【映像】をキーワードにワークショップで何ができるのかということ。 そして、被災地という特別な場所で映像ワークショップで何ができるか。これらを我々は考えたんですね。

4日間も石巻に滞在してワークショップをやったので、現場はダイジェストでご覧いただいたようではまったくありませんでした。そこには載っていない良い映像、悪い映像がたくさんあるんですね。それらは今iPadの中に入ったままになっています。

そういった映像には面白いものが残っていて、参加してくれたそれぞれの人、もしくは映像を撮った人たちの不思議な共有の範囲というのを持っているんです。そんな面白い話ををちょっと皆さんにしたいと思います。

石巻寺子屋のワークショップで 面白い男の子が一人いたんです。彼には事前に準備するものを伝えておきました。【自分の好きなモノ紹介ビデオ】を作るからといって、宝物を自宅から持ってきてもらっていました。彼は企画に意欲的で、ワークショップの最中、僕に何度も「いつ宝物の撮影をするんだよ」と問いかけていました。僕らもオトナですから順序ってものをわきまえて「ちょっと待っててくれない？」「もうちょっとしたらね」とはぐらかしていました。で、宝物を撮影する段になって、彼は不思議な主張をしたんです。 僕はてっきり宝物を持ってきたんだから、みんなに見せて自慢したいのだろうと思っていました。でもどうやら持ってきた宝物は、グループの人にしか見せないと言うんです。

「え？」っと僕は思ったんです。

さらには、絶対に見られたくないから「トイレでとろう」ということで、グループの3人で男子トイレに入って、しかも、色々な事情で大便器の真横で、宝物撮影をすることになりました。トイレはとってもきれいだったのが幸いでした…。

そこで彼は背負っていたリュックから宝物を三つ出してくれたんです。皆さん、どんなものだと思いますか？三つ？ 想像してもらいたいんです。でも実はこれ、彼と約束したので公表できません。皆さんの頭の中で三つのイメージを思い浮かべてもらって、多分マルがいいでしょうね、丸かったと思いますよ。その三つを想像しながら次の展開を聞いてもらいたいんです。

ええと、彼はですね、そのトイレで、 iPadに向かって彼にとって何故その三つが大切なのかを語ってくれたんです。それはもちろん彼が体験した、地震と津波と、彼とその宝物との関係を話してくれたんです。その映像はiPadの中に今も残っているのです。

撮影する時、僕は問いただしました。「いいの？ 他のみんなに見せたくないのに、これ撮影しちゃっていいの？」って聞きました。それでも彼は、「撮影したい」て言うんですね。 だから、そこで撮影をして、確認をして、「ちゃんと撮れてるねっ」といって制作時間を終えました。

さて、さっき佐藤の話でもありましたが、僕らのワークショップは作品を常に共有しています。最後にみんなで集まって、できあがったものを見ることになりました。その時、僕は「宝物ビデオを見せていいよ」と彼の気が変わるんじゃないかと期待していたんです。 ところが彼は「絶対に上映をしないでくれ！」と強固に拒んだんです。

無論、上映はしませんでした。

なので、その三つの宝物のビデオは制作に立ち会った3人しか見ていないということになります。僕たちはここで、ここにいらっしゃる皆さんはおそらく二十歳以上の方が多いので、この彼の気持ち、この映像に対する複雑な想いを理解できると思うんですね。

それは僕たちが、自分のカメラで撮った写真や動画を、誰には見せられて誰には見せられないか、と悩むのと同じなんです。この悩みっていうのは、おそらく写真の技術が始まった、二百年くらい前ですか、その時代から始まった永遠の悩みなんです。我々の知の共有のための課題だと思うんです。

彼は、小さなグループで自分の宝物を共有したいと思ったんです。だから宝物を撮影したいと思った。でも、その時にはまだ小さなグループの3人以外の他者とはこの映像を共有したいと思わなかった。そういうことなんです。でも、おそらく震災直後は自分でしか共有できないものだったのでしょう。それが徐々に広がって3人に広がった。願わくば、もうしばらくしたら、もっと多くの人に彼の三つの宝物を見せられる様に育って欲しいですね。

映像ワークショップは、こういった個人がもつ価値観の共有範囲を確かめあいながら、共に成長してゆく作業なのだと思っています。これが、佐藤が掲げた課題への解答を提供するのではないかなと考えているのです。

石巻ワークショップ予定

２０１３年８月　７日	石巻市山下町	「いしのまき寺子屋・放課後こどもクラブ」
２０１３年８月　８日	石巻市　仮設追波川多目的団地　集会所	
２０１３年８月　９日	石巻市　河北総合センター文化ホール	
２０１３年８月１０日	石巻市山下町	「いしのまき寺子屋・放課後こどもクラブ」

ワークショップドキュメント

２０１２年８月７日１０日（石巻市山下町　　記：西条
「いしのまき寺子屋」代表　高橋信行さん
事務局長　太田美智子さん

「いしのまき寺子屋・放課後子どもクラブ」が正式な名前です。代表の高橋さんと、事務局長の太田さんにお会いできたのは、いわき市から東京に避難してこられた方のご紹介があったからです。「東日本大震災圏域創生NPOセンター被災者サポートセンター」が母体です。避難所で避難しながら避難された方々のお世話や、子どもたちの居場所づくりのサポートを育んで来られたチームです。仮設住宅に移られてからは、放課後や夏休み等に学習サポートやキャンプ、芸術活動や総合学習に取り組まれて来ました。ここにお伺いした時、沢山の活動をされてきた中、子どもたち自身による子どもたちの映画を子どもたちで作らせたいと考えていらっしゃるところでした。2013年の夏に国際交流があり、そこで上映ができたらということでした。私どもの実行委員会のねらいとする内容に合致するところがあり、最初のワークショップの活動として取り組ませていただきました。目標は、高橋さんのご要望である「撮影する楽しさ」と「撮影の技術や方法を楽しく学ぶ」、またリーダー教育も生かしたいということがありました。はじめ、子どもたちが、興味を持って取り組んでくれるのか、心配ではありましたが、実際にやってみますと、普段の自主性や、行動力が発揮されて、グループで仲良く積極的に活動を楽しんでいる姿に出会い、このワークショップの子どもたちの手応えを多いに感じさせてくれるものとなりました。（いしのまき寺子屋の学生サポーターさん達にご協力いただきました）

8月7日 13〜16時

いしのまき寺子屋 ワークショップ

高橋　１時から４時までの３時間で合計６時間でテレビカメラを使ってiPadを使ってみなさんで映像を作ってもらいます。教えてもらいますのでしっかり習ってこれから自分たちでも撮影が増えるとおもうので是非、この機会に学べるところは、しっかりと、楽しい２日間よろしくお願いします。服部先生です。

服部　もじゃと言います。なんでもじゃと言うでしょう。分かった人？ 違うと思う人。
（子供たち）はい　はい。頭がアフロ。髪の毛がもじゃもじゃ。髪の毛がすごくもじゃもじゃしている。髪の毛がランボーに似ている。髪の毛がふわふわに見えるから。

服部　そうです。みんなあっています。もじゃと今日は、佐藤先生二人でみんなといっしょに映像を作って行きたいと思っています。よろしくお願いします。みんながいっぱいいるので、佐藤先生も僕たちは、年をとっているので名前が覚えられないのでみんなにニックネームをつけてもらいます。ぼくをもじゃと呼んでください。（ガムテープに「もじゃ」と書いて胸に貼る）みんなにもこれを作ってほしいんです。

佐藤　これからやることを簡単に説明します。今日と１０日にやることを説明します。何をやるかというとみんな、テレビは、見ていると思うけれどもパソコンでもね。YouTubeとかね見ているという人がいると思います。好き？ YouTube.（好き）　見てるよね。作ったことある人いる？ビデオで。作った事ある？（ない）作ったことないよね。いつもは、こう見てるでしょ？誰かが作ったものをね。この２回で自分たち

でね。作ってみようと思います。自分たちで作ることができたら楽しそうだなと思わない？（気持ちいい）作ってる？（ビイエスで）本当、作ってる？この２回のね。教室でね。上手になろうね。でね。編集ということが、あるんです。撮ってね。撮った映像を見るということができるよね。撮って見る。だけどそれを上手にね切ったりして短くして上手に並べて行く作業もあるんです。編集ってね。そういうことができるようになるともっと面白くなるのでね。この２回の授業だけどもみんなできるようになろうね。これ、知ってる人？【iPadを見せる】（はーい）使ったことある？（ある）

服部　おうちにある人（ない）（手をあげている）そしたら使ったことあるね。

佐藤　写真を撮ったことある？（ある）あるんだ。（ない）じゃあ早いね。今日は。これをみんなでね。後でさわるんだけども、まずは、僕の言うことを聞いてね。みんないいかな。みんなでいっしょに進むからね。いい？そしたらね。これを、みんな今、見えてるね。ああ映ってる。ぐるって回るよ。【iPadで友達を映して見せる】これをこういう風にして向けて（映った）それともう一つね。これ反対にできるんだ。こうやって（ああ外カメラ、内カメラね）そう　今度こっちは、自分たちが映ったよね。自分たちが、そうそうレンズそこなんだよ。ここを押さえられると撮れない。ここにレンズがあるからね。そうそう。
指をはずしてあげてくれる？ようしいい？　映ってる。（わあ）こういう風に映るんです。それでこれはiPadというのは、ガラスみたいになっているでしょ。だから、ちゃんとこうやって見ないと、これを落っことすと割れちゃうんだよね。だから自分がこれから撮るときは、ちゃんと落っことさないようにしっかり持って撮る。いいかな。これ、壊れちゃうとね。こまちゃうから。落っことさないようにね。勿論、踏んじゃったら割れちゃう。いいかな。だから大切に扱ってくださいね。

服部　分かった人。（はーい）良し！オーケー！

佐藤　みんな、ニックネームをつけたよね。それでまず、最初に自分をこうやって自分の顔が真ん中にくるようにこれを向けてそれでここにスタートボタン、赤いスタートボタンを押すと押している間、撮れます。今撮れてるよ。赤いのがピカピカついている間は、今、撮れています。ビデオがね。それでもう一回押すと、止まってヒュッと撮れたものがここに並んで行きます。【自分で撮る】順番にみんな自分の名前を言ってください。今見本を見せるからね。同じようにやってくださいね。「はいこんにちは、佐藤博昭です。僕の事は、佐藤さんと呼んでください。」で押す。押すと今僕が、しゃべったことは、ここに撮れました。同じ事できる？○○さん。良し！○○さん（無理です）これを持ってごらん。できるよ。みんなできる。しっかり持って自分に向けてごらん。自分に向けて僕の名前は、このボタンを押して自分のニックネームを言ってください。（服部、何故映らない？左手の親指がレンズを隠しているから）座ってやってもいいよ。みんな座ってやってごらん。まず、押して（ぼくの名前は　○○です。）もう一回押して。おーきた。（服部　撮れた）次は、○○さん…。撮れたか確認してみよう。

佐藤　今、一つのiPadでみんなでやったよね。今度ね。もうちょっと沢山、触れるようにグループを作りたいんだ。４人で一つのグループになりたいな。どうやって分かれたら良いですか？これを４つのグループに

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3・11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

分かれるためには、どういうグループがいいだろう。（好きな人グループ）好きな人グループで４人になれる？（うん）なれる？良し。

服部　じゃあなってみよう。（なった）（もうなったよ）（はやいでしょ）

佐藤　これを人に見せたいな。自分の自慢、カブトムシだったりね。あるいはここにあるものでもいいし、自分の友達、お友達でもいい。自分の好きな人、好きな物、好きな場所、この近くに例えば、～公園があったり、私は、その場所が好きなんだったらその場所をね。ちょっと紹介してもらう。この中のこの絵が大好きですとかね。私の書いた絵は、これです。とかそういうものがあったら、そういうものをさっきのiPadでこうやって撮って撮りながらこれは、何ですっていうのを説明してあげてほしい。これは、僕が大切にしているカブトムシです。名前は、○○と言いますと言ってビデオに撮ってほしい。そうやっていろいろ自分の好きなものをこれで撮って紹介してほしい。それをグループで一つ使って沢山、紹介してほしい。例えば、好きな人大好きな仲のいい人、なになにちゃんです。何何ちゃんは、いつも私とどこで遊びますとかね。あるいは、この靴が、お気に入りです。そういうことでもいいですよ。鞄とか。自分が持っている物でもいいよ。自分が持っている物を自慢してくれてもいいよ。これ、かわいいでしょとかね。（今ない。家にある）よし、１０日に持ってくるんだ。（１０日は、プールがあるから休むんだ）休むのか。今からやること分かった人。はい。（みんな手をあげる）だいたい分かったね。はい、そしたらね。

服部　グループごとにリーダーを決めましょう。（はい、じゃんけんで）リーダーを決めて、リーダーの人は、iPadをこちら「もじゃ」の方に取りに来てください。まだ、グループができていないところは、また友達がくるでしょう。来たら決めてください。（多数決でやろう、多数決で自分以外で、ふさわしいという人。自分以外で。じゃんけん、ぼくやりたくないからあなた。そうなの。この人リーダーです。）リーダーの人、リーダーの人、取りに来てくださーい。リーダーは、だーれ。次。

佐藤　落っことさないでね。それ持っているときに、ふざけちゃ、だめだよ。（カブトムシ映す）落っことさないようにね。（始めていいの、始めはさ、ハム太郎、やるときでいいよ）グループで考えながら。

服部　じゃあみんな、iPadを持ったかな。

佐藤　みんなこっちを見て。

服部　まずは、グループで他のグループのiPadを見てください。みんな同じでしょ。わかんなくなっちゃうよね。なのでみんな自分でこのiPadが自分たちのグループだって分かる事をやってもらいたいと思います。iPadの使い方を教えます。もじゃ先生のもいっしょです。みんなが持っているこのガラス面のところ、ここにボタンが一個あるよね。裏返してボタンがどこにあるか見てください。ボタンが、どこにあるか見てください。何個ボタンがついているかな。機械に。（１個）表に一個ついているよ。裏見てください。銀色のところにボタンが何個かついています。これもね。大切な機能のひとつです。後で使うよになるので今は、ここにボタンがあるんだよって覚えておいてください。じゃあ表に向けてはい。ボタンを押してください。このボタンをホームボタンといいます。この画面でロック解除というのが、あるのでそれを横にするとロックの解除になります。みんな画面には、カメラのボタンがあるのでカメラのボタンを押してカメラを起動させてください。はい。カメラを持ってください。いいですか。カメラを持って先ほどと同じようにビデオ、もしくは、写真を撮ることができます。今度は、写真を撮ってください。グループでみんなが映る写真を撮りたいと思います。画面の一番右下のところにカメラのマークとビデオのマークがあるところがあります。分かるかな。ここを一回、クリックするとビデオと写真の切りかえになります。写真のマークにしてあげてください。そうすると写真が撮れるでしょ。写真撮れるかな。では、お互いに順番にiPadをまわしてチームのグループの一人、一人、写真を撮ってください。写真を撮ったら。グループの写真を撮ってください。そうしたらグループのメンバーで順にまわして撮ってください。みんなの写真がiPadの中に残るようにしてください。かわいく撮ってあげてね。もしくは、かっこよく撮ってあげてね。（こっち向いてパシャ、ここを押すと写真が撮れる）（ふふふ、オッケー、良し）

服部　みんな撮れたかな。かわいく撮って一回、撮ってだめだったらもう一回撮ってあげてね。

じゃあ次、いいかな。グループごとに考えてください。グループのみんなが１枚の写真に全員同時に映るようにどうやったら撮れるかな。頑張って撮って。（分かった）全員同時に映ってる？（真ん中いやだ）そういう感じで。（できた）（いえー）（ふふふ）（ははは）撮った写真を確認した人たちもいると思うけど写真の確認をしましょう。撮った写真を見てください。

カメラのこの画面の一番左側の小さな写真のアイコンと言うのかな。ボタンがあるから、ここをクリックするとはい、撮られている人が、出てます。今度このコンピューターのiPadのボタンを押してロックのこの画面に設定してあげたい。後、もじゃ先生のは、このロックを押すと別の写真が映っています。どうやってやるのかな。これをやってください。みんなそれぞれのグループでそれぞれユニークな画面がね。設定されるようにしたいと思います。カメラの画面から、自分の写真を確認してまずは、グループ全員が映っている写真を開いてみてください。（斉藤　よく映っている）ごみ箱押すと写真が消えちゃうからね。ごみ箱押さないでね。その横に、ちょっと小さな右上に向った矢印をピット押します。矢印をちょっと押してあげるとビューとリストが出て来ます。ここに漢字が分かるかな。リーダーの中で漢字が分かる人がいないとできませんから。壁紙に設定というボタンを押してあげてください。そうすると右上のところにロックの画面に設定するか、ホームの画面に設定するかはい。写真を開いて右上の矢印を押すと、ホームとロックに設定というのが出てくるよね。まずは、ロックの画面に設定してあげてください。（やった）じゃあ右上の完了を押してあげてください。いいですか。カメラのモードにもどったらちゃんとロックの画面に設定されるか確認をしてみましょう。一度iPadの表のボタンがあるところを押してください。ホームの画面にもどります。ボタンがいっぱいある画面にもどります。次に、iPadの裏側を見てください。裏側のリンゴの上の左側の所にボタンがあります。（それ消すやつだ）そう。ここ消すやつ。ここをクリックするとiPadが消えます。iPadが消えます。（分かんないよ）（佐藤　完了）（できないよ）（佐藤　できないね）

服部　これビデオしゃない。ビデオは設定できないんだよ。写真じゃないと。（佐藤　ビデオだったのか、そうか）写真で撮ろう。写真でもう一回やってみよう。ロックしておーできた。

佐藤　できてたね。やった。じゃあやってみましょうか。みんなの好きな物を紹介をしてもらいたいと思います。カブトムシ班は、カブトムシを紹介すると決まっているようですが、他にもいろいろ紹介してあげて下さい。まだ、何を紹介するか決まっていないところは、グループで話あって、どういったものを紹介したら面白いか考えてiPadを使っていろいろな撮り方を工夫して撮ってみてください。

佐藤　じゃあちょっと　僕は、こうしてね。ビデオの画面にします。僕が、好きな人。僕は、もじゃ先生が、仲良しなのでもじゃ先生を紹介しますと言ってもじゃ先生を映す。もじゃ先生が映った。もじゃ先生を映しておいて暗いからこうしようかな。こっちを向いてくれますか。どこで撮るかというのも決めてね。例えば、自分の好きな人をどこに立ってもらうとか。そういうのも決めてそれではい。もじゃ先生、ここにいます。用意スタートで押して録画されています。僕が、僕の仲良しのもじゃ先生を紹介します。今、撮れているからね。ビデオが撮れています。こんな風に撮ってください。用意スタート。僕の、大好きな人は、もじゃ先生です。なぜならば、もじゃ先生とは、２０年くらいいっしょにお仕事をしています。今日みたいにいろんなワークショップでいっしょにお仕事をしたり、遊びに行ったり、いろんなところでお酒も飲んだりします。いつももじゃ先生といるのでもう家族のようになっています。以上。もじゃ先生を紹

介しました。さようなら。（ふふふ）ってね。こんな感じです。レポートするような感じで。いいかな。「どうしてか」と言ってくれるといいね。例えば、私が撮った写真は、これです。この写真を撮ったのは、いつです。とかね。そういうことを紹介してくれてもいい。この教室の中に絵があったりするとね。そういうのでもいいです。さっきも言ったけど気に入っている靴とかね。気に入っている鞄とか。気に入っているシャツとか。でもいいです。

子どもたちの撮影の取り組み

撮影〜わたしの好きな物、人、場所　その理由

① 自己紹介。ニックネーム紹介。飼っている虫かごのカブトムシ紹介。A君　外国のお金が好きです。将来、外国に行ってみたいからです。Bさん　私はこの花壇が好きです。自分がいなかった時にボランティアの方が作ってくれたからです。Cさん　私の好きなピアノです。私はこのピアノをいつも弾いているのからです。D君　ぼくは、この遊び場が好きです。ここにくると気持ちが落ち着くからです。E君　この草は、さわるとくさります。（くさらないよ。わたしもこれ撮ろうと思ったけどやめて良かった）〜実際にさわってみせる。

② 子どもたちの様子は、撮影したら、必ず、みんなで再生して映像のチエックを何度も楽しんで繰り返し確認していた。見た映像からアイディアがわいて、撮影を発展させるグループや、男子は、ゲームの実況中継を沢山の言葉を使用して解説していた。

③上映会　子どもたちが、活動する部屋の白壁にプロジェクターを使って子どもがiPadをつないで上映。沢山撮影した中から子どもたちが、話し合って選んだ映像を上映していました。

石巻ワークショップ（中村レポート）

2012年８月７日　午後１時３０分〜４時

■ 石巻寺子屋　映像ワークショップ

佐藤先生　服部先生は場の状況を読み、子供たちが落ち着くまでが時間をかけていらした。

①　iPadで自己紹介撮影

内側カメラで自分の顔を映しながら、自己紹介をする。撮影ボタン、カメラレンズ位置の確認。自分が映ることに興味を持つ。小学校中学年の女の子は自意識が高く、みんなのいないところで撮影したいと廊下に出て活動した。

②　私の好きなもの紹介

３、４人でグループを組み、好きなものや人を紹介する映像を撮影することを指示する。
リーダーを決め、iPadを撮りに来るように指示。リーダーはグループで誰がいいかを「せーの」で指さし投票して決めていた。日ごろのリーダーシップ教育が浸透している。リーダーは最初にiPadを持てることが誇らしげであった。

iPadにグループの壁紙を貼り付けるために、全員が映るように写真を撮るよう指示。

○男子チーム５人 高校生（中村先生の息子さん）がつく

バクガンというカードゲームでは、カードの上に球状のキャラを転がすとパッと開いて変形する。その変化の面白さに着目し、ゲームの様子を撮影することをひらめく。デュエルマスター、バクガンのカードゲームの対戦を実況中継する。カードを床に並べ、対戦者は床に座る。カメラマンとアナウンサーは台に腰掛け、ハイアングルから、カードを撮影。対戦者は相手をあおるパフォーマンスをカメラを意識して行っていた。

○女子チームＡ３人

隣の部屋に置いてあるピアノを紹介する。ピアノの鍵盤は彩色されている。女の子たちが、「これは『七色のピアノ』です。」とだけ言って撮影し、立ち去ろうとするので、中村が「音は出ないの？」と促す。すると、二人がカエルの歌の片手連弾をし、リーダー格の女子が撮影した。次に、リーダー格の女子が「トトロの森」の主題歌「歩こう」を弾き、一人が脇で踊り出した。撮影役の女子も一緒に足踏みしていた。この辺りから、楽しさのテンションが上がりだす。何度か撮り直しをし、譜面台にi-Padを置き、映像のチェックをする。

先生方に見せに行き、「ピアノを弾く人の後ろからばかりでなく、弾いている人は映せないのかな？」のアドバイスを受け、リーダー格の女子が譜面台に外側カメラのままおいて、弾きだす。映像チェックで、ボタンがちゃんと押されておらず、撮影できていないことに気付いたところで、中村よりアドバイスで内側カメラにして譜面台に立てかけた。位置を確認し、ピアノを弾く子の右側にスペースを明け、そこで二人が踊る様子を撮影した。上下に飛び跳ねるだけではなく、後ろに下がったり、前に出てくるなど。大はしゃぎで夢中になって取り組んでいた。

上映会では一番最後に撮ったもので、佐藤先生、服部先生も後ろをとおった作品を上映した。

○女子チームＢ　３人

三人ともiPadに興味を持つが、たいへん恥ずかしがり屋で、自己紹介を撮影するときもみんなのいないところでと、廊下に出ていく。好きなものや自己紹介では互いに協力する姿勢が見られるが、いざプロジェクターでの上映となると「キャー」と言って廊下に出ていく。

○小さい子チーム３人　サポーターのお兄さんが付く

中にチームに入ろうとしない男児もいたが、サポーターの促しでiPadに関心を持ち、外の葉っぱの撮影に参加する。建物脇の花壇でおじぎ草の葉が閉じる様子を動画で撮影する。

○中学生チーム　３人

中学生男子一人だけで、自意識から参加に距離を置こうとしていた。iPadには興味を示し、友人二人が後から来るとカードゲームの過程を撮影した。それなりに楽しそうな様子が見られた。作品上映に出品しなかったが見学で参加。
佐藤先生からは次回、そのゲームの魅力やルールなどが分かりやすいものが作れるようにするとよいと、コメント。

③　締めくくりと次回予告

服部先生から今日、みんなが映像をちゃんと撮影できたことを褒め、次回は家から好きなものを持って来るように指示を出す。一人の男児は「じゃあ、あれ、持ってきていいのかな…」と意欲を示していた。

ワークを終えた後、ピアノを弾いていたリーダーの女子に「ピアノ、上手だったね。また、次も頑張ってね」と声をかけると、「あたし、次、これないんだ」残念がっていた。

8月8日 10〜16時

石巻ワークショップ

石巻市　仮設追波川多目的団地集会所

“使い方の説明後”

○自己紹介撮影から

佐藤　「はい、佐藤ひろあきです。今日はよろしくお願いします。」はいボタンを押しました。それぞれお名前だけでもいいです。お互いに撮り合ってください。「なんだ　考えた　どんなの？　おーやってみようぜ」

服部　自分で普段聞いている声よりも　違うように録音録画されていると思いますよ。声が良く聞こえないなという人もいると思います。はい、声が聞こえない人iPadのボリュウムの調節が出来ます。調節をする時には、銀色の面を見てみてください。銀色の面の裏側にまだ押していないボタンが二つあります。長い方のボタンを縦にして上の方にあるボタン押すと大きくなって下の方のボタンを押すと超えが小さくなります。

○自慢の物、人、場所の撮影

佐藤　一番大きな音にしておいていいと思います。ここからは、もっと自己紹介でもいいですしもっと違う方を撮りたいということであれば、いいですし、何か持ってきてもらってもいいですし、それを取りに行ってもいいです。どなたかお友達を紹介してもいいですから今のビデオで撮る要領でお好きなものをちょっと撮ってみてください。川の風景を撮るのもいいです。これを持ち出して結構ですので何か自慢の品を持ってきていただいてもいいです。自慢のものをとって来てください。３０分くらい１１時１５分

にもどってきてください。

○参加者の活動と発話

外に出た子どもたち。つきそいは、高校生。ヘリコプターを発見。子ども:「まだここにいる。昨日も来たのに。」「また外国人がいる」「外国人を撮ってくれば」子連れの家族の外国人（歌や遊びのボランティア）「あそこ？　へーい　カモン、ハロー、エブリワン」子ども外国人を撮影。カメラマン岩田を写真で撮る子ども回転する遊び遊具で遊ぶ　女子大生が女の子どもと何を撮るが相談しあっている。女の子がiPadを持つ。二人でいっしょに映す。高校生、男の子にiPadを渡す。男の子２名がiPadで映す。

「お友達をとるんだよ。（孫と撮影）赤くぴかぴか光るまで。ババが押してあげる。がんばっています。」お友達のブランコを撮る。写真じゃないんだよ。孫にiPadを渡す。孫　外国人とブランコを映す。それを押すと止まるんだって（隣のババが教える）孫、ババに預ける。おいかけっこが始まる。ちょっと難しい。撮りました。外黒人を集会所に連れて行く女子大生（面倒見が良い）みんな集会所に集まる。くすぐったい（子どもの手の中にバッタ）　集会所の中　服部　佐藤　子どもの撮影した映像をチェック。「ウオー　廻ってる廻ってる回転するジャングルジムにのって中でカメラすごいねこれ　思いついたんだこれ　あの人　おー　ここにみんなの顔が映っていると面白いね　バッタ撮れてる。他は、面白いの撮れた？こっち。バッタ見せて　（他見せて）これさっきと違うバッタだね。写真で撮ったの？殿さんバッタ　おー　他は、どういうの撮れたの？いろいろ撮った　これは、どういうの？なんだよこれどういうゲーム？

なんかね中でね。生きてる？生きてる。おーじっとしているね。これ飛ぶんだよ。ここがぼけているね。さっきの回転するやつ？」みんなで見合っている。

（ワークしヨップ１日の後半）

佐藤　子どもは３つの班にわかれようかな　みんなでやろうよ。

服部　宝、さがしだよ　じゃあビデオカメラ　大人のチームもいっしょにやっていただいてもいい。　じゃあさっきの思い出してね、ビデオが撮れるようにしておいて。どうしたらいいのかな。そしたらね。最初の指令は、けっこう簡単だけど次の指令がちょっと難しいぞ。いいかな。じゃあ最初の指令は、競争、グループで来ぉ競争ね。一番始めに全部できたところは、（はい）もどってきて　これ（テレビ）で見ようか。ね。最初、色です。いいかい。これ配ってから、例えばね。赤いもの　赤いものをみつけてこれが、赤いものってビデオを撮ってはい「赤」って言って１個終わり。いい？それをここに書いてある分、５つあります。５つミッション。命令が５つありますので５つさがして５つ撮ってきてください。（外に出るの）外でもいいし、中でもいいですよ。外限定？外限定です。

服部　でもね、友達のシャツとかだめね。ムービーで撮って、撮ったときに必ず、これは、赤とか言ってください。ビデオで撮るんだよ。はい。お願いします。「行くぞ」あまりあわてて iPadを落とさないようにちゃんと持って。赤。撮る？（消化器　女の子）これ撮るの？」さっそくみつけた。「声を出そうか。赤これなに」「茶と　赤　言って」　もういい　次青だよ（自転車のかごが青）撮影　次何色？　次は、茶色。あっこれ茶色。（花壇の土）　茶色　次黒　これ何色？（カメラ）黒　黒撮った　次何色？　次は、紫　紫最後？ちょっと白いけど紫、ピンクっぽい（雑草）あった。あの人の服。これ（缶ジュースやコーヒの販売機）本当だ。わたしもらってない。終わった。届かない。紫。あ疲れた。あっ帰ってきた。

服部　ipadの映像をみんなで確認します。はい次青、お一確かに青だ。いいねえ。あっ黒だ黒、茶色、すごい、次は、茶色かこれは、これは、紫？これどうやって撮ったの？この布を押当てたらこうなる。おー、自分で考えたの？　すごいね。

石巻ワークショップ（中村レポート）

2012年８月８日　10時～16時

■ 石巻市仮設追波川多目的団地集会所

9時から会場準備を始める。「ルーテルの集まりですよね。」と勘違いしながらも、早くに会場に現れたのはＭさん。子どもたちが３人、表れる。友達を呼びに戻ったり、集まるまでに時間がかかり、１０時３０分よりようやく始める。

iPadの機能の説明では子供たちはゲーム機で写真撮影などを行っており、抵抗なく受け入れる。が、高齢の女性には抵抗があるようで、積極的に触れようとはしない。「高くて買えないもの」とのつぶやき、席を立つ方もいた。

平日でもあり、ご高齢の女性と小学校低学年の児童が中心である。保育科で学ぶ女子大生（２０才）が小さい子達の面倒を見てくれる。子どもチームは森本兄弟の男児チームと女子大生のチームが午後のワークまで活発に動いた。日常生活での遊びの人間関係ができており、石巻寺子屋よりスムーズに動き出しているようだった。男児チームはＭがリーダーでiPadを持って走り回っていた。その後をアイデア出す役、演者役がおり、弟は記録係であった。

【ワーク１】　カメラに自己紹介　撮影機能の確認
【ワーク２】　グループ写真を撮影　壁紙に貼る
【ワーク３】　グループで撮影　次の課題を探せ。
①かたい
②やわらかい
③うごく
④まわる
⑤音が出る
⑥におう
⑦たのしい
４つのグループで活動。

１回目の撮影を手早く終え、先生に見せにくる。先生は一つ一つの映像に「おおっ、すごいね」「うーん、確かに回ってるね」とリアクションを示す。映像を確認しながら、課題リストの紙に赤丸をつける。一通り見終わってから、もう一度、同じ課題で違うものを撮ってくることを指示する。子どもたちも認められたことが嬉しく、次の課題に夢中になって取り組みだす。グループの速さを競い合うことも弾みをつけているようだ。

２回目の課題をクリアしたところで、午前の部を閉める。アメリカ・テキサス州からのキリスト教被災地視察団の家族の歌の披露の参入があったが、午後１時からにしてもらう。午後はアメリカ人家族の「私たちの神様」の歌の日本語版、英語版と遊び歌の披露の後、ワーク開始。

【ワーク４】　映像でしりとり。
①「追波川（おっぱがわ）」から始める。
②２０個　撮影する。
③最後を「ん」で終わらせる。
この３つの条件を満たすように指示。

午前中で要領がつかめており、室内にあるものから、どんどん撮影を始め、すぐに外に出て行った。男児チームは仮設住宅で「留守→住まい→犬」と自分たちの家や、仮設住宅の脇を流れる追波川の風景なども撮影しており、大変貴重なものとなると思う。

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3・11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

8月9日 10～16時 石巻ワークショップ

ワーク河北総合センター文化ホール

佐藤　もうiPadの使い方は、もう慣れてきたと思うので始めにiPadの操作方法を復習してその後、今日は、昨日とまた違うことをやってみようと思うのですよ。みなさんに参加してもらって。スタッフの皆さんも中に入ってもらってみんなで作っていこうかと思いますのでよろしくお願いします。一番最初にiPadの操作方法、S君覚えてる？大丈夫？

一番最初に一つのiPadを使って昨日カメラを使って自分撮りと相手を撮るというのをやりましたよね。自分撮りの時は、こっち向けてね。ここを押して撮りましたよね。相手に向けるときは、こう押すと向こう側に向いてこう撮れるんです。これをこう持って相手の顔と自分の顔をちゃんとiPadで撮れる練習をちょっと最初します。皆さん立っていただいてそこのスペースでぐるっと輪になってもらって。まず、ちゃんと指が映らないように確認しながらビデオのモードになっていてここに赤いぽっちが出ているかどうか確認して最初まず、自分をしっかりレンズがどこにあるかレンズはここのホームボタンの反対側にあるんだけど隠さないようにね。自分の顔をしっかり撮っておいて最初、挨拶しましょう。みんな一通りカメラを回しますんで同じようにみなできるように行きます。僕からスタートします。赤いボタンをまず押して自分の番になったら確認してね。点滅しました。撮れてるなー。はい。「おはようございます。佐藤博昭です。今日も一日、よろしくお願いします。ストップ」という動作をそれぞれみなさんやってください。「おはようございます。Kです。今日も一日楽しく頑張っていきましょう」隣へ渡す。「おはようございます。Mです。今日も一日よろしくお願いします。」と続く。今、自分に向けて自分を撮りましたよね。今度は、カメラを向こう側に向けて相手側に向けて相手が映りますね。これで僕がやるようにみなさんつないで行ってください。誰かのところに行って質問をしてください。質問をされた人は、必ずその質問に答えてください。いいですか。自分の立っているところからスタートボタンを押します。押して「誰に質問しようかな、よしターゲットを決めて、ずずずずずっと近づいて行って顔がアップになった時に「○○君に質問します。あなたの好きな食べ物は何ですか」「ハンバーグで」「何でハンバーグが好きなの」「昔から好きだったので」「昔から好きだった。はい、ありがとう。でストップします。今度○○君がこう持って誰かターゲットをさだめて誰かに短い質問を一つ」「じゃあ好きなものは、何ですか」「相手の名前を言ってあげてください」「Nさん好きなものは、何ですか」「料理をするのが、好きです」…「やってみたいことは何かありますか」「昨日の夕飯に何を食べましたか」「好きなスポーツは何ですか」「サッカーです」「将来何になりたいですか？」「研究者」「頑張ってください」「一番得意なギャグは何ですか」「小さくなっちゃった。だめですか」「○さん好きな花は何ですか」「トルコキキョウ」「どうしてですか」「やっぱりね。家の周りにねちょっと、石巻に車で行ってそういう苗を買って来て家の周りに植えたの。」拍手

これを２回行って舞台のスクリーンに映し出してみる。操作は５年生のR君。大画面に自分自身が映し出されることに驚きと満足感が伝わってくる。次に

石巻ワークショップ（中村レポート）

【ワーク１】　質問リレー

iPadで撮影しながら、「○○さんに質問です。」と質問をして近づき、答えを撮影します。答えた人にiPadを渡し、次の人へ質問をします。

【ワーク２】　舞台を使ったボール投げ撮影

上手から歩いて登場し、自分の名前を言う。ボールを受け取って、下手へ投げる。これを繰り返し、全員で撮影し、講師が大きなスクリーンに投影しながら編集してつなげました。映像制作を全員で共有しました。

【ワーク３】　ボールパス　撮影

５、６人のグループに分かれ、場所を変えながら、ボール・パスを連続させる作品を撮影します。前のシーンでボールがどちらに飛んだかを確認し、方向に矛盾がないように撮影します。撮影後、余白の部分を削除しながら編集してつなげます。小５年のR君は、編集機能の操作もすぐに覚え、作品を完成させていました。

この日のワークはボール・パスの作品制作に向け、少しずつステップを踏む構成となっていました。ボールが時間と場所を超え、映像をつなぐ役割と果たしており、映像編集の妙味を理解することができます。映像ができるまでの構成や演出、取り直しなど、制作過程の体験を通して、映像の本質を感じることができるでしょう。

8月10日 13～16時 いしのまき寺子屋ワークショップ

佐藤　この前は、好きなものとか撮ってもらったけれども今日は、グループでこれを撮ってくださいというのを紙で作って来ましたのでそれをみんなで考えて撮ってください。指令書を渡します。この指令にしたがってみんなでこれから今１時半なのでできるだけ早くこの７つの指令をみんなでクリアしてもどって来てください。お願いします。じゃあ配ります。

服部　取りに来てもらおうかな。じゃあ取りに来てください。

「赤い○を　黒い○を青い○くを」【指定された色のついたものをさがして撮る】

佐藤　赤い車とか、赤い帽子とか、そういうのみつけてそれを撮って赤いのを撮って「これは、赤い車です。青いなんとかです。と言って７つみんなでさがして撮ってきてみましょう。

（赤、黒、青、黄色、紫、茶、緑）

服部　iPadの使い方の復習ということで外に出てもいいし、この部屋の中、もしくは、他の部屋でもいいです。面白い色のついているもの７つ、一個一個みつけてきてください。

佐藤　ちょっと工夫してね。撮って赤いっていっぱいあるかもしれないけど、赤いの中でどれが面白いのか、いろいろ考えて工夫して面白いものを撮ってきてみてください。それで今日はね。撮ってきたものをみんなで最後、見るのでね、みんなで工夫して面白いものを撮ってきてください。用意スタート。

（ペンかして）（いろんな色のマジック　これでいい）

佐藤　ペンは、だめだね。（最初に言ってよ）簡単だもん。

服部　できるだけ面白いものね。【撮影が終了すると、講師に見てもらう。オーケーが出ると次に指令書が渡される。】次は今度は、ちょっと形とかそういうの「やわらかいもの、かたいもの、音のするもの、回るもの、楽しいもの、ニオイのするもの」

服部　さあ撮ってきてください。

子どもたちの活動～【いしのまき寺子屋の中を話し合いながら歩き回る、探しまわる子どもたち。】「においのする部屋」「においがするぺんです」「楽しい仲間たち」「ほっとよこちょうって言うのかな」「滑り台とか」「楽しいカード」「よし行くぞ」「面白いR君です」

今回は　できた映像の編集を各自に講師がついて編集作業を行ってプロジェクターで上映した。

中村純子 被災地レポート

石巻被災地

野蒜駅→東松島→仙台

津波で崩壊したままの野蒜駅へ、電線が通り、自動販売機があった。販売機のごみ箱を掃除する女性がいた。ほうきを片手にふたを開けようとして手間取っていたので、「お手伝いしましょうか」と声をかけるが「大丈夫です」とだけ。「いろいろ大変でしたね」と声をかけるが無言で、それ以上のことを伺うのがためらわれた。

東松島も港の形骸は残っているが、周辺は市街の区画を残してはいるものの、雑草に覆われた平地のままであった。ボランティアで参加した高校生の息子は2年前の夏の漁業体験を思い出していた。「あそこから船に乗ったんだ」「あそこで、友達がこけたんだ」「あの島の周りで船の運転をさせてもらった」と語る。「あの辺のバーみたいなお店でお昼を食べたんだけど、もう、何もないね」

車で山道を上りかかった所に、漁業体験の看板を出したプレハブが見えた。

被災者　談話

○Mさん ４２才

３人姉妹の末っ子。母親が、集会所で何かイベントがあって東京の方からわざわざいらっしゃった方に申し訳ないと促されて参加する。スマホを使っており、i-Padへの抵抗はなく、一日目、午前中はワーク３の課題撮影に取り組んでいた。翌日もビッグバンでのワークに午前中参加し、相手への質問では、Sさんと笑顔で取り組んでいた。午後から母親を伴い参加し、前日の作品がスクリーンに上映されると嬉しそうに母親の方に振り返り、自分の作品であることをアピールしていた。

ビッグバンでのワークの昼休み　憩いの部屋でくつろいで、おしゃべりをした。3.11の日、午前中、息子の中学卒業式で、ちょうど宴会も終わり、記念写真を撮ろうかとしているとき、寒くなったので家に羽織るものを取りに戻った。激しい揺れに会い、母親を促し、バッグ一つ持って、山に登る。家は津波に流された。

その夜は山の上にある森林公園センターまで歩く。そこへの救援物資はすぐに届き、大きな不便はなかった。小学生の甥っ子は11日めに避難所に現れ、母親と再会した。しばらくそこで避難生活をし、昨年夏に今の仮設住宅に移動した。今のところは空気が悪く、森林公園センターのほうが野生動物もいるし、空気がきれいで良かったと振り返る。

○Sさん

尾崎、海蔵庵で被災。７００年続く曹洞宗の寺。

○○村で22年目に生まれた待望の子。長女で「長子」と名付けられる。大きな農家から海蔵庵に嫁いだときは、親族はあんなところに嫁に出さなくてもと、帰り道はみんな黙ったままだったとか。実家から、何かと野菜や米を送ってくれた。

住職は優しい人で、二人であちこち車で旅行に出かけた。刑務所への訪問では、一人でいきたがらず、いつも長子さんを伴って行く人だった。４、５年前、カナダ旅行もし、ナイアガラの滝では船に乗っての滝の裏側も見てきた。高校時代の人文地理の先生がとてもいい人で授業でナイアガラの滝の話を聞いて、ずっと行きたいと願っていた。

二人の男児に恵まれた。二人とも僧職を継ぎ、長男は相模原の寺に就職、次男が海蔵庵の本院と別院を掛け持ちで担当している。次男夫婦には女の子と男の子の孫がいる。男の子は仏教系の学校に入学し、袈裟を着た入学の記念写真が仮設住宅の部屋に飾ってあった。住職は震災の２か月前、亡くなった。その頃、実家の方でも不幸が続き、大変だった。

2011年３月11日は海蔵庵にいた。激しい揺れに驚いた。近隣の檀家さんが次々と避難してきた。60人くらいいた。（息子のブログ記載には100名、『津波からの生還』には60か70名とある。）山の下の方の蔵に、実家から送られた米７俵や大きな味噌樽がみんな流されてしまった。みんなにご飯を炊いてあげたり、面倒を見ていた。嫁や孫は出かけていて無事だった。談「津波が来て潮が引いていくとき、たくさんの家や人が流されていた。屋根の上に乗った男の人が「助けてくれ」と叫んでいたが、どうすることもできなかった。思い出すと涙が出てくる。

３日経って、自衛隊のヘリコプターが来てくれたけど、高いロープで吊り上げられるのが怖くて誰も乗ろうとしない。（住職である息子のブログによるとペットやご遺体はヘリで運べないため、離れたくないと移動を拒む被災者がいて、かなりもめていたらしい。）

自衛隊の人に「あなたが最初に行って、後から来る人の面倒を見てあげてください」と頼まれ、一番最初に乗った。吊り上げられて下を見ると怖かった。リュックサック一つには、お寺の過去帳を背負っていった。

去年の夏から仮設にいるが、昔の家はとても広かったのに、こんな四畳半二つの狭い所で…。でも、高校時代の友達のお煎餅屋の工場が近くにあって、お客が来ると食べさせたげるんだ。こないだ、友達が見舞いに来てくれたから湖月亭へいった。

今では左足が痛くて杖をつかないと歩けないけど、旅行に行けるんだったら、ネパールに行ってみたい。」

社交的で、面倒見がよく、あちこちに顔が利く人のようである。私が「お昼に勧められた湖月に行ったが、定休日だったよ。道の駅で食べてきたから、トマトのお土産買ってきたよ」と訪問すると、気さくに部屋に招いてくださった。ちょうど、ＮＨＫ連続テレビを見ていらした。「朝も見たけど、寂しいから昼も見ちゃうんだ」

壁に飾ってある住職の似顔絵やご家族の写真を見せてくださった。帰り際にお煎餅をもっていくよう勧められる。

午後のワークをやっていると、自転車でお煎餅を買い足してきたよと、汗を拭き拭き、いらしてくださった。被災のことを繰り返し、お話しくださる。「お母さん、すごいね。大変な中、頑張ったね。そのお話、映像に残しときたいから撮影していいかな？」というと、「こんな顔、撮んないでくれ」と恥ずかしがられる。

しかし、二日目のワークで、Mさんと撮影しあい、大画面に映し出されると、笑顔でご覧になっていた。「お母さんの笑顔がいいね」とお声かけるすると、照れながら笑っていらした

ワークショップに参加した高齢者の方々についての考察（中村純子）

もともと好奇心旺盛で、活発な方のようなので、デジタル機材への抵抗感があるが、少しずつほぐれ、抵抗感がなくなっていかれるようだ。映像のワークということで子どもたちも集まったが、何か東京の方から来た人がいるから、行ってあげなくては申し訳ないと集まってくださったお年寄りが４人ほどいらした。みなさん、それぞれにその日の大きな物語があり、そのことを語りたがっている様子であった。傾聴ボランティアというのがあると新聞で読んでいたが、語ることによって得られる癒しがある。映像への抵抗感をなくすワークショップが必要であろう。また、自分の語りを画面で視聴することによって、心理面での新たな達成感、満足感が得られるように思えた。

＊ご高齢の方にはカメラで写された自分がどう見えるか、どう人に見られるかということへの抵抗感が強いように思われる。撮影してすぐに、複数の画面から、どの写真が一番良いか選ばせたり、自己紹介の映像をすぐに大型スクリーンで写して見せると効果があるようだ。その反復を通して、機材や撮影への抵抗感をほぐすワークが必要と思われる。

中村純子 被災地レポート

■大川小学校

元は円形の瀟洒なデザインの校舎であったことが窺える。校門脇の慰霊碑にはたくさんの花が飾られている。校舎は壁をえぐり取られ、無残な姿をさらしたままである。教室には黒板、用具置き場には机、看板が残されていた。ご遺族が校舎の周りにヒマワリを植えており、黄色い花が風に揺れていた。津波被災の折の避難誘導の職員の判断についての新聞記事で学校の見取り図は見たことがあった。しかし、意外と裏山の急斜面は小さかった。その斜面は当日は雪が降り積もり、登りにくかったそうだ。しかし、その山に向かって助かった児童もいたらしい。

プールの壁に児童の壁画が色鮮やかに残されており、「未来を拓く」という文字が痛々しかった。この校舎も被災の象徴的建造物に思われるが、地元の方にとっては思い出したくないもので、取り壊しを願う声もあるそうだ。

■旧雄勝町庁舎前

元庁舎の建物は窓ガラスも破壊されたまま残されている。周囲の住居跡には恵比寿の像が飾られていた。七夕の飾りの跡もあり、短冊に復興を願う言葉が書かれていた。

市役所前には二階建てのプレハブに八百屋、スーパー、魚屋、葬儀屋が店を並べている。
スーパーの店主に以下のお話を伺った。

＜雄勝　旧庁舎前スーパー　店主　談＞

３．１１は店で激しい地震を感じ、すぐに屋外に避難した。店内は散乱していたが、余震も続き、津波が来ることが予測され、従業員はすぐに帰した。自身もレジの売り上げを持ち、自家用車で自宅に帰り、すぐに自宅裏の山に近所の方々と共に非難した。大きな津波が押し寄せ、売り上げを置いておいたままの車も流された。自宅も店も跡形もなく流された。その夜は山の上でたき火をして過ごした。翌日、波が引いてから、みんなで手分けして、落ちている缶詰など食べられそうなものを拾い集め、分け合ってしのいだ。この辺りはガス管がなく、プロパンガスなのでバルブのしまっていたものを拾ってきて、煮炊きには不自由しなかった。３日目に自衛隊の救助がくるまで、協力して過ごしていた。

iPadを活用したワークショップ考察
（中村純子）

子どもたちにとってiPadは遊び道具の一つであり、映像で自己表現をすることの面白さは存分に感じていたようであす。プリクラ、写メの交換など、友達と一緒に写真撮影し、写真を共有し、連帯感を深める遊びは子どもたちの間に浸透しています。

しかし、これまで、動画を使った遊びは携帯電話の保存機能の限界や、小型化したデジタルカメラの画面の小ささ、編集の手間の面倒さなどから、普及していません。しかし、iPadを使うことによって３～４人のグループで画面を共有し、遊べることが証明されました。画面を指でなぞったり、ボタンを押すだけで撮影、検索、編集の機能が自在に操作できること、画面が大きく、グループで一緒に覗き込めること、Ａ６サイズで軽く、持ち運びが簡単であることによって子供たちが自在に活用して遊ぶことができていました。

ただし、デメリットもあります。まず、外側カメラ、マイクの位置が四隅にあり、手で持った時に指で隠れてしまう。これらが中央にあれば問題が解消できるのではいでしょうか。また、内部カメラの場合もレンズ位置がわかりにくく、画面への目線がきめにくいです。鏡の要領で反転して画面に映った方が、ポーズを決めやすいと思われます。また、画像再生で複数で視聴できる良さはあるものの、１対１でインタビュー撮影をするとき、手で掲げると、撮影するインタビュアーとインタビュイーが顔を見合わせて話すことが難しいということがあります。iPadを設定できる三脚の開発が望まれます。

今回のワークを通して、子供たちは映像の楽しさを十分に感じることができていました。小学校低学年、中学年の段階では重要な要素だと思います。小学校高学年くらいから、カメラワークや編集についての技法を意識し、自分たちで楽しむだけではなく大人や不特定多数の他者にむけてわかりやすく伝えられるようになることが期待できると思います。中学校から高等学校では、自己の課題を持ち、作品に対するクリティカルな視点を持って制作に取り組むことも可能となるでしょう。特に、高等学校の国語科では平成２０年版学習指導要領で「文字、音声、映像」のメディアの分析や、編集が盛り込まれています。この高等学校での段階でマルチメディアを活用した言語活動が成立できるようになるために、初等段階から映像に親しむ指導が必要です。iPadはこの学習を成立させるのにたいへん有効な機器であることがわかりました。

また、今回のワークでは、子供たちからは、友達との映像制作の楽しさを満喫し、発散している様子がうかがえました。さらに、ご高齢の参加者からは、被災体験について語ること、他者に聞いてほしいという欲求が強いことが感じられ、あした。子どもたちにも被災のストレス、心の傷があると思います。しかし、まだ語彙が乏しい子供たちはそれをどう表現していいのか分からず、無意識のままに抱えていることと推測します。心理療法の一つに箱庭療法があります。箱庭という具象を用い、心理的なストレスを無意識に表現し、カウンセリングの一助とするものです。この技法が映像制作でも活用できるのではないでしょうか。自分の中でもやもやとしているものを撮影し、並べることで、自己の内面を客観的に見ることが可能だと思います。今回は、映像制作を通して、プラスのエネルギーが発散される様子を見ることができましたが、マイナスのエネルギーをプラスに変換し発散する可能性も感じることができました。

参加者数と参加者アンケート（積極的に活動していただいたがアンケート記入者は稀少）

開催場所	月日	参加人数、年齢層	撮りたい対象（アンケートより）	感想（アンケートより）
いしのまき寺子屋・放課後子どもクラブ	8月7日	・小学生低学年７人 ・小学生高学年８人 ・中学生１人 ・大学生４人（サポート）	すごい作品	いいんじゃない
仮設追波川多目的団地集会所	8月8日	・小学生８人 ・若年～中年層４人 ・高齢者４人	・子：人形、宝物 ・高齢者：住めなくなった家と家の周り	親：子どもが生き生きして帰って来た
河北総合センター文化ホール	8月9日	・小学生２人 ・中年層１人 ・高齢者３人	なし	なし
いしのまき寺子屋・放課後子どもクラブ	8月10日	・低学年２人 ・高学年７人 ・中学大学４人	なし	なし

○仮設追波川多目的団地集会所では５家族が参加した。

石巻市　仮設追波川多目的団地ワークショップ

「構想と現実」

川井田博幸

1.ワークショップ参加者募集の困難さ

ワークショップ開催地でコーディネートをお願いしているNPO法人Do Tankみやぎの遠藤学さんから「参加希望者がまだゼロ！」という知らせを聞いたのは、開催予定日の1週間前でした。九州出張前にバタバタと募集チラシの修正を加え完成させて、現地へ送ったのは夏休み直前だっただけに「もしかして？」という悪い予感が的中しました。私は早速、スタッフの西条さんに相談して、翌日石巻へ入りました。石巻も夏本番で、当日、夏の恒例川開き祭りの初日で、町は親子連れで賑わっていました。これだけ対象者が町にいるのだから最悪五組くらいは大丈夫だ、とたかをくくっていたのです。駅前のデパートでの催しの中で、個人のiPad(タブレット端末)を片手にチラシを配って親子連れに参加を呼びかけました。ところが、反応は悪くないのですが、申し込みまでにはなかなか至らないのです。次第に不安と虚しさがこみ上げてきたのは、この頃からでした。私は遠藤さんと手分けして、チラシを配り直接声をかけて参加を呼びかけるということに徹しました。

2. 参加者が集まらない理由

市内の小学校、中学校、高校をほとんど隈無く回ったのですが、窓口で帰ってくるのは、「生徒がいない」「部活で忙しい」「海外に招待されて居ない」「プールの日」など、言わば形式的な返事ばかりが帰ってくるのです。私は、わざと言い逃れをされているのではという不信感すら抱いてしまいました。ひょっとすると、この企画は半年か一年前からしっかり募集をかけていなければ成立しないものだったのではなかったのか？そういう反省ばかりが先に立ち、その上さらに絶望感が増幅していきました。しかし中止にする訳にはいきません。私は、川開き祭りの花火大会で賑わう人ごみの中、チラシを抱えて川沿いをただひたすら彷徨歩いたのでした。

3. 根強く活動を続ける地元のボランティアグループ

翌日、実情を知ってか、スタッフの仲條さんから心強いメールが届きました。大指（おおさし）という石巻の北東に位置する言わば限界集落ともいうべき小さな漁村でAさんが子どもたちを集めて漁業体験のワークショップをやっておられるというのです。早速、Aさんに連絡して、津波で80人もの大川小学校の生徒を飲み込んだあの新北上川沿いから、三陸の海岸沿いへと車を走らせました。途中、海岸線にまっすぐ伸びた道路が決壊したままで、もし通行止めの標識がなかったら、車ごと真っ逆さまに断崖絶壁へと落下したに違いありません。やがて狭い道を海手へ下ると大指漁港に着きました。しかし、人気は無く浜に海鳥の喧騒が聞こえてくるばかりでした。ところが、しばらくすると小さな漁船の到着とともに海鳥の声に混じって子どもたちの声が聞こえてきたのです。ここで何とか最初のハードルが越えられそうだと私は密かにほくそ笑んでいました。しかし、結局子どものお母さんたちにチラシを渡していただくことでPR活動はそこまで。被災者であり、それ以前に生活者として、海を相手にし、長年活動をなさっておられるAさんたちの活動の底の深さに、ただひたすら敬服するばかりでした。遠藤さんと地元の高校に再度挑戦。反応はやはり予想通り。Yahoo石巻の皆さんにもインターネットでの配信のアドバイスを頂くなど、まだ尽くしていない取組は残っていました。イベント開催までいよいよ5日足らずとなってしまい、時間は刻々と迫ってきたのです。

4. 舞台は、大ホール構想から、地域の仮設住宅の集会所構想へ

翌日、東京の知人へ相談し、石巻でイベントの仕込みをやっていたひとの紹介を受けました。彼曰く、「今から子どもを集めることは難しいですよ。一年くらい時間をかけないと。もしやるのなら仮設住宅の集会所を利用したらどうですか？」そうだ！学校だけをターゲットに考えて、準備した会場（大ホール）へ来てもらうのではなく、子どもたちの生活の場へこちらから足を運んで、一番集まり易い場所でワークショップを開催すれば、この企画は実現可能だ！私は天の声を耳にした思いでした。そのことを西条さんに相談し、早速仮設の集会所をまわる決心をしました。

5. さらなる新たな課題、そして実現へ

しかし、ハードルは考えていた以上に高かったのです。石巻市内の仮設住宅を遠藤さんと回ってみたのですが、集会所には人がいないし、自治会長もなかなかつかまりませんでした。回って行くうちにやはりこの発想は絵に描いた餅に過ぎなかったのでは、と思えてきました。夕方、人気のない集会所を夏の夕焼けがいつまでも赤く照らしていました。

遠藤さんが、最後の可能性を賭けてと連れて行ってくれたのが、追波（おっぱ）川の河川敷仮設住宅でした。追波川仮設住宅は、河川敷の公園に併設された20棟余りの集合住宅でおよそ260人の方々がそこで生活なさっていました。結局、会長さんに相談して、快く内諾を取り付けたのは、開催予定日の前日でした。早速、各御宅をお訪ねして、チラシを配布し、集会所での開催参加を呼びかけました。しかし、ご不在の御宅が多く、また仮にチラシを直接渡して説明を差し上げても容易に興味を示されず、このワークショップのためにわざわざ集会所に足を運ぼうなどという気持ちを感じることができませんでした。そしていよいよ、開催当日、晴天の朝がやってきました。各棟へ声を張り上げて参加の呼び掛けにまわり、集会所の前で気をもんでただ呆然と立っていたその時でした。ワークショップ講師の佐藤さんから心強い言葉をもらったのです。「もし誰も会場に来られなくても、ワークショップは成立しますよ。こちらから、ご自宅へ伺えばいいのですよ。ひと組でもワークショップは成立しますから、心配はいりません」と。胸中に妙な安堵感が漂ってきました。そうするうちに、午前9時を回る頃、どこからともなく子どもたちの歓声とともに一組、二組と受講者たちが集まってきたのでした。参加者延べ55名。当初の予想を上回る参加人数でした。こうして、ワークショップは、追波川の景観を舞台に広々とした公園までも視野にいれて実現できていったのです。撮影の場は、屋内から屋外へと広がって行き、試写は集会所のテレビモニターで行いました。結局、この集会所は、ただワークショップを開催するだけでなく、仮設住宅で暮らす人たちにとって大切な集いの場だったのです。多くの困難を乗り越えて開催されたこの企画は、受講者の方々は勿論のこと、様々な方々に支えられて、こうしてまさに一人一人の繋がりの中で実現することができたのです。

4

ワークショップ的な授業（中学校３年）
「映像で考える3.11子どもの人権」がつなぐもの
研究報告

④　ワークショップ的な授業
「映像で考える3.11　子どもの人権」

川崎市立西生田中学校
中村純子

4 ワークショップ的な授業「映像で考える3.11子どもの人権」がつなぐもの

報告：中村純子
川崎市立西生田中学校３年国語科

国語科教育におけるメディア・リテラシー研究を専門とし
2012年3月、教育学博士号取得

川崎市立西生田中学校、３学年担任、国語科を指導している中村純子です。西生田中学校は川崎市北部の住宅街にあります。小田急線「読売ランド駅前」から徒歩10分、山裾で緑の多い住宅街の中にある中学校です。生徒達の気質は素直でたいへん落ち着いており、行事に一生懸命に取り組み、学校生活を楽しんでいます。今回、グループ現代の西条さんとのご縁で、被災地の現状を知り、i-Padを使ってメッセージ映像を制作するという授業をやらせていただきました。

私は、2011年３月11日、職員室の前で生徒と話をしていました。激しい揺れに驚き、校庭に避難しました。しかし、まだ校舎内に生徒がいるかもしれないと、何人かの先生方とともに確認のために、再度、校舎に入りました。揺れが大きい中、四川大地震のことを思い出し、もしかしたら校舎が崩れて死ぬのではないかと感じながら走りました。校舎の壁にひび割れが入ったり、ガラスが少し割れたりしましたが、川崎市では幸い大きな被害はなく、日常生活に戻っていきました。

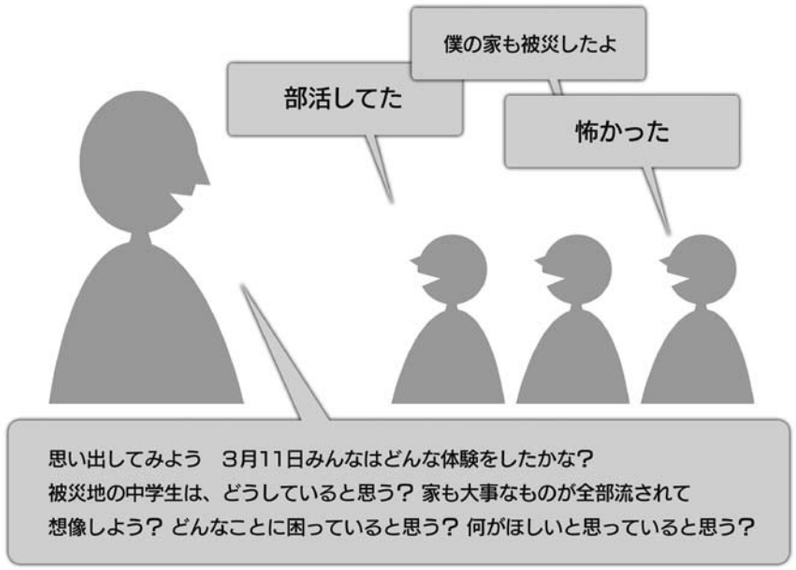
被災から２年経ちましたが、復興が進まず、次第に人々の記憶から薄れていってしまうことの危機感がマスコミでも騒がれています。今こそ、中学生に被災地のことを考えさせ、これからの日本の将来や自分たちの生き方について考えさせることは有意義であると考えました。

この授業は、6月、9月、1月に、帯単元として、道徳や総合的な学習の時間などを使って取り組みました。

まず、6月の道徳では、被災地へ支援のメッセージ写真で交流した高校写真部のドキュメンタリー番組を視聴し、自分たちも写真を撮るという授業を行いました。フランス人の女性が制作したものです。2011年の夏、埼玉栄高校の写真部の生徒たちが、被災地への応援メッセージを書いた画用紙を持った写真撮影を路上で呼びかけます。この活動を全国の高校写真部に呼びかけ、ネットで交流し、集まった写真を一冊の写真集を作ります。さらには、横浜で展示会も行います。この活動を通して、宮城県の柴田農林高校写真部のすみれさんが、内気な自分を克服し、展示会では笑顔で積極的に話ができるようになった過程も描かれています。

授業では、初めに、2012年年３月12日の朝日新聞から一周忌で花を手向ける人々の写真や、2011年の３月12日の各紙の一面記事を紹介し、震災について思い出させます。そして、番組を視聴させます。テレビ映像は情報が時系列で消えていくものなので、キイワードを書き出した紙を黒板に貼りながら、あらすじや主題を確認できるように工夫しました。視聴後、感想をポストイットに書かせ、班ごとの台紙に貼り、感想交流を行いました。次に、自分たちならどんな応援メッセージを送りたいか、アイデアを出し合いました。今回の授業ではA1サイズの画用紙にメッセージを書くところまでで終わってしまい、実際の写真撮影は、翌日以降の昼休みに行いました。クラスの生徒達はたいへん純朴で、男女ともに仲がよいので、お互いに協力し、ポーズを工夫して、良い表情で撮影をしていました。

授業感想では、ドキュメンタリー番組に対して、「日本という国全体が一つになっているような感覚で、国民一人一人の努力が伝わってくる番組だった。
自分でもできることから始めてみよう。」と書いた生徒がいました。また、写真撮影の活動に対しては、「３．１１から一年以上経った今だからこそ、こういう授業をやって、思い出すことができてよかった。」「こういう取り組みは初めてで新鮮で、頑張ろうという気持ちになれた。」と前向きな感想が多かったです。このように、６月は、写真という静止画像の表現活動に取り組み、９月はその発展として、iPadを使った動画での表現活動に取り組みました。



映像で学ぶ被災地は今

ワークシヨップ的な授業
「映像で考える3.11子どもの人権」

９月の授業は総合的な学習の時間で人権教育の一環として設定しました。川崎市では子どもの権利条例が制定されています。「安心して生きる権利」「ありのままの自分でいる権利」「自分を守り守られる権利」「自分を豊かにし力づけられる権利」「自分で決める権利」「参加する権利」「支援を受ける権利」です。

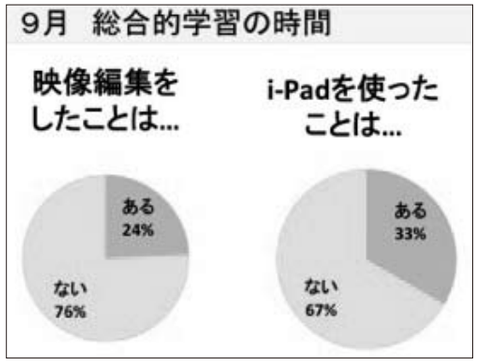
第１時では、これらの権利の中でどれを自分は一番大事にしたいかを考え、話し合うワークショップを行いました。第２時では、いじめの問題について考えました。大津でのいじめの事件をもとに、子どもの権利条例のどれが侵害されたのかを考え、さらに、朝日新聞で連載された「いじめられている君へ」という記事のいくつかを班で分担し、アドバイスを考えるワークショップを行いました。

第３時として、被災地の子供たちが失われた権利を考え、メッセージを送るというワークショップを行いました。被災地の子どもたちが、どういう権利が奪われ、また不自由しているのか考えさせるために、映像教材を見せました。

この教材は、私たちの研究チームが８月に視察した被災地の様子と、雄勝で支援活動をしているNPOの代表の遠藤氏のお話、雄勝中の生徒たちの話や伝統芸能の雄勝太鼓の演奏に取り組む様子で構成されています。仮設住宅ではすごく狭くて自分のスペースがなく、音楽もかけられないなどの現状を知りました。また、雄勝中では、津波で太鼓が全部流されてしまったので、廃タイヤにビニールを張って太鼓とし、百円均一で売っている麺棒をバチにして、太鼓の演奏を練習している様子や、津波で破壊された校舎に向かっての演奏、そして東京駅構内でのお披露目会での復興にむけてのスピーチなどが紹介されました。また、演奏の合間に挿入されている画面では、教室の掲示物が写されていて、「受験がんばろう」「卒業に向けてがんばろう」と決意が書かれており、西生田中学校の生徒達も自分たちと同じであることに共感し、より親近感を持つことができました。同じ中学生が復興に向けて頑張っている姿を見て、自分たちがどんなメッセージを送れるかと、より一層、真剣に考えることができました。

その応援メッセージをiPadを使って、班ごとに撮影する活動を行いました。この授業は本校の３学年５クラス全てで実践しました。この授業は１時間だけでしたので、撮影場所やカメラの構え方を工夫したり、再生してチェックしては、撮り直したり、大きな声ではっきりと話す工夫をしたり、新しい表現活動に対して意欲的に取り組んでいました。どの生徒も真剣に取り組んでおり、良い表情、良い台詞がいっぱいありました。

この授業のリフレクションで書かせたワークシートから、次のことがわかりました。映像編集をしたことがある生徒は24％、ない生徒が76％でした。
i-Padを使ったことがある生徒は33％でした。家族が



持っていて使ったことがある生徒がけっこういました。i-Padを使ってメッセージを作成する活動に対しては、「とても楽しかった」「画面がすごくきれいで 良かった」「画面が大きくて使いやすかった」「簡単に写真がとれて便利」「動きがスムーズでタッチパネルの反応がいい」といった感想がありました。ただ、「重いし不便だ」という意見もありました。また、こうしたワークショップの活動に対して、「気持ちが伝わると良いです。こういう活動は良いなと思いました。」という素直な感想や、「被災地のことを考えるとこんなことしていて良いのか？と思った。」という冷静に分析する感想もありました。

i-Padを使って映像で何を残したいかという質問に対しては、「自分が見た風景、日頃の町・想い出」「部活動の演技、吹奏楽の演奏、バスケの試合」「運動会など」「クラスの様子」「犬・猫・植物の成長」「ゲームプレイ動画・航空写真」「面白いもの、何でも撮りたい」「星空」「メッセージ」などが挙げられていました。震災で日常生活を震災によって奪われてしまったことを知り、改めて、学校生活や行事、家庭のペットなど、自分たちが当たり前と思っていた日常の風景を記録に残すことの大切さを考えていたようでした。１月に入り、雄勝中学校の３年生の皆さんから西生田中学校のメッセージビデオを見てのお返事をいただきました。同時に、西生田中学校のメッセージビデオの完成作品を届けていただき、３学年全クラスで視聴しました。生徒達は撮影は９月にやったのですが、完成作品を見ていなかったのです。

自分たちのメッセージを見ての感想では、「３年生全体で同じ気持ちになっていて、僕たちも一つになっている所が作品に詰めこまれていたと思う。」「たくさんの想いが伝わったあたたかいものになっていた。映像だからとても気持ちが伝わるものだと思った。」「一つのものを見て、大勢の人が同じような気持ちになって、違うことを言っているのは、一人一人がきちんと考えていたからだと思った。自分の経験に基づいて言っている人の言葉は重かった。」と、改めて自分たちの学年のまとまりを確認できたようでした。

次に、雄勝中の生徒さんからいただいたお手紙を生徒に印刷して配りました。次のような内容です。「私たちの演奏が皆さんに元気を与えることができて、すごく嬉しいです。今、私たちが太鼓演奏をしたり、学校生活を楽しく送れているのは、応援してくれる皆さんのおかげです。本当に感謝しています。受験という大きな壁がありますが、お互いに助け合い自分たちの夢や目標に向かって頑張っていきましょう。進学しても皆さんとの交流を深めていきたいなあと思っています。今回は本当にありがとうございました。」「川崎と言えば、自分、サッカー部なので川崎フロンターレですね。西生田中のみなさんもサッカー部はありますか？いつか遊びましょう。お互い受験生なので、あと数か月、勉強して最後の中学LIFEを楽しみましょう。合格願う！」

これを読んで西生田の生徒たちは次のような感想を持ちました。「僕たちのメッセージが相手に届くいてしっかり答えてくれて、つながりがもてたと思う。僕たちは応援する気持ちをメッセージに込めたと思いましたが、逆にこの手紙で私たちが応援されているような気がして、東北の方は強いんだと感じた。」「他人事のように、他の世界の出来事みたいな感覚から、今、つながっていて、今、被災しているのは日本であったのだとリアルな返事を通して感じることができた。」「皆さんの方が苦しいはずなのに、『頑張れ』という温かいメッセージをもらったことが嬉しかったです。いつか太鼓を生で聴きたいなと思いました。」授業の後、「先生、わたし、高校生になったら、雄勝の方とか行ってみたい。いつか太鼓を生で聞いてみたい」と申し出てくれた子たちもいました。

リフレクションでは、メディアの特性を考えさせるために、「応援メッセージを伝えるとき、どのメディアを使いたいか」を質問しました。

「i-Padがいい」と答えた生徒が５２％でした。「表情と笑顔が届けられる」「声が伝えられる」「自分の口から伝えてる感じがするのがいい」という意見が多かったです。新しいメディアを使うことが珍しく、楽しい活動であったからでしょう。

また、「メールがいい」という生徒は17％いました。「手軽に速く自分の気持ちが伝えられるから」「メールなら画像も添付できる」「同時に沢山の人が見られる」「すぐに送受信できるから、身近に感じる」「メールの方が本心を書ける」という意見がありました。

意外だったのは「手書きの文字がいい」と答えた生徒が31％いたことです。手書きの文字派では、「自分の顔が映っているのが恥ずかしい」「文字の方が映像で照れくさくて言えないことをちゃんと書けるから」「声に出さなくていいので思っていることを素直に書ける」という意見がありました。これは、自意識の強

い時期である中学生は自分の映像を見ることに対して照れがあることの表れかと思われます。また、「手で書くとその分、自分の想いが伝わると思うから」「言葉に意味があるので手紙につづりたい。」「メールだと電子文字になってしまって、たとえ良い文でも、手書きにはかなわないから。」という強い手書き文字への思い入れも見られました。これは、雄勝中からの返事が手書きで書かれており、その内容に感動したことが強く作用していると考えられます。しかし、「i-Padは高価で重く、編集が自分には難しいので」というデジタル・デバイドを示す意見もありました。

以上のように、今年度、帯単元で取り組んだ授業は、次の３点において、たいへん有意義なものだったと考えています。まず、メディア・リテラシーの向上です。静止画や動画を使ってメッセージを制作する活動を通して、メディアの特性、つまり、どういったメディアが気持ちを伝えることにより効果的かを考えることができました。今までの学校文化では、国語科を中心にどの教科でも、文字中心の文化でした。しかし、これからの高度デジタル情報化社会においては、文字だけでなく、写真や動画など、映像を使ってメッセージを構成するという、もうひとつのリテラシー（読み書き能力）の領域を増やしていく必要があるでしょう。今回の授業はその第一歩として有意義なものだったと考えています。

また、映像制作を通して、自分自身を客観的に捉える視点も育まれていました。単に、メッセージを言い放しにするだけでなく、制作の過程でi-Padで再生し、すぐに見返したり、作品としてみんなで視聴することによって、自分自身の姿を客観的に見ることが出来ていました。自分のメッセージが流れ、友達から評価されたり、雄勝中の生徒達から温かい返事をもらうことで、自分の言葉もけっこう良いものだと思った生徒も多かったようです。自己肯定感、自尊感情を育む上でた効果があったと思います。

最後に、視野が広がり、他者を思いやることができるようになりました。映像教材はマスメディアではなかなか伝わってこない、現地の状況や人々の信条が描かれていました。この教材の視聴を通して、生徒達はより具体的に被災地を思いやることができました。生徒たちは自分の身の回りのことだけでなく、広い視野に立ち、復興のためにともに助け合い支え合って生きていくことの大切さを学ぶことができたと思います。将来、なにかチャンスがあった時に、この授業を思い出し、被災地への支援活動やボランティアなどに参画してくれることを期待しています。このような気持ちの種を持たせることができた授業でした。こうした機会をいただけたことを改めて感謝申しあげます。

「被災地を想う」

① 6月　道徳
応援メッセージ写真　撮影

② 9月　総合的学習の時間＜人権教育＞
映像で学ぶ「被災地は今」
i-Padを使った応援メッセージ撮影

③ 1月　道徳　リフレクション
自分たちのビデオ・メッセージを視聴
雄勝中からの手紙を読んで考える。

② 9月　総合的学習の時間

(1)
「川崎市子どもの権利」に関する条例　　ダイヤモンド・ランキング

安心して生きる権利　　ありのままの自分でいる権利
自分を守り，守られる権利　自分を豊かにし，力づけられる権利
自分で決める権利　　参加する権利　　支援を受ける権利

(2) いじめと人権について

大津いじめ事件について新聞記事で概要確認。
「川崎市子どもの権利」条例から侵害された項目を考える。
朝日新聞「いじめられている君へ」のアドバイスをまとめ、発表。

② 9月　総合的学習の時間

(3) 映像で学ぶ「被災地は今」

・8月の被災地視察の様子、雄勝の中学生の言葉、
雄勝中の生徒たちの太鼓演奏を大型テレビで一斉視聴。

・i-Padで感想メッセージを撮影。

・i-Padを使った印象を振り返る。

② 9月　総合的学習の時間

i-Padを使った感想

すごく楽しかった

画面が大きくて使いやすかった。
簡単に写真がとれて便利。・画像がすごくきれいだ。
動きがスムーズでタッチパネルの反応がいい。

重いし大きいので持ち歩きには合わなくて不便。

気持ちが伝わると良いです。こういう活動は良いなと思いました。
被災地のことを考えるとこんなことしていて良いのか？と思った。

③ 1月　道徳　リフレクション

自分たちのビデオ・メッセージを視聴

3年生全体で同じ気持ちになっていて、僕たちも一つになっている所が詰まっていたと思う。

たくさんの想いが伝わったあたたかいものになっていた。
映像だからとても気持ちが伝わるものだと思った。

一つのものを見て、大勢の人が同じような気持ちになって、違うことを言っているのは、一人一人がきちんと考えていたからだと思った。自分の経験に基づいて言っている人の言葉は重かった。

③ 1月　道徳　リフレクション

雄勝中からの手紙

私たちの演奏が皆さんに元気を与えることができて、すごく嬉しいです。今、私たちが太鼓演奏をしたり、学校生活を楽しく送れているのは、応援してくれる皆さんのおかげです。本当に感謝しています。受験という大きな壁がありますが、お互いに助け合い自分たちの夢や目標に向かって頑張っていきましょう。進学しても皆さんとの交流を深めていきたいなあと思っています。今回は本当にありがとうございました。

川崎と言えば、自分、サッカー部なので川崎フロンターレですね。西生田中のみなさんもサッカー部はありますか？いつか遊びましょう。お互い受験生なので、あと数か月、勉強して最後の中学LIFEを楽しみましょう。合格願う！

③ 1月　道徳　リフレクション

雄勝中の皆さんからのお返事を読んで…

僕たちのメッセージが相手に届くいてしっかり答えてくれて、つながりがもてたと思う。僕たちは応援する気持ちをメッセージに込めたと思いましたが、逆にこの手紙で私たちが応援されているような気がして、東北の方は強いんだと感じた。

他人事のように、他の世界の出来事みたいな感覚から、
今、つながっていて、今、被災しているのは日本であったのだと
リアルな返事を通して感じることができた。

皆さんの方が苦しいはずなのに、「頑張れ」という温かいメッセージをもらったことが嬉しかったです。いつか太鼓を生で聴きたいなと思いました。

③ 1月　道徳　リフレクション

応援メッセージを伝える時、
どのメディアを使いたいですか？

③ 1月 道徳 リフレクション

i-Pad派

映像で、表情が見えるので気持ちが伝わりやすい。

字だけでなくメッセージを送る人の顔が見えるのは大切だと思う。

字だけでは伝えられない何かがきっと伝わると思う。

自分の口で伝えることができる。

③ 1月 道徳 リフレクション

メール派

手軽に速く自分の気持ちが伝えられるから

メールなら画像も添付できる。

同時に沢山の人が見られる。

すぐに送受信できるから、身近に感じる。

メールの方が本心を書ける。

映像や手紙だと真面目にしなければいけない。

③ 1月 道徳 リフレクション

手書き文字派

自分の顔が映っているのは恥ずかしい。
文字の方が映像で照れくさくて言えないことをちゃんと書けるから。
声に出さなくていいので思っていることを素直に書ける。

手で書くとその分、自分の想いが伝わると思うから。

言葉に意味があるので手紙につづりたい。
メールだと電子文字になってしまって、たとえ良い文でも、手書きにはかなわないから。

i-Padは高価で重く、編集が自分には難しいので

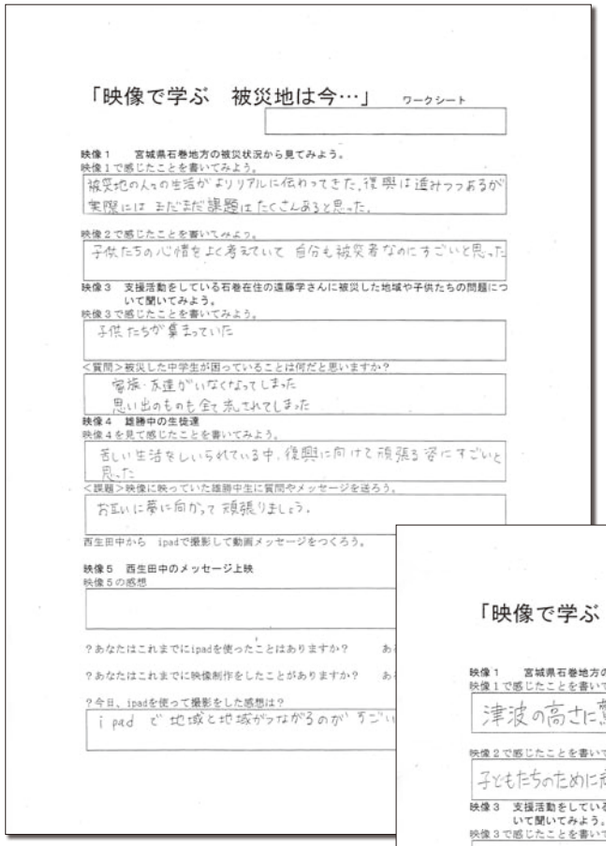
ま と め

映像教材を通して、より具体的に被災地の現状やそこに生きる人の心情を深く思いやることができた。

静止画、動画の制作を通して、メディアの特性を理解し、メディア活用の領域を広げることができた。

映像を通して、自分自身を客観的に捉えることができた。

自分の身の回りのことだけでなく、広い視野に立ち、復興のために、共に助け合い、支え合って生きていく心情を育むことができた。



「映像で学ぶ 被災地は今…」 ワークシート

映像1 宮城県石巻地方の被災状況から見てみよう。
映像1で感じたことを書いてみよう。
被災地の人々の生活がよりリアルに伝わってきた。復興は進みつつあるが実際には まだまだ課題はたくさんあると思った。

映像2で感じたことを書いてみよう。
子供たちの心情をよく考えていて 自分も被災者なのにすごいと思った

映像3 支援活動をしている石巻在住の遠藤学さんに被災した地域や子供たちの問題について聞いてみよう。
映像3で感じたことを書いてみよう。
子供たちが集まっていた

<質問>被災した中学生が困っていることは何だと思いますか?
家族・友達がいなくなってしまった
思い出のものも全て流されてしまった

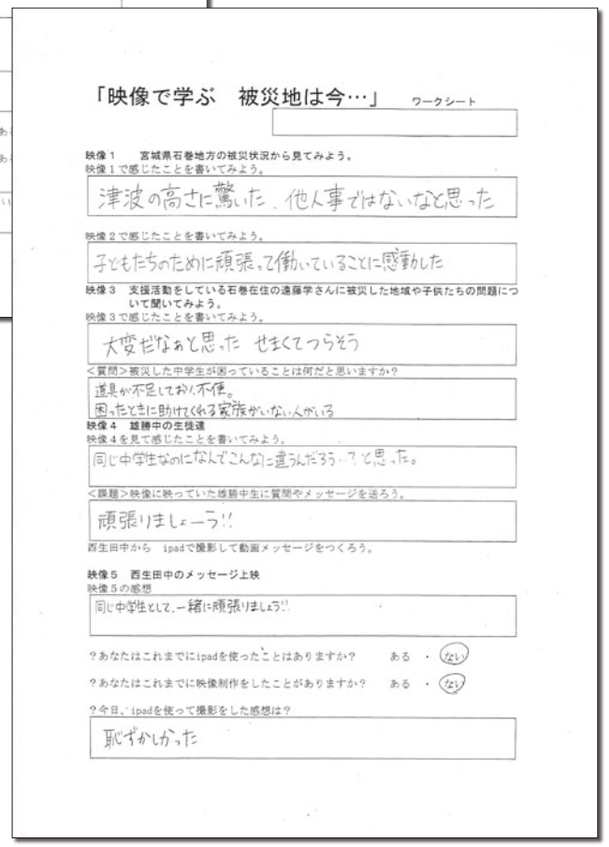
映像4 雄勝中の生徒達
映像4を見て感じたことを書いてみよう。
苦しい生活をしいられている中、復興に向けて頑張る姿にすごいと思った

<課題>映像に映っていた雄勝中生に質問やメッセージを送ろう。
お互いに夢に向かって頑張りましょう。

西生田中から ipadで撮影して動画メッセージをつくろう。

映像5 西生田中のメッセージ上映
映像5の感想

?あなたはこれまでにipadを使ったことはありますか?
?あなたはこれまでに映像制作をしたことがありますか?
?今日、ipadを使って撮影をした感想は?
i pad で地域と地域がつながるのがすごい



「映像で学ぶ 被災地は今…」 ワークシート

映像1 宮城県石巻地方の被災状況から見てみよう。
映像1で感じたことを書いてみよう。
津波の高さに驚いた、他人事ではないなと思った

映像2で感じたことを書いてみよう。
子どもたちのために頑張って働いていることに感動した

映像3 支援活動をしている石巻在住の遠藤学さんに被災した地域や子供たちの問題について聞いてみよう。
映像3で感じたことを書いてみよう。
大変だなぁと思った せまくてつらそう

<質問>被災した中学生が困っていることは何だと思いますか?
道具が不足しており不便。
困ったときに助けてくれる家族がいない人がいる

映像4 雄勝中の生徒達
映像4を見て感じたことを書いてみよう。
同じ中学生なのになんでこんなに違うんだろう…と思った。

<課題>映像に映っていた雄勝中生に質問やメッセージを送ろう。
頑張りましょーう!!

西生田中から ipadで撮影して動画メッセージをつくろう。

映像5 西生田中のメッセージ上映
映像5の感想
同じ中学生として、一緒に頑張りましょう!!

?あなたはこれまでにipadを使ったことはありますか? ある・ない
?あなたはこれまでに映像制作をしたことがありますか? ある・ない
?今日、ipadを使って撮影をした感想は?
恥ずかしかった

西生田中学校３年生の iPad ビデオレター

雄勝中学校３年生へ
西生田中学校３年から

・1 男子　@外が見える踊り場で

皆さん頑張っていますか　僕たちは、川崎、神奈川県の中学校で生活しています。皆さんの太鼓を見させていただいてとても感動をしました。こんな大変なときに自分たちのできることを精一杯やっている皆さんの姿は、とても僕の心を打ちました。ありがとうございました。

・2 みんなで撮影しているシーン

雄勝中学校の演奏を聞いてとても勇気が感じられました。

・3 男子

雄勝中学校の皆さん

・4 女子２名　@教室

こんにちは

・5 男子

西生田中学校の片桐です。太鼓とか見せてもらって自分も少し被災したんですけど被災地の皆さんが震災に負けなかったので自分もこれから負けそうなときもあるんですけど自分も負けないで生きたいと思いました。
あと同じ中学生なんでできれば遠く離れてますけどお互いに支え合っていければいいなと思いました。

・6 女子２名

小さなことでくよくよしている自分が恥ずかしいなと思いました。
明るく過ごしてければいいなと思います。震災でいろいろなことがあったと思うんですけどみんな団結して逆に幸せにしているのがすごいと思いました。

・7 女子２名　@教室

食べ物とかあたりまえに使っているものを大切にしていきたいと思いました。
今まで大震災は現実味を感じなかったのでちょっと別の話だなと思っていたのですけど
今回ビデオを見てすごい、今まで自分が使って来たものが全部なくなっちゃうというのは
とても怖いことだなと思いました。

・8男子　@教室

僕はテレビなんかで被災者の現状を見て皆さんの全てを知っているつもりでしたがまったくそんなことは分かりませんでした。
みなさんの太鼓の演奏なんかを見て僕たちもこれから頑張っていかなきゃいけないことがあると思いました。

・9 女子２名　@廊下

震災のショックから真先に前を向いて行こうという強い意思が感じられました。素晴らしい演奏だったと思いました。古いタイヤを使った工夫をこらした演奏で
とても私たちはビデオで見ただけだったけど勇気をもらいました。
雄勝太鼓は　聞いていた周りの人々にも勇気を与えられるとてもすごい演奏だと思います。
これからも大変なことがいっぱいあると思うんですけど頑張ってください。

・10男子２名　@教室

A:こんにちは
B:こんにちは
A:先ほどビデオを見てたと思うんですがどう思いましたか
B:皆さんは津波でいろんなものが流されてしまったんですけど太鼓で自分たちの気持ちを伝えたりしているところが私たちと同い年の中学生には、見えないなと思いました。
A:そうですよね。僕もあのもらったタイヤと１００円の棒で奏でたあの音色は今でも胸に残っています。本当は僕が被災地の方々に勇気を与えなければならないのに逆に僕が勇気をもらいました。
B:そうですね。僕たちにもできることがあったら何でもやるんではい。

・11 男子　@廊下

あんなに素晴らしい演奏ができるんだからまだ大丈夫と思います。

・12 男子２名　@廊下

これからの日本のために共に頑張りましょう。

・13 男子　@廊下

和太鼓の演技に僕は感動しました。僕もみんなのようにかなえたい夢を果たしたいと思います。頑張ってください。

・14 女子　@教室

クラスのみんなが無事だったのは、すごいなと思いました。

・15 男子　@教室窓

お互いに受験勉強や学校生活を頑張りましょう。

・16 女子　2人

がんばってください
がんばってください

・17 女子３名

川崎から応援しています。

・18 女子２名　@教室

まだまだ苦労することがあると思うんですけど頑張ってください。
同じ中学生として頑張りましょう。

・19 女子２名　@渡り廊下

日本は、つながっていると思うから私たちも協力できるようにここで頑張ります。

・20 男子３名　@廊下

3.11の震災の時、僕たちは、部活をやっていて家に帰って早退してテレビを見てニュースで東北の方で大きな地震があって僕たち、大きなショックを受けました。
それで僕たち、その時は何でもいいから東北の被災した人たちに何かできないかなと考えてこのような授業を機にこういう映像を撮らせていただきました。ビデオを見てそういうタイヤでみんなで復興を目指しているのを見て感動して僕たちもどんなことでもやっていきたいと思いますので頑張って復興を目指していってください。
今回の地震でいろいろ大変なことがあったと思いますけど僕たちは、直接何かをすることはできないけど心は、つながっていると思うので仲間がいることを忘れないで少しでも早く復興を手伝えたらいいと思います。

5

学生と家族や故郷　そして「私の3.11」映像ワークショップがつなぐもの ～「記憶を語る」ことについて

5 学生と家族や故郷　そして「私の3.11」映像ワークショップがつなぐもの ～「記憶を語る」ことについて

報告：斉藤修平
埼玉県立大学講師

斉藤先生の授業は、通常はスポーツジャーナリズム論であり、活字ジャーナリズムと映像ジャーナリズムを分けてスポーツジャーナリズムの歴史、文化、ドキュメントを追求なさっています。今年度は、１０月１１月の４日を使い、社会問題である3.11をipadを活用して学生にとっての家族た故郷そして自分自身の3,11に対峙させました。

大学の中で、iPadの撮影機能を使い、いろいろな実験をいたしました。その中から、何を得たのかということを、急いで説明いたします。まず、今回の実験では、「記憶を語る」ということをテーマに行っています。この学科は、スポーツジャーナリズム論のゼミになっています。１コマ９０分です。普段は撮影に縁のない学生なのでゼミ室の中で慣れるため、一人に自己紹介をしてもらい他の人は、その学生を撮影させました。学生は、中国からの女性の留学生の二人を含め、合計で９名です。「自己を語る」テーマでは全員でお互いに撮影しあいました。自然に語れたようです。このように始めのステップ体験は、「自己を語る」でした。

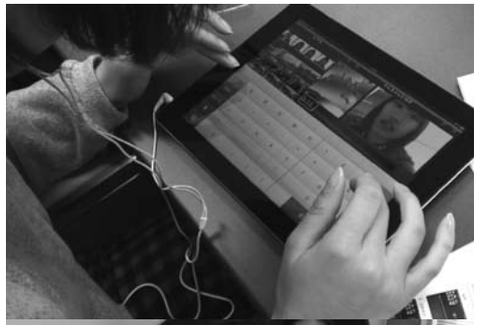
次に大学構内に出て移動導線に沿って動いてもらいました。屋上のような、ホールのような外の空間で２番目のステップに取り組みました。グループを２組に分け、家族をテーマに今度は一人に対してグループが取材する形で撮影しました。つまり、取材される学生は、カメラに囲まれながらみんなから質問される体験となります。学生は、質問への抵抗もなく家族のことや自分の将来について驚くほど真摯に語りました。やはり撮影はその場の問題といいますか「場」を抜きに語れないと思います。

私が実施したのは、大学という場で、あるいは教室という場で、あるいは講義という場の中で、今、できる事ではないかということで、実験を行ってみました。３番目のステップは、学生さん一人一人、自分一人でiPadを持ち自分自身を相手に撮影に取り組む実験をしました。大学構内にちらばって自分の故郷について自分一人でipadに向かって語ってもらいました。

そして２日目に４番目のステップとして、自分自身の記憶、3.11の体験と震災についてまた、一人になっていただいてipadに向かって語ってもらいました。

そしてその映像の語りを文字に起こしてもらい、文字を見ながら、またipadの編集機能を使いその使い方をプリントしたものを見ながら自分の語りの映像編集を体験してもらいました。

４日目にゼミの教室の中の白壁を使ってプロジェクターを持ち込みipadにつないで上映、ミニ映画祭をやりました。そして、さらにその映画祭で出したものを一人の学生がさらに再編集して、シンポジウムの中で上映いたしました。これは、動画の撮影加えて編集上映機能があるipadが１０台も教室に持ち込めたから出来たことです。実際には、奇跡に近いことです。ソフトバンクテレコムさんのご協力はすごくありがたかったということです。学生は最初ipadを触ることに非常に喜びました。それから、個人的に今度はメッセージを吹き込んでいくのですけれどもちょっと戸惑いがありましたね。こういう経験がないので戸惑っていました。それからしばらくすると、語りが順調に行われ、さらに語り直しということが起きます。語り直しというのは、語った内容の書き起しの文章を読み込んだり、編集作業で何度も見直すなかで起きていく現象。そうして発表していくということになりました。この間にですね、個人個人の営みから、



お互いの作品の内面に関心を寄せて見るようになり、なんというのですか、参加した学生が仲間になっていくという感じがしました。教員側として実感いたしました。これは、今回のどの実践者の取り組みでも見られた現象だろうと思います。そういう意味で、映像の力は素晴らしい。大学生は、普通、半期の授業をやってもですね、学年と学科が違うと口を利かないのです。殆どもう“知らない仲間”で終わってしまうのですけれど、こういう作業をいたしますと、完全にコミュニティになっていく。力がわいてくるなというようなことを実感しました。

それで問題はですね、資料の右側の所に、〈コミュニケーションの活発〉としてあるのですけれど、私たちがこの実験を何のためにやったかというと、地域社会をもう一回再生したり、地域社会が活性化したり、あるいは地域の社会教育力をアップさせるためにはどうしようかっていう問題意識があったわけです。これを映像を通してやったわけですけれども、まず映像装置を教室に入れるとですね非常に誘発性が高いというか、発話性が伸びます。もう、会話が伸びていくっていうことがありました。そして、まぁ伝えることですね、伝えることに対して熱心になったと思います。で、伝えることが熱心になるっていることが起きてきました。どういうことか申しますと、表現のための技術をいっぽうで磨いていかなきゃならないわけです。そういう意味で、どうなんですかね、コミュニケーションっていうのはツールというのは案外無視できないと思いました。それから、相手の映像を見るわけですから、受け取ることが関心を持ついう力、柔軟にその相手の作品を見る力、それから語り、相手の話を聞くこと、これも養成出来たかなと思います。映像のいいところは、話し手が映像で見えるということなんですね。これが良かったのじゃないかなって思っています。それからさらに、お互いのやり取りを深めるためには、そのやり取りに関する知識が追加されないと、やり取りは深まらないので、そういうところも、お互いが深まっていったのじゃないかなというふうに見えました。それから映像の作品をみなさんをお互いに作ったものを見るわけですが、自分の立場からまず考えること、それから相手の立場になって考えていく場面もありました。同時にですね。望ましい回答って言いますか、そういうものを、相手と一緒になって、見つけようっというような現象もあったのだというふうに思っています。

先ほど、佐藤さん、服部さんの方から、記憶の問題がでましたね。記憶。それから記憶という問題と、もう一つは学生ではあっても子供でもいいので、その、価値観の成長と付き合うことだという、重要な指摘があったのですけれども、私もですね、この映像をみなさんが撮影しながら、どんどん価値観が、新しい価値観が生まれていく、その価値観が生まれて成長していくそのプロセスが良く見えたので、それとは付き合うっていうことが、実は、ipadに限らず、映像を使ったことで、非常にうまくいったのじゃないかなと思います。問題は記憶というものをもう少し考えないといけないなと思っているわけなんですね。記憶っていうのは、まぁ本当は、その昔は記憶と歴史というのは一体化していたのだけれども、いつの間にか記憶と歴史が分断されたわけですよね。で、記憶は一時的なものだし、私的なものだし、情緒的なものだし、不安定的なものだしというような括りになってくるわけです。で、歴史っというのは公的であり、分析的であり、あるいは固定的でありという、あるいは理性的であり、学術的でありということで、いいポジションを獲得しました。記憶と歴史が分断されていく中に私たちは生きているということなんですね。その中で、いま私たちがやろうとしていることは記憶の復権というか、記憶というものをもう一回、どうやって大事にしようかなっていう話だと思うわけですね。で、この時に、私たちが用心しなきゃいけないのは、記憶というのは構成されちゃうもの、素朴なものではなくて、構成される、あるいは再構成される、再編成されるっていう形で記憶というのは私たちの中に登場してくるわけですよね。その時に、私たちはどこでその、記憶というものをどのように担保にするのかというと、「場の問題」というところですよね。そこをやっぱり、「場の問題」をちゃんと把握しないといけないかなということ、つまり、「語られた場」と、「語られた時間」というふうに、まぁ、記憶に対する、一つの属性を付けていかないといけないのかなというようなことは思っ

ています。そして、次第にですね、記憶がですね、権威化しちゃう。「みんな覚えているだろう」みたいな感じで、記憶が権威化したり、あるいは記憶そのものが権力化しちゃうっていう記憶の怖さというのもあるわけですから、その辺は気を付けないといけないのかなというふうに思っているわけです。まぁご承知のように、私たちは記憶を強制される社会に生きていることも事実なんです。やっぱりナショナルメモリーということで、国家的にこういうことを記憶しろっていうことがあるわけですから、そういう中でその、個人個人の記憶の自由度というのをどうやって担保にしていくかっていうこともあるのかなということを、ざっくり、この資料に描いてあるわけです。それで、２枚目の資料ですね、集落とか村とか町というのはとにかく記憶装置だと考えておいた方がいいだろうと。記憶装置の中に、どんな記憶のコンテンツがあるだろうかというと、特定の人、物、社会、年中行事だとか、風俗、習慣、方言、祭礼、遺跡、史跡、景観、それから多くの人々ですね。あるいはお店だとかあらゆるものがその、地域社会にあるわけですよ。これを地域社会という言葉になるのだけれども、これを一つは記憶装置と考えましょうよというふうに、私は思います。そうすると、被災地に行った被災地というのはほとんど、記憶装置を失っちゃった社会になるのだなというふうに改めて思ったので、私たちは、人、物、社会が、その喪失というのは、一番喪失したものというのは記憶装置が、喪失したんだという理解が大事なのかなということを考えました。そして、今は町おこしとか村おこしとかいうことがあるけれど、実はそうではなくて、語り起こし、あるいは語り直しという作業があって、記憶回路の修復、こういうことが重要かなって感じるわけです。こういう時に、この非常に、撮影と編集が一体となりオールインワンのipadみたいな、タブレット端末というのは有効に機能していくのじゃないのかなというようなことを考えています。いろいろと、記憶は素朴なふりをしているけれど案外厄介なところもあるから、その辺は気を付けたいなと思います。最後、学生が一言あるので…バトンタッチします。

野澤宏子さん

埼玉県立大学4年

お話させていただきます。授業で学んだことで、受講生同士のコミュニケーションが改善されました。同じテーマで、学生全員が参加して講義室で上映したことで、それぞれ別々の経験をしているということを認識しました。このことは知らない者同士が、互いを知るきっかけとなりました。コミュニティづくりのヒントになると思いました。被災地が大きく報道されることで、自らの3.11を語りだすことを忘れていたのだということを思います。それぞれの3.11を語り始めることで、多様な3.11が浮き上がり、自分の経験も大切だったというふうに感じて、被災地の経験をもう一度とらえなおすきっかけになり、この経験を私的な、小さな被災地経験として閉じ込めてはいけない、私たち国民の経験として、語り直さなければいけないというふうに感じました。そして、被災地体験の大きな出来事に、自らの小さな体験は、小さすぎるかなって考えていました。メディアから流れてくる被災地経験の過剰性に対して私たちの経験は過少という世界に閉じこもっていて自分たちの経験は、評価が低かったのです。でも自分たちの経験は決して過少ではなくて、被災地の方々の経験につながっていくのかなというふうに感じました。同じ学生同士であっても震災を経験した一人一人の立場や、場所というのがみんな違っていましたので日ごろ身近に接している友人同士であってもなかなか話す機会のない、震災の経験や思いをipadで語ることができました。

学生たちの映像一人語り

（故郷）

僕の生まれ育ったところは、長野県の安曇野市の明科というところで　うーんと山ばっかりの所です。本当になんもないし、田舎だし、もうちょっとしたら携帯の電波も入らないような所なんですけどまあでもそんな所ですけど１９年間生活して来たところですごい、なんだろうこっち来て一人暮らししてたまに帰るとやっぱりいいところ　だなーと思いますね。なんだろう。後は、すごいやっぱ緑いっぱいだし、山あるし、冬には、雪あるし、でも、すごい大好きな町です。そこに帰って就職したいかと聞かれるとちょっと微妙なんですけどたまに帰るくらいが分かるという言い方ですけど　自分、たまに帰るくらいが、やっぱちありがたみが、あるっという気がします。でえーとまあ結構今メディアでも多く取り上げられることが多くて　えーとまあ　毎シーズン１年に何回かは、撮影で今使われていたりしてますね。（咳）すごいすごいいいところです。でまあ、水が美味しいです。やっぱり、きれいだし、後は、そうだなあ緑いっぱいですね。やっぱりそこがいいところだなと思います。僕は、そんなところがすごく大好きです。はい。でもまあ、機会があれば、実家帰りたいとは、思いますけど、そうですね有名なものとかあんまりないかな。あんまりないです。でもすごいいいところです。緑いっぱいなんで。まあ実家帰ったら町を歩くようにしています。なんかいろいろ思い出はあるし、その場所、その場所にだから歩くことで思い出すというかいろいろなつかしいなと感じますね。うーん、後は、特にはないかな。でも地元は、わりかし大好きです。はい。（あごに手をあて）以上です。

「わたしの3.11」

こんにちは。私は、去年の３月１１日の日、あの日は、病院で仕事をしていました。一応、私、その時は、看護師さんとして病院で日勤業務をしていました。はじめに　あっ揺れてるなと思ってそのうちになかなかおさまらなくて　（看護）師長さんとかが怒鳴ってあっこれは、普通じゃないな６人部屋のドアをとりあえず、開けた状態にして入り口であっ地震来てますね　大丈夫ですね。大丈夫ですよ。なんて言ってたんですけど　もうやっぱり点滴　天井からぶら下げる金具とかがすごい揺れてあぶなかったりしてあわてて外したり、窓を開けないとまずいというふうに（看護）師長さんとかが、怒鳴りだしてあわてて窓を全開にしたり、以外と備え付けのベットのストッパーがかかっていなくってベットが揺れ出してあわててストッパーを止めたり車いすの方もブレイキと以外とかけてなくてゆさゆさ揺れだして　あわててストッパーをかけて手を握っていたり、ということをしていました。長い事揺れがつづいたりとかという形だったんですけども　その後に急にやっぱりエレベーターが使えないとか、電源系でゆ液ポンプとかがちゃんと作動しているかとかそういうのを確認してまわったり、大騒ぎでした。その日は、急遽、例えば、入院患者様がくるというときもエレベーターが使えないのでリハビリ関係とか、事務方関係が総出で階段でタンカを使って狭い階段を使って病棟に上の階に患者さまをあげて入院させたり、後は、食事も　もう事務方から全員総動員でリレー形式で手渡し、バケツリレーでやったりして大騒ぎでした。でも、そこまで病院にいる時には、実感もなくニュースも全然見る状態ではなかったのでとりあえず、大丈夫ということで実際の勤務は、５時半で終了だったのかななんですけれども７時近くになってとりあえず一旦今日は、日勤の人が帰って明日勤務があるから～休憩室にもどってテレビをつけたらなんか大惨事になっているということが、わかり、千葉の方の海の方のガスタンクとかが燃えたり、とんでもないことになってるって気づいてすごいあの時、地震が実際にあった時よりも　その夜勤務に帰る時にテレビつけた時の衝撃の法がすごく大きかったです。その後に私はまあ　寮だったので病院から歩いて５分１０分のところの寮に帰ってその翌日も日勤だし、と思ってでもテレビは、つけっぱなしにして見てたら、夜中１２時前と帰る前後ぐらいになって計画停電だとなって電気が止まるってなってひえーみたいな形になってどうしよう　とか思っ

て　すごい　なんか青ざめたのを記憶に残っています。たまたま私は、結局勤務の時は、計画停電にあたらなくて　結局県立大学にくるということで退職が決まっていたのでその後、地震のあった１週間ぐらい、一週間もなかった退職して形だったんですけれどもやっぱり、それの後に　夜勤が１回あったんですけども　それはすごく　怖かった夜勤でした。一応病院からも　懐中電灯とか用意してくれていたんだけど　自宅からも懐中電灯を持って行き　もうはきそうと思いながら　夜勤そして　夜が明けて他のスタッフさんが来たときには、すごい安心して良かったと思っていたのを覚えています。

「わたしの3.11」

原発事故　地震についてかということで　自分がどこにいたか何を考えたか等をこれから話したいと思います。３月１１日地震が発生したとき、自分は、軽井沢プリンスホテルスキー場でインストラクターとして働いていました。でレッスン中でした。丁度。はい。山ごとぐらぐらと揺れてお客さんたちの悲鳴が聞こえてリフトがロープにつるされているんですけれども　ぐらぐらと揺れて上下に思いっきり揺さぶられていてリフトに乗っている人たちの悲鳴も聞こえて、とにかくレッスン中の皆さんを一度ストップさせて座らせて揺れがおさまるのをまってという感じでその瞬間を迎えました。とてもとても非日常的で衝撃を受けました。ただ、スキー場、震災の後、余震等もあったんですけどリフトが止まらずにそのまま営業しておりました。

ただ、あれだけ大きな揺れがあった後なのでお客さんがみんな帰られてということでスキー場がひとっこ一人いないのに営業しているという状態になりました。不謹慎で申し訳ないのですが、レッスン直後、テレビやニュースを見ていなかったのでそこまで大きかったという地震だったとは、あんな津波が来ていると思わず、リフトが動いていたので営業終了まで誰もいないスキー場を一人で堪能していました。でスキー学校の本部に帰ってニュースを見てそこで初めてあの津波の大きさ、揺れがどれだけ大きかったのかということを知り、言葉にならなかったのを覚えています。これは、本当に現実に起きている事なのか、SF映画か何かではないのか　というような考えさえもってしまいました。現在、震災が、あってから時間が少しずつたっていますが、様々な政党が脱原発だったり、復興支援だったりというのを呼びかけて政党が

公約として考えたりしていますが、NHKのクローズアップ現代で復興支援と懐けられていた予算がまったく別のことに使われていたりいるだとか　相変わ

らず、復興が　進んでいない現状を見ているととてもとても　日本の政治は成り立っていないんだなあというのが　最近は、強く考えています。原発についても　脱原発脱原発というのは、簡単なことですが　実際原発で働いている人も沢山いますし、原発から電力も３割から４割ほど日本は供給を受けています。それに代わる代替エネルギーを　しっかり考えているのか原発で働いている人たちの雇用をどう守るのかこれ　たかだか、１０年　短い時間で解決できるとは、とうてい考えられないです。なので少しずつ割合を減らすのもいいですけど　より、原発の安全性を高めて行くのが、一番現実的なのかなと自分　僕自身の考えですが　そう考えています。はい。まだまだ復興とてもとてもできないぐらいに津波でのこそぎ流されている地域もまだ残っているのでこれから先、自分が何かにできることを考えるとそういう街のために何ができるのか　微々たる力の自分自身迷ってしまいますが、例えば、節電だったり機会があれば。ボランティアに行ったり　そういうことをしながら　少しずつ貢献ができれば、いいのかなと考えています。放射能の影響も様々なところに広がっていて正直、海外の研究者や日本でも放射能を研究している人たちの見解からすると福島は、もう放射能が　もう人が住めるところではなくなっている。という話をされています。（はい人が通ったので中断しました）そういう

のを聞いてしまうとそこに住んでいた人たちが本当にかわいそうというか　かわいそうじゃ片付けられないようなそんな　感情を今はいだいています。そういう事故がないようにしっかり安全対策を　この地震　これくらいの地震規模を想定してこれから先安全対策をしていってもらいたいなと思っていますが、政府に期待してもあまりうまくいかないだろうということを思うと今の日本は、いったいどこで変えて行ったらいいのかなと誰が動かしてくれるのだろうかと考えてしまいます。なので国民一人一人が　しっかり、意見を持って自分の考えたあう政党議員さんにしっかり投票して選挙を破棄しないようにしようというところも大事になるのかなと今は、考えています。話は、それてしまうのですが、国会議員は、あまり自分の関係ない審議の時には、ゲームをしていたり、寝ていればいいという議員さんが多いのでまず、衆議院の４８０は１００議席でいいのではないかと比例代表５０　小選挙区５０ぐらいで　いいんじゃないですかね。もはや、法案の議決権を持たない参議院は、５０人とかでいいんじゃないでしょうか　その浮いたお金をしっかり復興予算、原発の安全対策に使ってほしいなと今は、心から願っています。そろそろ時間になるのでここらへんでインタビューを切ります。ありがとうございました。

「わたしの育ったまち」

自分で自分を撮れというのでテーマは、自分が生まれ育った地域についてです。自分で自分が生まれ育った地域　出身は、長野県の北佐久郡　軽井沢町になります。

言わずと知れたリゾート地　有名な避暑地ですが、僕らが住んでいるような所は、普通の街でございます。ただし、本当に空気がきれいで僕たち地元の人しか行かないような奇麗な自然の場所もあって落ち着ける街、そんな地元が僕は、本当に誇りに思っていて大好きな街です。長野県軽井沢町で育ったこともあって自分は、スキーをアルペンスキーをかれこれ今年で２０シーズン目になりますが、ずっと続けてくることが、できました。はい。本当に町の魅力あげ始めたら　きりがないのですが、アウトレットが有名でよく観光客の皆さんが、夏休みやゴールデンウイークを利用していらっしゃるんですがそこには、地元の人たち向けのバーゲンというのもあって観光客が一段落したときに普通の７５パーセント割引とかで　物を売っているがあります。そんな時は、大チャンスですのでみんなで買い物に行ったり、します。後は、その隣にスキー場がありますので　自分は、そこでインストラクターをやりながら　ちょっとお金を稼がせていただいて　自分のスキーの競技のためにそのお金を使いつつ遠征をしております。

自分がスキーを続けている自分の地域ともう一つどうしても欠かせないのが、長野県　同じく長野県東信地区菅平、菅平高原スキー場です。そこで中学高校、そして今大学ともうかれこれ１０年以上お世話になっております。そこは、レーサーにとってアルペンスキー場の聖地と言われておりまして冬場　シーズンまっただ中になると、沢山のレーサーが来ています。その中でいい刺激を受けながらしのぎを削っております。はい。とっても長野県は、寒いところ　長野県でも寒いところに住んでいるんですが、御陰さまで夏が苦手でございます。

今後の展望といたしまして就職が無事決まったそれをうまく利用しながらずっとスキーを続けて　いつか世界の檜舞台　プロの舞台のところに立ちたいというよりはもう立とうと思っています。そのために現在は、ここ後ろに写っております埼玉県立大学で残りの学生生活がまだ残っていますがそれを全うし今シーズンも精一杯戦ってその舞台を少しづつ引き寄せられると思っています。以上で終わりでーす。

「わたしの3.11」

はい　えーと　３月１１日

３月１１日の震災の日は、僕のバイト先の研修をみんなで受けようとしていたところでした。えーとスターバックスに２月に面接を受けていっしょにお仕事しましょうと言われて　そこから３月から新しく原宿の方で研修をしなきゃいけないということで原宿の方に３月１１日は、行っていました。で３月１１日の２時５４分に　研修をする日があるんですけどそのビルの８階でやる予定だったのでエレベーターに乗ろうとしたところエレベーターが点灯しなくなってエレベーターが一階に降りて来た瞬間に１のランプが消えちゃってそしたら　どんどん　ゴゴゴゴって揺れが来てあっ！　これはヤバイやつだと思い、外に出ました。（鳥が鳴いている上を見る）はい。外に出ても、すごい揺れがおさまらないので　まわりにビルの工事をしている会社の人もいたのでそのビルの工事の人が何か落ちてくるかもしれないから中に入れって言われたんですけど中に入ったとしても一階にいるからつぶされちゃいそうだし、つぶされそうだし、右往左往してました。５分くらいたって　えーと

だいたい余震が何回かあったと思うんですけどそれがおさまった　それがおさまった時にまた８階に上ろうとしたんですけどエレベーターも使えないので階段で８階まで上りました。上る途中にひびが、階段にあってそれは、やばいなって思いつつ　階段を登ってました。上に行けば行くほど揺れがひどかったので　階段で８階まで行ったんですけど結局　１階までもどることになりました。で研修に来たのは、僕一人だけじゃないので周りの見ず知らずのスターバックスの新人の人が、一緒に来ていたのでその人たちも一緒にすぐ近くの小学校に避難しました。その時、あの今日は、家に帰れないなていう覚悟をしていました。で丁度、原宿の近くのところにスターバックスの本社が、あったのでその本社に３月１１日は、泊めてもらいました。コーヒーもくれました。スターバックスにしかできません。なので本当に帰宅困難者になりかけたんですけど　うん　この部屋だったんですけどそこに１日泊めてくださって　不幸中の幸いといいますか、良かったです。周りの人は、すごい行列でそこらへん　歩いていたり、車は、超渋滞してるし、で友達が、友達というか　同じ新人が、渋谷までバスで帰ると言ってたんですけど行ってから２時間で帰ってきました。１時間かけて渋谷まで行って原宿と渋谷は近いはずなんですけどめちゃめちゃ混雑していたんでしょうね。そんな感じで１日を過ごし、周りのパートナーとも仲良くなり、朝１０時、次の朝１０時ぐらいに一緒に帰ってその一緒に帰ったパートナーの親御さんが車を出してくれたので一緒に乗って近くまで乗せていってもらいました。そんな３月１１日でした。後は、なんでしたっけ。「思い」うーん。「震災への思い」うーん　僕は、去年のじゃないな、今年の春、石巻に行って来たんですけど　（一瞬横を向く）とても１年がたって復興したと言われますが、まったくそんな状況ではなかったです。石巻の駅は、人は、いないし、ちょっと奥を進んだら、商店街みたいなところは、開いているところは、一店もありません。駐車場に仮施設の商店街があったのでそこのパン屋さんに行ってそこのおばちゃんと、時間がなかったんですけど１時間話して、いただいて話をして話を聞いてああ　来て良かったな　って思いました。うん地域に大切な事は、地域にお金を落とす事と風化させないことを周りに周りの人に伝えて行く事じゃないかなって思います。もう１年半ぐらいたちましたけど他の人に　（校舎を出て歩く）　なんだっけ　たちましたけど　みんな　結構震災のこととか、ボランティアも義援金も数がどんどん少なくなってきていると思って　大切なのは、今じゃないかなって思います。ただ、自分一人では、いつでも被災地に行けるわけでないので　まずは、身の回りの人から　誰でもいいと思うので助けられる人がいたらすぐにでも助けていければ、いいんじゃないかなって思います。以上です。

「わたしの3.11」(留学生)

去年　福島の大きな地震がおきました。ニュース見たら、大変だと思います。沢山　人　死んだ　特に

原発の何かが悪い影響かなと思います。だから日本　に行くかどうか　こまります。とても困ります。はい。中国でも　四川大地震がありました。中国は建築が不十分で多くの家が倒壊して　多くの人が亡くなりました。避難所が少なくて　人々がパニックになりました。

中国の人は、地震をすごくこわいと思っている。なので日本のニュースを中国で見て、ニュースで津波の映像を見て家が流されて人が亡くなりました。それから　放射能漏れが起きました。放射能が人に害を及ぼしました。人の体に悪い影響があるのを心配していました。なのでその時、日本にくるか悩みました。日本にずっと行きたかったけれど、日本は、地震が多いので自分も大地震にあったらどうしよう、日本の家は、しっかりしてると聞きましたが、どのくらい大丈夫なのか、分かりません。日本で地震が起きたときに津波がなければ、死者の数は、少なかったでしょう。去年の先輩たちは、留学を１年おくらせた。一度は、あきらめようと思った。その放射能が悪影響があれば、留学をやりとげられない。家の人と相談して病院で専門の先生に話を聞いて、情報を沢山集めた。日本の放射能が、どれくらいのレベルなのか、ネットで調べた。資料を沢山、見てから日本に来た。来てみると、日本は、パニックになっていなかった。中国人の方が怖がっていた。これは、おかしいですよね。地震から１年たって私たちが来ました。私は、あまり心配していませんでした。なぜか、日本人を信じていました。

建築の丈夫さとか　放射能をコントロールする問題について　日本人を信頼してました。なので日本に来ました。

「わたしの3.11」(留学生)

中国からの留学生です。今私は、埼玉県立大学の２階にいます。ここは、わたし一番好きなところ、後ろの景色は、とてもきれいだと思います。今日は、ちょっと寒いけど　丁度いいと思います。私は、中国語で話したいと思います。日本語は、下手ですから。

中国語～　２０１１年の地震の時には　まだ中国にいました。まだ日本に留学するつもりは、なかった。ニュースとかで見た地震の後の復興に関心があります。マグニュード８、９の地震があったけれども日本の人たちは、非常に団結力と知識があります。その時、中国では、放射能の影響が大きかったです。みんな争って塩を買いました。塩が放射能に効くと言われていました。その時、塩が非常に高かった。そういう状態だったので去年の先輩たちは、留学の準備をしていたんですが、すごく心配してました。当時の日本は、不安定だと言われて、親が反対しました。その時の先輩たちは、自分の意思を強くもって日本に来ました。自分たちは、３回目の留学生で来るときに、先輩たちとよく話をしました。この時期の留学は非常に価値があって後悔はないと先輩が言った。日本の状況は、中国にみたいに混乱しては、いない。日本の被災地は、正常で中国の方が混乱していた。それは、考えるべきことです。

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3.11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

「わたしの3.11」

３月１１日　２０１１年の３月１１日のことなんですが、あの　僕は家にいてゲームしてました。でちょっと止めようかなと思ったときに地震が来てあっ　地震だと思ったんですけど　あまりにも揺れが激しくて経験したことのない揺れだったんでちょっとベッドの下にもぐりました。でも、確かに強かったんですけど、でもちょっと家具とか落ちたぐらいでまだ大丈夫だったんですけどその後、ゲーム消して普通のニュースを見てたらとんでもないことになってて　どこか、他人のようなそんな感じが　他人事のような　感じがしました。　で　実際そのニュースを見てみてすごく衝撃的でその日の夜　アルバイトで病院に行って　その病院が基本的に電話が、電話も通じなくて　でどうしようもなくて　とりあえず、看護婦さんや先生とかとずっと一緒にいて情報を見ながら、確認して　一番、衝撃的だったのは、気仙沼が　火の海になってたことが本当にもう　なんか映画のような　感じでびっくりしました。あの日の夜に実際テレビ　長野でも地震があって　それもちょっと心配したんですけどでもああ　大丈夫でした。そこ　で後は、あれから、1年半以上たつんですが、１０月の頭に東北へ行ってみて１年半以上たった東北の姿を見て来たんですけど　宮城とか岩手とかは、わりと復興が、がれきはもう、ほとんどなくて　今は、更地状態になっていて　正直、岩手の方から仙台の方まで下って来たんですけど、それがなんか、　夜遅くて暗くてあまり見えない状態だったんですけど気仙沼まで来てちょっと止まった時に気仙沼の港に行ったんですけど、そこで初めて何もないという状況を見て　ニュースとかでよく見ていた　すごいでかい　船が打ち上げられてたところまで行って　もう　本当に本当に言葉じゃ　表せない感情がこう自分の中でこみあげてきて　何もできなかったんです。そこで。とりあえず　自販機でジュース買って　船のとこにお供えものがいっぱいあったんで　そこに供えて手をあわせて来ました。その後、石巻方面にもどって仙台に一旦泊まって　次の日は、また石巻の海沿いの方へ行ってそこから松島とか見てきたんですけど石巻はすごい。

更地とかちょっと遠くの方に家が、海の近くに一軒見えてあそこまだ残ってるんだ思っ行ってみたら、実は、下は、ぶちぬかれていたみたいなところがあったりして　でも　あきらかに津波かぶって　土とかも　だめになっちゃったんじゃないかなと思うところでも　やっぱり、そこで畑を　耕して作物を作ろうとしている　ちょっと衝撃でしたね。ちょっと雨が降ってきたんで（移動）もどります。でも、そっから　福島の方へ行って原発の近くまで行ったんですけど　そこはもう本当に　復興があまり進んでいないという印象が多かったです、原発の近く　止められるところまで行ったんですけど　ほとんど車とか　流されたであろう　車が　まるまる残っていたりしてこっちの方は、ぜんぜん復興してないんだなという　まだまだやるべきことあるなという印象でした。で　一番　衝撃だったのは、南相馬市の一部の集落みたいな通ったんですけど、そこは、家も普通にあるし電気も通っているんですけど誰も住んでなくて人が、本当にゴーストタウン化しちゃってて　そこを見た時は、本当に　なんか　こわかったです。どうしようもないくらい。で　まあ　それから思うのは、まだまだ　復興しなきゃいけないと思うし　今度　かといってお金だけじゃ　だめだし、物だけじゃだめだし気持ちだけでもだめだし、全部ないとだめなんじゃないかな　と思います。で　復興を続けて行くために僕らがしなきゃいけないことは、多々あるし、それが、何か、まだ課題は、いろいろあると思いますが、ちゃんとしたいなと思います。はい。で　もし、また来年、夏か春か　ですけど　機会があるなら　もう一度と東北の場所を回ってみたいと思います。以上です。

「わたしの3.11」

これから　私の　　３月１１日、私は、地元にいました。友達の所に遊びに行くのに電車に乗ろうと駅まで歩いて行こうとしていました。

駅まで行く途中で揺れを感じました。大きな揺れで立っていられなくて近くのフェンスにしがみついて座って揺れがおさまるのを待ってました。おさまった後に状況が分からないので　駅まで行ってみようと駅まで歩いて　駅に歩いたら、私の高校時代の先輩がいてその先輩と一緒にいろいろとお互いに話しました。その時に駅についてすごく　これは、悲惨な状況だと思いました。地面が、割れて　地面から水が、水道管が破裂したんだと思いますけど、地面から水があふれてきて駅の中。ホームを見るとホームの端が盛り上がっていて　電車も使えない状況で　すごい、これは、やばいと　これは、遊びに行っている場合じゃないと　そこから、先輩と別れをつげて家にもどりました。家に帰る途中も結構、いろんな家の塀とか　がらがらに壊れて河原とかも落ちてこれは、余震が来たら、あぶないなと思いつつ、帰りました。家に帰ると家も塀が沢山こう落ちて瓦もごろごろ落ちてて家に着いたら電気がつかなくて　ご近所の人たちとちょっと話し合ったりしてとりあえず、数日分の食料を買おうということで近くのコンビ二だとか　スーパーを回って　とりあえず、自転車で回って食料を確保しました。とりあえず、最初は。その日は、その日買った食料品でご飯を食べて　その日は、電気がつかないので１日中　ろうそくをつけて家で　とりあえず、暗くなったら　すぐ寝るってことでその日は、暮らしました。つぎの日、やっぱ　明るくなってくると　おきて　塀とか瓦とかの道にじゃまにならないように掃除をしてで近くの友達のとこにご近所さんのとこにみんなで避難、集まって食べ物を無駄にしないように　腐っちゃう食べ物は、先に食べちゃおうということであの時は、ノーテンキだったなと思うけど、まっ、　非常ということで先にバーベキューを食べました。やっぱり、電気とか使わないのでバーベキューがみんなで一斉に食べれてよかったかなと思います。その日は、やっぱり、どこにも行けないし、車もガソリンがないから、使えなかったので　そんなに使えるような感じじゃなかったので自転車のるしかないし、携帯の充電もできないから携帯は、一日中使わないようにしてとりあえず、節電節電、節水節水ってことで２日３日間くらいいましたね。その間は、やっぱり、何もすることができなかったです。３日目くらいから夜に電気がもどってあっとりあえず、良かったな。ろうそく生活は、とりあえず終わったと、一安心しました。でもやっぱり、一番、ちょっと時間がかかったのが、塀とか、瓦とか。　今もまだ、瓦は直したくても　業者さんが忙しいらしくて本当に１年半くらいたってから瓦を直した。塀はいまだにまだないです。ちょっとまだ作り直してないです。やっぱり、そんなに被害は、大きくないんですけど　私も町も被災地、被災していて周りの家とか見ると　やっぱり同じぐらい　地面が割れてるし、瓦は落ちているし、結構被害がありました。やっぱり、すごい悲惨だなって思いました。やっぱり宮城なんかに比べるとやっぱり比較はいけないのかなと思いますけど私たちの被害というのは、あるのでそういう小さな被害も忘れてほしくないなと思います。いまだに塀がなおってない。少し、悲しんですけど　いつかなおればと思います。やっぱり、なんか　宮城みたいに　ちょっとその周りの小さい被害なんかも立ち直れないという人がいるので中心地だけでなく、周りもみんなに気づいてもらえればなあって思います。後は、そうですね。やっぱりなんか自分が実際に被災というか、小さいですけど被災するとすごい生活って大変なんだなと思いました。電気とか、水道とかの大切さを感じました。水の使えずお風呂も入れなかったのでしばらく　２～３日ですけど　お風呂も入れなかったので、ちょっとなんか清潔感。電気がないので　テレビもつけられないし、料理も作れないし　本当に何もすることがなくて　ただただ、つらかったですね。でも家族が、誰もけがしなかったし、それだけが、良かったかなって思います。みんなで集まって暗くなったら寝て貴重な経験ができたなと思います。以上です。

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3.11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

「わたしの3.11」

３月１１日について語りたいと思います。私は、震災の当日、バイトに行ってまして帰って来て昼を食べて食べ終わった時に丁度　震災がありました。私のところは、震度５弱ぐらいで結構揺れて　姉といたんですけどすごいびっくりして窓から外に出たのを覚えています。しかもはだしで靴下で出ちゃいましたね。近所の人も外に出て来て電信柱が揺れてるのがすごい怖かったのを覚えていますね。家がつぶれてしまうのではないかと思って中に入ってみたら、おさまってからだったんですけど　もうさんざんんでえーと食器棚から食器自体は、落ちていなかったんですけど弁当箱とかプラスチックのものが結構落ちちゃって２階の自分のお部屋のところも卒業アルバムとか重いものとかも結構落ちていて、ちょっと片付けるの大変だなってという感じで一番は、玄関にあった花瓶が全部割れて粉々に割れてしまいましておれを整理するのが、大変だったなということでした。その時、母の家も仕事に行ってまして姉と二人で連絡つかないし、どうしようかな心配しててとりあえず、近場ではあったので父とは、すぐに連絡がとれて母の方は、姉が車で様子を見に行く事にしましたl。とりあえず、余震もその後、いろいろあってとりあえず、テレビをつけて情報を得ようと思いました。テレビをつけて見ると大洗の海が、映っていて黒い見た事もないようなぐるぐるまわっていてすごいこれが　本当に日本でおきているのかと震源地、被災地が南三陸というか、秋田とか東北の方の三県でまだ情報自体もつかめていないんですけど波が押し寄せてくる様子テレビで見たときは、本当に人間て何もできないんだなと改めて思わされました。震災が起ってから、本当に計画停電とかも経験しましたし、今までにない多分この先もないような経験をいろいろしたと思います。自分自体は、全然被災もしていないし、まったく気持ちは分からないですけれども体験した人は、もっとつらいだろうし、苦しいと思います。でも震災が起って日本には、大きな力が　海外からも国内からも沢山集まりました。支援金をはじめ、ボランティア活動だったり、多くの人が東北三県のことを考えたり、見たり、復興に携わる人が、すごく多くて日本てすばらしいんだなと改めて思うことができました。海外からもハリウッドスターの方や、映画俳優さんさまざまなミュージシャンの方が、多くに人が日本のために支援金を寄

せ手くれたり、海外のサッカー選手が、日本のためにメッセージを発してくれたり、日本のアイドルみなさんいろんな芸能人の方々もボランティアをしたり、被災地に行っていろいろ活動を行ったり、元気付けようと復興に多く携わっていると思っています。いつまでもスポーツ選手なんかは、その年の賞金を全部復興にあててくれという形で寄付していたり、多くの方がその人たちのためを思ってやっているんだなと思いました。でもそれが全てお金で解決できることでもないですし、ないわけには、いかない　実際、行き渡っているかどうかということは、確認できないことなんでだろうかで少し、不安ですけれども元の通りには、ならないと思います。でも、もっともっともっと良い生活ができるよう明るい未来が　きっとあると思うのでこれから数十年かけて新しい素敵な街を作っていけたらいいなと思います。私も遠くから微力ながら少しでもこの日を忘れないで行動して行けたらいいなと思っております。

レポート（川井田）

一昨日、斉藤先生のゼミに参加して一つのヒントを得た気がしています。「５分間iPad（タブレット端末）に向かって自分自身について語る」という課題です。自分をどう撮るか？一見、安易なように思えますが、難題です。そこに嘘も隠しもない自分自身とどう向き合うか、ということが試されるからです。余談ですが、韓国の映画監督キムギドクは、このことを９０分の映画の中で徹底的に追求しました。iPadはそれを日常の中で容易にしてくれます。自分は何者か？その先に他者としての家族や生まれ育った郷里（地域）が見えてくる気がしています。誰に育てられたのか？何に育てられたのか、と客体化する自分が存在するのです。映像を撮るという行為は、詰まるところ「自分探し」ではないでしょうか？

私は、郷里福岡県で記録映画を作っています。出発点は、自分の発見であると同時に他者への共感でした。「東京で常識を作ってはいけない」と柳田国男は、ジャーナリストたちを啓発しました。地域から見つめる、地域から発想するという視点こそ、つまりは日本全体を「地域」として客体化する視点を養うことに繋がると言いたかったのではないかと思えてきます。その国民的ツールとして、iPadが最も相応しい役割を果たすと言えるのではないでしょうか。

タブレット端末を用いた授業の感想

埼玉県立大学　加藤亜有美

近代的な授業にわくわくした。初めて手にとっての操作さは、いろいろな箇所を押してみたくなる子どものような好奇心を覚え、実際に教わる前に様々なところを押して試した。大きい画面に向って一人で喋ることは、想像よりも大変ではあったが、胸中をそのまま伝えられるものとしてすごく便利であると実感した。他人に喋るときは遠慮してしまう言葉も、画面に映る自分になら本音のまま語れ、いつもの自分よりも饒舌にしてくれていた気がする。スカイプやテレビ電話等、情報科が進む現代では、当たり前のように、離れた場所にいる人間とも顔を見ながら連絡を取れる手段が存在する。Youtubeでは自身で撮った動画を世界に向けて発信することも可能だ。しかし、自分に向けていろいろなことを語り、他人と共有し合う人間はどれほどいるだろうか。メディアやSNSなどが発達し、様々な情報がネットに流出しても、以外に隣の人間のことは、詳しく知らなかったりする。私もその一人だ。好きな芸能人の個人情報はいくらでも調べられる。プロフィールは勿論、故郷のこと学生時代の話などいくらでも検索することができる。だが、大学の友だちのことはかろうじて誕生日を知っているぐらいで、血液型すらあやふやである。何も知らなくても一緒に活動していく上では何の支障もないのだ。この授業を通して故郷や家族の話をそれぞれが語っているのを観ることで新たな発見や驚きがいくつもあった。私の知らない一面があり、もっとお話を聞きたいとも思えた。これは、コミュニケーションに入り口になるのかもしれない。私個人としては、さらに故郷に愛着が湧いた。他の人の故郷について語っているのを観ながら、「良い所だな」「行ってみたいな」とは思いながらも、私の故郷にもいいところがあると対抗心が芽生えてきたのだ。やはり生まれ育った土地が一番なのだろう。

このように一見話しにくいことも自分で語れ編集まで行えることで、より深く他人に対し思いを伝えられるのではないかと考える。人数が多いところでは実施が難しいが、この授業のようにタブレット端末を取り入れて、様々なテーマで動画発表を行うことで、プレゼンテーション能力の向上にも役立つのではないかと推測される。

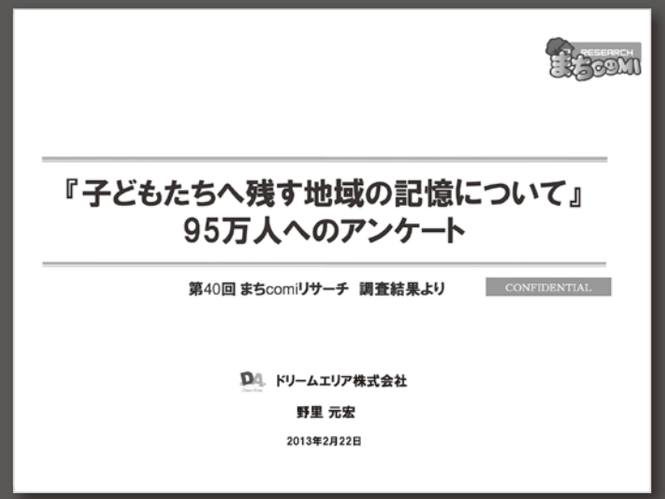
タブレット端末の新たな使用方法

・大学での紙によるパワーポイント等資料の削減
・教科書の電子書籍化

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3.11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

6

９５万人アンケート
子どもに映像で何を残したいですか



『子どもたちへ残す地域の記憶について』
95万人へのアンケート

第40回 まちcomiリサーチ　調査結果より

CONFIDENTIAL

ドリームエリア株式会社

野里 元宏

2013年2月22日

6 95万人アンケート 子どもに映像で何を残したいですか

報告：野里元宏
（元ドリームエリア株式会社）

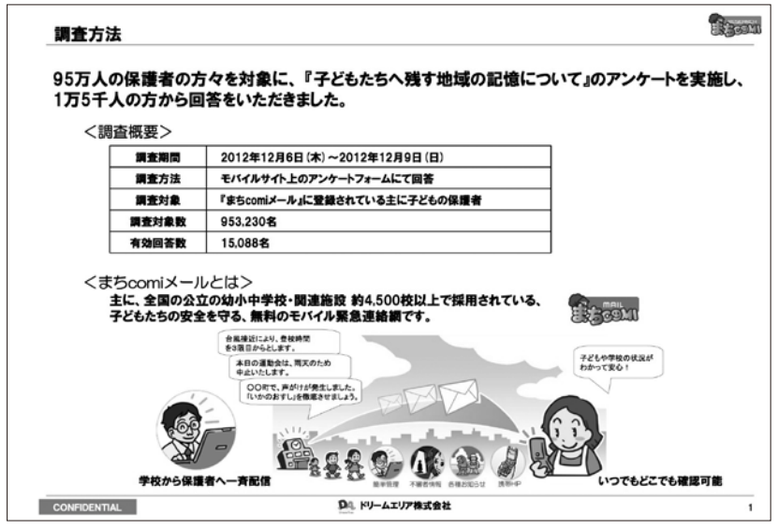
ＩＴビジネスプロデューサー。
企業にモバイルを活用した販促・マーケティングや教育・業務支援、
学校には子どもの安心安全を守るメール連絡網などＩＴ支援を行う。
一方趣味では「給食系男子」という男性料理ユニットにて定期的に配膳イベントを開催中。
レシピ本もを出版し「食べて作って振る舞う」を合言葉に腕を振るう。

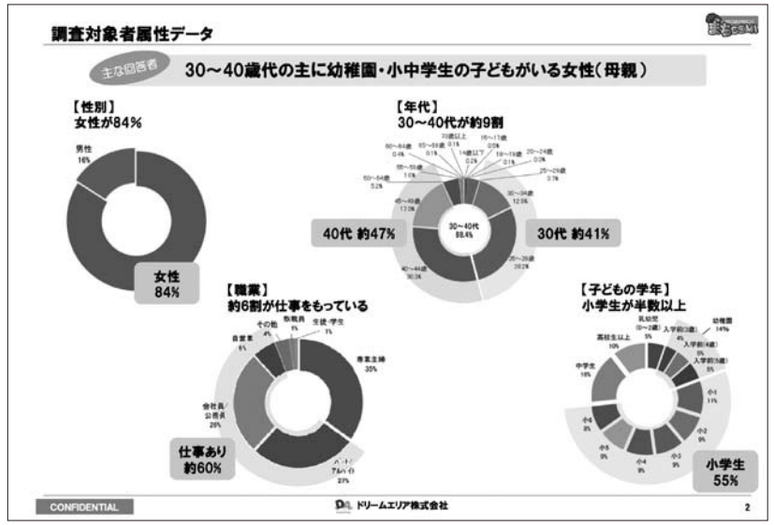
皆さんこんにちは。今から25分くらいですか、お時間をいただきますのでお付き合いください。ちょっとここから視点を変えまして、子どもたちへ残す地域の記憶、まあ、映像の話を今回はしていますので、映像を使って僕の方からは、主にお母さんですけれど子どもたちをお持ちの保護者の視点でどういう風に映像を使って、子どもたちのためになることができるかということをアンケートで取りましてまとめたものを皆さんに聞いていただけたらと思います。自分ならこうするとか、子どもたち孫たちのためにこうしたいということをご自身でも考えながら聞いていただけたらなと思います。簡単に自己紹介をしますとドリームエリアっていうのはIT関連の会社ですけれど、僕自身はもう15年ITの世界にいます。ここ3年ぐらいITを使った小学校とか中学校とか学校の支援とか子どもの安心安全ということをやってきまして、それでご縁がありまして、こういうことでプロジェクトに入っております。

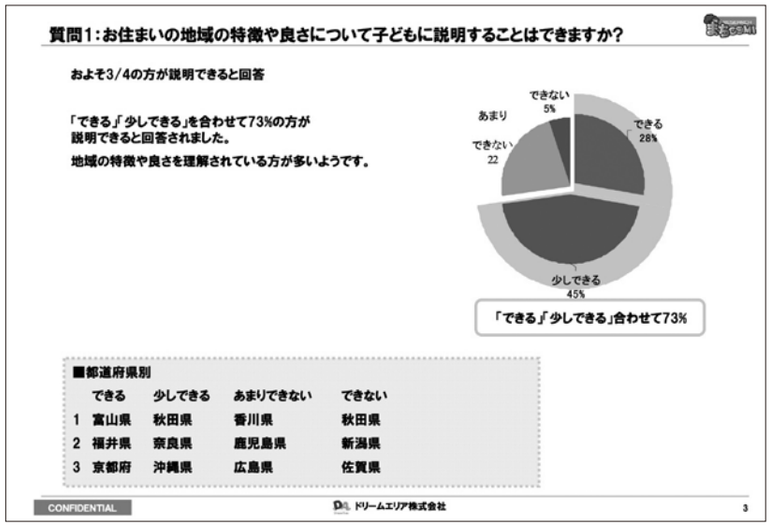
今回は95万人の保護者の方々に直接、携帯電話とかスマートフォンという形でアンケートを送りました。回答をしていただいて、全てに答えていただいた方が、1万5千人いらっしゃいました。およそ1.6パーセントの回答率です。95万人中1万5千人が映像を子どもたちのために残すことに関心を示したということになります。その1万5千人の保護者の方の回答というのを僕の方でまとめさせてもらいました。ちょうど去年の年末ですね、12月に取ったアンケートです。どういう風に取ったかといいますと、我々の方で学校から保護者の方に、今は電話で連絡網というのではなくてメールで一斉発信して、この間の地震の時もですね、学校のちょうど下校の時刻に重なりましたので、うちでは「ちゃんと学校で預かっていますよ、安心してください」とか、そういったものをメールで一斉にお母さんへ連絡をするというようなことでモバイル緊急連絡網というのを使ってもらっています。

このネットワークを使ってですね、95万人のお母さんにアンケートを取りました。その内容というのが、これから発表させてもらいますけれども、どういう方々が答えてくれたかというと、主に30代40代の幼稚園、小学校、中学校の子どもがいる女性ということになってますので、ほとんどお母さんですね。今から言いますと、だいたい女性が9割弱。年代で言うと40代30代で9割。で、だいたい6割ぐらいの方はパート・アルバイト・フルタイム含めて働いてる共働きのお母さんです。子どもはですね、だいたい55％ぐらいは小学校のお母さんという形の方々が回答してもらっています。まあ、40代30代で9割となります。あとで紹介しますが60代の方も、そういったシニアの方もメールで回答に参加してもらっています。

質問ですね、ひとつ目です、「お住まいの地域の良さについて、子どもに説明することができますか？」と訊きました。「できる」「少しできる」合わせてだいたい4分の3ぐらいの方はできると回答されています。地域







の特徴や良さを理解されている方が多いのかなということなのですが、まあ、これは全国の1万5千人の答えですので、ちょっと都道府県ごとに多い順に分けてみました。ちょっと地域性が出るかな、もしくはご自身の地域のことを考えて見ていただければ面白いのかなと思います。「できる」と一番割合が高かったのは富山県、福井、京都というほとんど並んでいるような地域ですね。「少しできる」、秋田、奈良、沖縄。「あまりできない」、香川、鹿児島、広島。「できない」、秋田、新潟、佐賀となっています。ここは参考に聞いてもらえればと思います。

次に、「お住まいの地域に関して学ぶために何に接していますか？」という風に質問しました。3人にひとりくらいの方は「特にない」という風にお答えになっているのですが、答えた方の中では子どもの教育機関、学校とかが主に当たるとは思うのですが、そこで地域に関しての学習に触れているという風に答えられています。これもですね、選択肢ごとに地域性があるかなということで、ちょっと順位を出してみました。「歴史を通して一番地域に触れている」と答えたのは京都、滋賀、奈良、近畿が多いです。「文化」、富山、長崎、香川という風に続いています。ここはあくまでもアンケートなのでこれが県民性というわけではないのですけれど、子どもの教育機関ということであると石川県が一番手を挙げた方が、答えとした方が多かったという形になっています。「特になし」というのが一番多く答えた方は大阪の方という風になっております。

質問三つ目ですね。「昔はあったが今はなくなったことが惜しまれるものは何ですか？」という風に訊きました。圧倒的に多かったのは「自然・風景」という形ですね。38％、4割ぐらいの方がそう答えています。あとで自由回答欄もご紹介しますので、その中でも出てくるのですけれど、開発などで失われていく情景を子どもに残せないということを非常に残念に思っているという方が多いという風になっております。続いてですね、「風習」。これは料理とかお祭りとか行事といった無形のものですね。なかなか伝えられないということで失われてしまって、すでにないという方が多いという風な順番になっております。これも簡単に都道府県ごとに出してみました。「自然・風景」と挙げたものに関しては、香川、熊本、埼玉。今日、会場に参加されている方々は埼玉の方が多いのかなと思いますけれども、自分たちが子どもの時と比べるとだいぶ風景が変わってしまったという風に考えている方がこの3県に多いんじゃないかなという風な形ですね。

で、四つ目。「残しておきたいものをどのような方法で子どもたちに伝えたいと思いますか？」という風にお訊きしました。4分の1の方が、複数回答なので全部足して100％にはならないですけれど、「言い伝え」、口伝ですね、口頭で直接という方が一番多かったのですけれど、その次に「写真」、その次に「映像・ビデオ」という風になっております。これも県別に少し出してみました。今回テーマになっている「映像・ビデオ」、一番それで残してあげたいと答えた方、島根の方、福岡の方、山形の方というのが多かったですね。

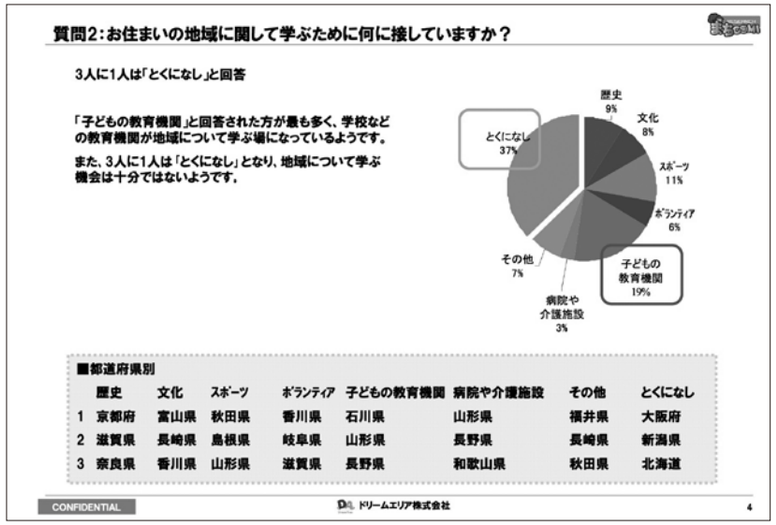
次に、どのくらいその場所にいるかということも愛着の指標になると思いますので、「どのくらい住んでらっしゃいますか？」ということも訊いてみました。「10年未満」という方が36％、37％ぐらいですかね。「10年-20年未満」が32％。けっこう、そんなに長く住んでおられない方が多いという感じで、これは、小学校くらいのお子さんを持っている主婦の方ということで、生まれたところとちょっと違うというところに転勤なのか嫁いでいらっしゃるのか、というのがすごく多い要素だと思いますので、生まれたところと今住んでいるところが違うというところも出ていると思います。これもあとでキーワードとして出てきますので、この辺も、子どもをどう育てるかということには少し関係してくるのかなと思います。ちなみに定着率というか、どのくらい長く住んでいる方が多いのかということもちょっと出してみました。一番右側ですね、「現地域の生まれ」と、生まれた時からずっと住んでいるよといった方、人が動かないといいますかね、ちょっと表現が良いかどうか分からないですけれども岐阜県、鳥取県、滋賀県という方が長くそこにいるというような形になっているみたいです。

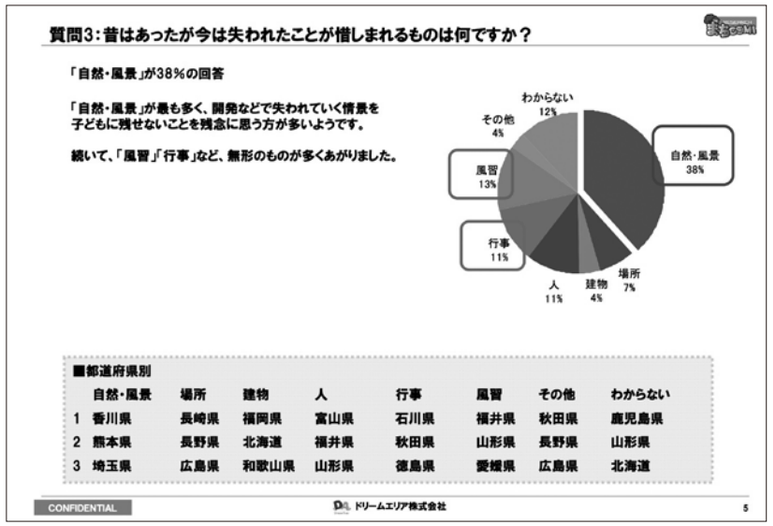
ここからですね、書いていただいた方の具体的なコメントというのをいくつかピックアップしてご紹介したいと思います。簡単に映像での記録ができる端末、携帯電話や今話があったiPadなどのタブレット端末ですね、が、お手元にあったとして、「あなたの周りにあるもので子どもに音や映像で残しておきたいと思うものは何でしょうか？」っていう風にお訊きしました。だいたい、もっとも多かった意見はこのような意見ですね。昔この土地にあったけもの道や、遊び場だった山や田んぼなど見せてあげられないけど、それらが失われる前に何か残したかったっていう過去形ですね、の言葉が非常に多かったです。逆説的にいうと、今でも遅くないっていう部分があると思うので、うまく映像を活用できたらなという風に思ったりもします。さらにですね、音とか匂いっていうことに対して残してあげたいという方が非常に多いです。埼玉の20代の方ですね、「昔から続いている地元のお祭りの映像やお囃子の音を残してあげたい」。これは山口の40代の方、「船の汽笛、かもめの鳴き声、地域の自然の音など、農業をしている音」っていう風に入っています。あとは匂いですね。「季節によって木、花、虫たち、鳥たちの声やさえずり、雲の流れなどの瞬間瞬間を記録に残したい、惜しむらくは香りが残せないこと」と。今回のiPadの話では香りっていうのは出てこないですけれども、この辺も記憶には非常に関係する言葉だと思いますので、ここにも何ですかね、メーカーの方がいれば調査してみてもいいのじゃないかなと思います。

で、ここも非常に多かったのが、日常的な何気ないものっていうのを非常に残してあげたいっていう言葉が非常に多いです。代表していくつかピックアップしますけれども、千葉の方、「特別なものでなく、日常生活の中での風景や人のつながり」。「ただの町並み、風景。私の子どもの頃からだけでも、駅までの道ががらりと変わり商店街もなくなり、記憶も不確かで思い出す術もないから」と、これは奈良の方ですね。という風に寄せてもらいました。あとはですね、残しておいたら後々役に立つのじゃないかということも鳥取の方が言っております、「なくなってから昔を懐かしんで、もう一度復活する風習もありますから」という風に言葉があります。あとは宮城の方からは「お年寄りの知恵や習わし」と。「昔の人の知恵がものを言うと思います。」これを映像で残しておきたいという風におっしゃっていただいております。で、あとはですね、先ほどありましたように生まれたところと今いるところが違うという方からの意見も二つありますので紹介します。「実家近くから見える山に隠れていく夕焼けの風景、田んぼ道で聞こえる蛙の鳴き声」そういったところが、自然豊かなところの出身なのでしょうけど。「嫁ぎ先では残したいという思い入れのあるものはない」、これは大阪の方です、こういう風に思っている方もいるでしょうし、地区のお祭り、風習とか「夫婦ともに地元じゃないので、残すというよりも自分らが知っておきたい」こういう風に勉強する意欲の高そうなコメントもいただいております。「子どもらにとっては現住所、この場所が故郷になるので自分たちもしっかり勉強して子どもに伝えたい」というような、愛知の方ですね、こういう方もいらっしゃいます。で、三つ続けて紹介しますと、言葉とか話し方をしっかりと動画で残すというようなコメントもあります。「きれいな日本語でのあいさつ」「敬語など」「お年寄りの方々の技術、温かな話し方、言葉、自然」神奈川、福島、沖縄の方のようなコメントいただいております。もう少しつなげますと、あと二つ似たようなことを挙げてもらっているんですけど、「子どもたちがいかにたくさんの人に愛され、大事にされてきたか。」「子どもが地域社会の色々な大人から守られていると感じた空気感」こういったものを日常の動画で残して、多分大きくなってから小ちゃなさな時のことを見せてあげたいという形になると思うのですけれど、現状がよく分かんないですけどね、うまくいってないのか、子どもと親の関係が、そういったこともあるのかもしれないですけど、こういう昔の良い時代のものがあればコミュニケーションがうまく取れるのじゃないかと思ってらっしゃる20代と40代の方、どちらも小さなお子さんを持っていらっしゃる方だと思います。あとは地域交流というキーワードで二つほど挙げます。「町並みの風景や学校から見える景色など写真や映像で残すことで、比べる楽しさや親や地域の方との交流に役立つと

思う」、神奈川の方ですね。「地域の行事。ふだんあまり関わりの少ない方たちと話す機会であり、地域の方の顔と名前を覚えるいいチャンスだから」。昔の方との地域の中のコミュニケーションの取り方が今は違うということの裏返しの言葉だとは思うのですけれども、うまくコミュニケーションを取りたいというような、地域とコミュニケーションを取りたいという要望は、欲求っていうのですかね、必要性っていうのはあるという風に思っていらっしゃる30代40代の方というのがいます。あとは、二つ挙げますと「若き日の親の姿」、ちょっとこれだけだと分からないのですけれど、まあ自分自身のことをもしかしたら言っているのかもしれないですね、自分は子どもの時と同じような時はこんなような姿というか、こんなことをしていたというようなことを見せてあげられたらというようなこともあるのかもしれないです。これはちょっと昔の話になるのですけれど、「共同炊事場のみんなが助け合っていた時代、子育てもしつけも、思いやりもみんなで協力していた時代、貧しい暮らしでも心が豊かで元気だった人々」、こういったものを今の子どもたちに見せてあげたいというようなコメントもいただいています。あとは石川の方ですけど、「すでに失われてから生まれてきた世代だと自分でも思っている」ということなのですけれども、「車のあまり走らないゆったりした空間や、人間味あふれる温かな人と人とのかかわり合い」などを残したいという風におっしゃっています。あとは、これはちょっとITに詳しい方の意見ですけれど、地図上の情報をですね、「場所に限らずそこから読み取れること全て。そことリンクさせた実際の映像、写真。それに文字や語りを付けたデータ」というのを一括して全部取っておきたいというような愛知の20代の方、こういう意見もあります。あとは天災というのですかね、災害に関して二つほど意見をいただいています。「昨年紀伊半島を襲った台風で」というのは、もう2年前になりますけれども、台風で露地災害が多かった時期が2年前にありましたけれども、その時の話ですね。「近いうちに起こるだろう地震に備えるため災害の怖さ、起こった後の避難のし方、生活など負けないで助け合い行動ができるよう自分が生活している場所をきちんと把握しておく大切さをひしひしと感じた」とあります。災害が起こってから振り返ってみてという形になるのですけれども、今のうちにしっかり自分の生きているところを把握しておくべきだという覚悟にも似たコメントをいただいています。あとは福島の方から「壊された自然、子どもたちの笑顔と恐怖の顔と今『もう地震はない？ 大丈夫？』と真剣に訊いてくる子どもたちの目」こういったものもしっかり残しておきたいという声をいただいております。福島の60代の方ですね。あとは将来的な提言というかコメントになるものを三つ挙げさせてもらいますけれども、「残すか残さないかは子どもたちの選択に委ねるものだと思う」ということは逆に取れば、今撮っておかないと選択することもできないということになると思うので、この方は撮ることには肯定的なのだという風に思っています。あとは、これはメーカーさんだったり携帯電話会社の方々にご協力いただくことだと思うのですけれども、「携帯やタブレットは将来どんな形で残っていくのか分からないので残すのは無理。昔のレコードなどのように使われなくなっては無意味」ということもあります。そこら辺は技術論になってしまうと思うのですけれども、色々なVHSだベータだ8ミリだという風になっても、もう見ることができないというものがいっぱいあると思うので、この辺は考えていかないといけないかなという風に思います。あと最後にひとつ、やっぱり人が使うものだというようなコメントもいただいていますので紹介します。「映像を通してのみならず、そこに実際に地域の方の語りが加わり、人と人との生身のつながりの中で伝えられることこそ意味があると思う」。まあ、データを取っといただけでは意味がないよということはその通りだなという風にも思いますので最後に抜粋させてもらいました。

5千件くらい自由回答欄をいただいたのですけれども、その中から抜粋しました。その中で総評という形で簡単にまとめさせてもらったので、最後にお話をさせてもらいます。もっとも多くいただいたものは、今ある子どもの笑顔をいかに残すかっていうことが一番大きなテーマだと皆さん把握されているようでした。親や地域の皆さんに大切にされていたことを記録したいという親の思いが多かったです。家族の間だけでなく地域や世代を超えてみんなが一生懸命生きている記録というのをつないでいきたいという声もけっこう多かったです。で、三つ、「子どもの笑顔」、「大切にされていた記憶」、「みんなが一生懸命生きている記録」ということをキーワードでこの中から言えるのじゃないかなと思います。次にですね、風景、これがやっぱり残したいっていうのがアンケートのグラフの中にもありましたけれど非常に多かったです。地域性が豊かで多くの四季折々の美しさを持つ日本だからこそ、そういう希望というのが海外の国なんかとも比べるとあるのじゃないかなと思います。そこで「自然とか風景」、「地域性とか多様性」、「美しさ」というのを残していきたいっていうようなことでキーワード挙げさせてもらいました。次に、お祭りや料理などの風習ですね。これも残していきたいと。これは本当に共有したいという方が非常に多かったです。代々受け継いできた地域の方々とのコミュニケーションや、それが自身のルーツそのものを残すということでもある、もしくはルーツを遡ることができるというようなことで映像をうまく活用したいという声も非常に多かったです。なので、ここでは行事・料理・風習、あと地域とのつながり、自分のルーツ・出自っていうものをキーワードに挙



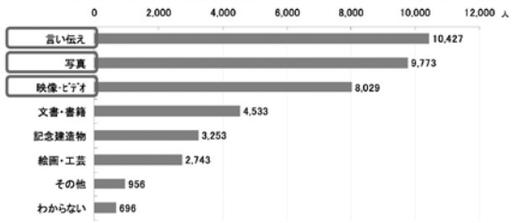


げさせてもらいます。最後にですね、震災のお話も前のセッションでありましたけれど、これらの声は震災や台風で郷里の風景が変わってしまったという方からも非常に、残しておけばよかったという声をいただいております。ただ、感情が入った経験を重ねた上で映像の記録が生きると、記録だけ取っていてもどうやって使うのだというところが議論に残るというところの指摘がいくつかありましたので、実際、体験をできるだけさせながら子どもたちに機械やデータをうまく併用するというのが、最終的にそれをどうするかっていうところを皆さんで今後考えていけたらなっていう風に思っています。なので、基本的には人ですね。人の感情と、それを継続的に続けるということと、人と機械というよりは映像になるのですが、これをどうやって融合するかということが今後のテーマでもあり、最後のキーワードの三つという風にさせてもらいました。これが何かという結論を出す場ではなかったのですけども、これが1万5千人の子どもを持つ保護者の声をまとめたものになりますので、皆さんのこれからの考え、我々もそうですが、筋道立てるキーワードになればと思います。以上です、どうもありがとうございました。

質問4：残しておきたいものをどのような方法で子どもたちに伝えたいと思いますか？（複数回答可）

約1/4の方が直接伝える「言い伝え」と回答

最も回答が多かったのは直接伝える「言い伝え」となりました。
次に多かったのは、ビジュアルで伝える「写真」、3番目には、動きも音声も伝わる「映像・ビデオ」でした。



■都道府県別

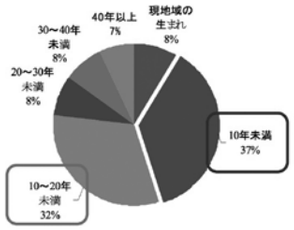
	言い伝え	写真	映像・ビデオ	文書・書籍	記念建造物	絵画・工芸	その他	わからない
1	富山県	秋田県	島根県	富山県	福井県	福井県	福岡県	秋田県
2	長崎県	長崎県	福岡県	福井県	香川県	長野県	新潟県	長崎県
3	山形県	福井県	山形県	岐阜県	埼玉県	新潟県	兵庫県	愛知県

CONFIDENTIAL　ドリームエリア株式会社　6

質問5：現在お住まいの場所には何年住んでいますか？

最も多いのは「10年未満」で36%。

最も多いのは「10年未満」、続いて「20年未満」となりました。
お子様をお持ちの女性の方から多くご回答いただいており、
結婚や子育てのタイミングで転居した方が多いようです。



■都道府県別

	10年未満	10～20年未満	20～30年未満	30～40年未満	40年以上	現地域の生まれ
1	山形県	長崎県	香川県	福井県	富山県	岐阜県
2	和歌山県	熊本県	富山県	岐阜県	長野県	鳥取県
3	島根県	宮崎県	福井県	長野県	和歌山県	滋賀県

CONFIDENTIAL　ドリームエリア株式会社　7

質問6：簡単に映像での記録ができる端末（携帯電話、タブレットなど）がお手元にある場合、あなたの周りにあるもので子どもたちに音や映像で残しておきたいと思うものはなんですか？（自由回答）

＜意見抜粋 1＞

1. 昔 この土地にあった獣道や、遊び場だった山や川、たんぼなど、もう見せてあげられないけどそれらが失われる前に何かに残したかったです。（東京都 40代）
2. 昔から続いている地元のお祭りの映像や、お囃子の音を残してあげたいです。（埼玉県 20代）
3. 船の汽笛、カモメの鳴き声、地域の自然の音など、農業をしているときの音（山口県 40代）
4. 各季節における木、花や虫たち、鳥たちの声やさえずり、雲の流れ、などその瞬間その瞬間を記録したい。惜しむらくは、香りが残せないこと。（千葉県 40代）
5. 特別なものではなく、日常生活の中での風景や人の賑がり。（千葉県 50代）
6. ただの町並み風景。私が子どもの頃からだけでも、駅までの道ががらりと変わり、商店街もなくなり、、、記憶も不確かで、思い出すべもないので。（奈良県 40代）
7. 季節毎に行う行事、その手順を映像で残しておいたら後々の人に助かると思います。なくなってから昔を懐かしんでもう一度復活する風習もありますから！（鳥取県 40代）
8. お年寄りの知恵や習わし。時代は便利な世の中になっていっても、自然と上手に共存してきた昔の人の知恵はものを言うと思います。（宮城県 40代）
9. 実家近くから見える山に隠れていく夕焼けの景色。田んぼ道で聞こえる蛙の鳴き声。練ぎ先では残したいという思い入れのあるものはない。（大阪府 40代）
10. 地区のお祭、風習とか。夫婦ともに地元じゃないので、残すというよりも、自分らが知りたい、知っておきたい（子どもらにとっては現住所この場所が故郷になるので）。（愛知県 30代）
11. きれいな日本語でのあいさつ、敬語など。（神奈川県 40代）
12. お年寄りの方々の技術、温かな話し方。（福島県 40代）
13. 言葉自然。（沖縄県 60代）

CONFIDENTIAL　ドリームエリア株式会社　8

質問6：簡単に映像での記録ができる端末（携帯電話、タブレットなど）がお手元にある場合、あなたの周りにあるもので子どもたちに音や映像で残しておきたいと思うものはなんですか？（自由回答）

＜意見抜粋 2＞

14. 子ども達がいかに沢山の人に愛され、大事にされてきたか。（埼玉県 20代）
15. 子供が、地域社会の色々な大人たちから守られていると感じた空気感。（神奈川県 40代）
16. 街並みの風景や学校から見える景色など写真や映像で残すことで、比べる楽しさや親や地域の方との交流に役立つと思います。（神奈川県 30代）
17. 地域の行事。普段あまり関わりの少ない方たちと話す機会であり、地域の方の顔と名前を覚えるいいチャンスだから。（鳥取県 40代）
18. わかき日の親の姿。（滋賀県 50代）
19. 共同炊事場など皆が助け合っていた時代。子育てもしつけや思いやりで皆で協力していた時代。貧しい暮らしでも心が豊かで元気だった人々。（福岡県 30代）
20. 私も"既に失われてから生まれてきた世代"だと思うので、あまり実感出来るものが無いが、車のあまり走らないゆったりした空間や、人間味溢れる温かい人と人との関わり合いなどでしょうか。（石川県 30代）
21. 地図上の情報（場所に限らず、そこから読み取れることすべて）とリンクさせた実際の映像、写真、それらに文字や語りをつけたデータ。（愛知県 20代）
22. 昨年紀伊半島を襲った台風で、近いうち起こるだろう地震に備えるため、災害の怖さ、起こった後の避難の仕方、生活など負けないで助け合い行動が出来る様自分が生活している場所をきちんと把握しておく大切さを身に染みて感じた。（三重県 40代）
23. 壊された自然、子供達の笑顔と恐怖の顔と今も地震は来ない？大丈夫と真剣に聞いてくる子供の目。（福島県 60代）
24. 選すか選さないかは、子どもたちの選択に委ねるものだと思う。（神奈川県 40代）
25. 携帯やタブレットは将来どんな形で残っているかはわからないので、残すのは無理。昔のレコードなどのように使われなくなっては無意味。（埼玉県 30代）
26. 映像を通してのみならず、そこに実際に地域の方の語りが加わり、人と人との生身の繋がりの中で伝えられることにこそ意味があると思う。（神奈川県 20代）

CONFIDENTIAL　ドリームエリア株式会社　9

質問6：簡単に映像での記録ができる端末（携帯電話、タブレットなど）がお手元にある場合、あなたの周りにあるもので子どもたちに音や映像で残しておきたいと思うものはなんですか？（自由回答）

＜総評＞

最も多くいただいた声は、今ある子どもの笑顔を残すことでした。また、親や地域に大切にされていたことを記録したいという親の思いも多く寄せられました。さらに、家族間だけでなく、地域や世代を超えてみなが一生懸命生きている記録をつないでいきたいという声もありました。

- 子どもの笑顔
- 親や地域に大切にされていた記録
- みなが一生懸命生きている記録

風景を残す声も多くあがりました。地域性が豊かで多くの四季折々の美しさを持つ日本だからこその希望のようです。

- 自然・風景
- 地域性・多様性
- 美しさ

祭り・料理などの風習を映像で残し、共有することは、そういった風習を代々受け継いできた地域の人々とのコミュニケーションや自身のルーツそのものを残すことでもあるようです。

- 行事・料理・風習
- 地域とのつながり
- 自身のルーツ・出自

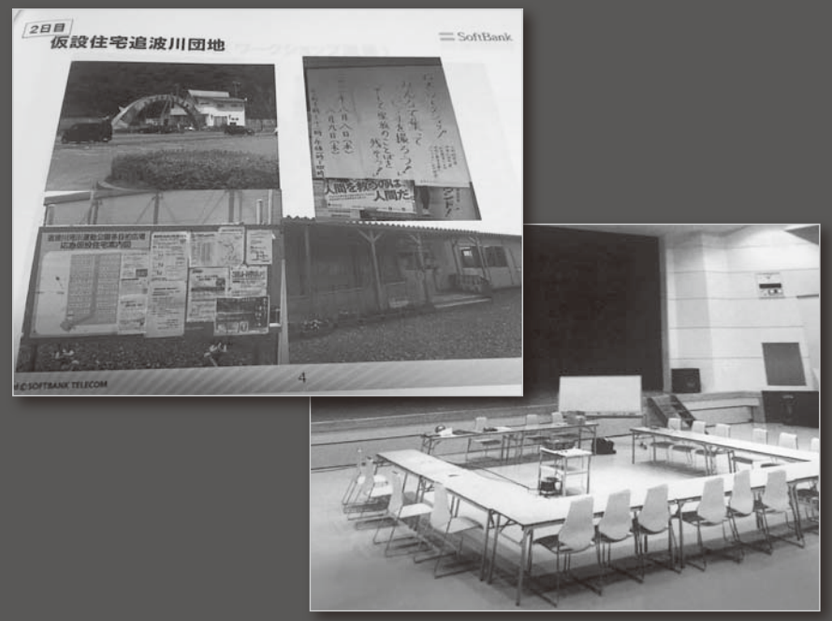
これらの声は、震災や台風で郷里の風景が変わってしまった方からも同様の声を多くいただきました。感情が入った経験を積み重ねたうえで、映像による記録が活きるのではないかという指摘もありました。実際の体験をできるだけさせながら、機械やデータをうまく併用したいという活用論も多くありました。

- 人の感情
- 継続的な経験
- 人＋映像

CONFIDENTIAL　ドリームエリア株式会社　10

7

子どもと地域が向き合う力
ワークショップがつなぐもの



7 子どもと地域が向き合う力 ワークショップがつなぐもの

パネルディスカッションより

斉藤　皆さんこんにちわ。壇上に並んだスタッフを紹介していきます。向って右から「グループ現代」の川井田さん。それから「美しく老いる会」の仲條さん。次に赤ちゃんが生まれたばっかりの野里さん、おめでとうございます。「ソフトバンクテレコム」部長の米田さん。「DoTankみやぎ」の遠藤さん。「西生田中学校」の中村先生。それから「日本大学芸術学部」の佐藤さん。それから「日本工学院」の服部さん。これだけメンバーが揃ったわけなので、なんでも質問どうぞという気持ちで待ってるのですけども、何か聞いてみたいなとか、発表を聞いていてよく分からなかった、あるいはこの機会だからこんなことも言ってみたい、なんでもいいです、おはなしください。

シンポジウム来場者　私、埼玉県立大学の斉藤先生にこの前すばらしい講義をしていただきましてありがとうございます。今日ですね、8名の方がおられるのですけど、8名の方は何らかの形で情報を共有化というか、コミュニケーションを取ってこられているメンバーと考えてよろしいのですか？

斉藤　はい、大丈夫です。遠藤さんは宮城県から石巻の方から来られているので、普段の交流はないです。

来場者　分かりました、安心して聞きます。

斉藤　それだけですか？ 我々が知り合いだってところが不安だってことですね。分かりました、ありがとうございます。他にどうぞ。

埼玉県立大学の留学生　黄と申します。斎藤先生の授業で初めてiPad使うことができました。最初はすごく新鮮で、自分の顔を自分で話すことはすごく恥ずかしかったです。最初に、仲間の間でお互いに撮影して、私は他の日本人の方とお話をするのは少ないので、なかなか積極的に話すことは難しかったです。iPadでみんなの関係もなかなか色んなこと、ふるさとのこと、自分で語ってそして自分で友だちのこともiPadでよく知りました。それはありがたいと思います。そして、最後の編集、それも初めて。すごく面白い。それは自分も映像を作りました。それは自分で作った、本当ですか。何か不思議な。とりあえずiPadは、すごいって言いたいです。ありがとうございます。

斉藤　それについて佐藤さん、ひとつコメントをお願いします。

佐藤　初めてiPadを使ってそういう経験をされて、お互いに色んなことを知ることができたっていうことなんですけれども、実は僕が教えてる大学、専門学校の授業の中でひとつ、入ってきたばかりの学生さんに「セルフポートレイトを作る」っていう課題をやってもらうことがあるんですね。ずっと続けてきたんですけれど、その中で発見できるのはさっきおっしゃったようなことで、入学してきたばかりのクラスというのはお互いに自己紹介をしたり、出身がどこでとかスポーツは野球が好きですとか言って言葉で紹介するんですけれども、その直後に映像を使ったセルフポートレイトっていうのをみんなそれぞれ作って、みんなで見るっていうことをやると一気に距離が縮まるっていうことがあるんですね。こんな部屋に住んでいるんだとか、この駅のそばなんだとか、好きなものはこれなんだとか今までこういうことをやってきたんだっていうことがお互いに分かるような。そうするとコミュニケーションをするための媒介としては、映像でお互い見せ合うっていうのは非常に有効な手段だって僕は思っていますね。だから、あなたが感じられたことっていうのも、今回はiPadだったのでその作業がより効率的にできます。ビデオの場合は、以前は撮影してそれを編集するっていうプロセスがあって少し時間がかかったんですけれども、このiPadを使うことによって撮ったらこの内部で編集ができるということがあるので、もちろんこれで上映ができるという、そういう非常に効率的であり、なおかつ即時的である、なおかつポートレイトを共有できるっていう非常に良いポイントなんじゃないかなと思います。

斉藤　はい、分かりました。他に何か？

来場者　今日はありがとうございました。多分、質問がないのはiPadの機能っていうのを知らない方が多いんじゃないかなと思いまして、私は非常に今日は勉強になりました。つまり普通のビデオと違う機能をきちっと持っていて、お互いが撮り合うと。最後の中学生なども、あれは編集はみんな各自がやられたということなんでしょうか？

中村　さすがに1時間だけの授業ではできなかったので、実はああいうつなげた形で音楽を付けていただいたのはグループ現代さんにやっていただいたんですが、子どもたちもすぐ自分たちで撮ってその場でもう一回撮り直しとか、みんなで画面をのぞき合って撮れるっていうのが面白かったかなと思います。

来場者　iPadの機能がどれくらいのことができるかとか、そういったものが従来のビデオとの違いとかが若干分かりにくかったので、年配の方が今日は多いので、私も含めてなんですけど理解できていないのかなっていうことと、それからそういうことも含めて非常にコミュニケーションが画像を通してより多くできるっていう部分では本当にすばらしいメディアだと思います。ただ、仲良くなったりコミュニケートが活発になる反面ですね、万一それがズレた時の場合っていうのが、そういったもののセキュリティみたいなものが若干心配かなっていう負の方の感じがしないでもなかったです。ただ、こういうメディアを震災復興に役立ててお互いを知るっていう部分では非常に良い試みだったのではないかな、そういう風に思いました。

斉藤　ありがとうございました。iPadの基本をソフトバンクの米田部長さんから分かりやすくお願いします。

米田　分かりやすくっていうのはちょっと難しいと思うんですけど、一番早いのはお手元に持っていただいて、ぜひ使っていただくというのが一番早いと思います。まあ、基本的な動作はちょっと佐藤先生ですとか服部先生に教えてもらうとかした方がいいかもしれないんですけれども、触っているうちにどんどん使えるようになるという代物だと考えておりますので、ぜひ使ってみていただきたいです。そういうプロセスを、我々共有できるところが非常に面白いと僕は思っています。

服部　iPadうんぬんと従来のビデオと何が違うのかということを専門の我々がお話をした方がいいと思うのですが、映像を作るということは、テレビとか映画とは、撮影するという段階のためのカメラ。その後、撮影した素材を編集するビデオの編集機。今では、コンピューターで編集をやっいるのですが。それと後は、こういった上映のホールのような出来上がったも

のを共有する場所。そういった３つの作業場所に大きく分かれているんですね。撮影するところ、編集するところ、共有するところ。iPadがすごく面白いのは、まず、小さなコンピューターのデバイスでビデオカメラがついていて、動画が録画できるということがあります。あと、小さいんですがこの中がコンピューターになっていましてこの中に編集用のソフトウエアーが一つ、３００円ぐらいで売っているんですが、それをダウンロードすると撮影された映像の順番を入れ替えることができるというのがあります。これがまあ、ここらへんで触ってもらっていますが、３０分もしないうちに一通りの流れを確認して、自分の映像をこのみに撮影をして編集するということができるようになります。今回のワークショップでは、達成されていなくて来年度、差来年度は、達成できるかもしれませんが、このコンピューター自体が、ネットワークにつながっていますので、みなさんがご存知であるようなYouTubeやニコニコ動画とかそういった映像を共有するサイトにつなげることができます。昔は、こういった映画館とか家での茶の間のテレビというのが、共有する場だったのですが、それがコンピューターもしくは、撮影してそれをデバイスする、いわゆる映像を共有する場所になるということで画期的なツールであるわけです。

斉藤　はい、ありがとうございます。もう一つ重要な点、負の部分というのは、その辺は中村先生、今、映像のプラスでしたが。

中村　今回、私の授業でやらせていただいたのは、教員が入り、プロの方の編集も入りというのを媒介にしたものですね。これまた、YouTubeに直接アップした場合に何か、良くないコメントがついたりということで炎上したりということもあるのですが、割と今の中学生たちを見ていると、もう２～３年前までは、かなり学校の裏サイトですとか、いろいろそういうことで炎上というのは、あったんですが、今の子どもたちは、もっとスマートになってきましたね。あまり、そういうことに言葉使いは、きちっと気をつけるものなんだということは、「情報の技術」ですとか。「技術」に「情報」があったり、あと、学校全体でセキュリティーの問題では、講演会を年に一回やっていますので、割とそういうのがきいてきているのか、普段、存分に使う中で子どもたち自身が学んで来たのか、割合、ここんとこでは、トラブルは、ないですね。ただし、実際、映像をあげた場合のそういった管理の問題というのは、重々気をつけていかなければいけない問題かなと思います。

佐藤　その通りだと思うんですね。今ご質問があったとうにおそらく、携帯電話の弊害というか、負の部分のようなものが、同じようなことが、勿論こういうiPadになっても懸念されることではあるわけで、そこには、先生のご専門のリテラシーというか、使い方の、どうやって使うべきかという勉強というのは、勿論、必要なんだと思うんですね。それで先ほど、セルフポートレイトと言ったのも、一つ、その段階があって映像を撮るということが、非常に暴力的な行為だということを学生たちに分からせるとこがあるんです。それは、人にカメラを向けるということは、けっこう暴力的で威圧的な行為なんですね。そのへんがよくわからないと町に出て誰彼なくインタビューしてもいいんだということを思ってしまう。
カメラを持っている。何でもしていいんだという誤解があるんですよ。そのためにも、自分自身を一回撮ってちょっと恥ずかしい思いをするとですね。なんかこう一枚、皮をはがされたようなところがあって映像になるというのは、こういうことなんだと、自分もちょっと恥ずかしいぞというようなことは、僕は、知ってほしいと思うんですね。そのためにもセルフポートレイトを自分の自画像を自分で作って見る。というのが学習効果があるんじゃないかなと思います。

斉藤　今二人にお話をいただきました。他に質問がありますか。

来場者　高校の教員をやっています。やはり気になるのが、映すことと、そのネット上でいろんな場面で流れてしまって子ども同士で撮ったその画像が流れてしまってかってに誰かに使われてしまうことは、ないのかな。私自身、iPadを使ってないのでよく分からないのですが。

斉藤　そういうことってあるよね。

服部　共有の話をしましたが、僕は、新宿の大久保でも子どもたちと映像制作物をやっています。鳥取県では、教育センターのスーパーバイザーというのをやっていて小学校で映像の教育をやっているんですね。今年度は。それで一番問題になるのは、子どもたちが映っている映像をYouTubeにアップしていいのか、それを単純に公開していいのかという疑問があると思うのですがいけないんですよね。じゃあ撮ったものを共有すると言われたときに、例えば、DVDで焼いてみんなで共有するのは、いいのかというと、どうもそうじゃないと思っていると思っているのです。もっと簡単な方法があるんじゃないかという議論があって、今、それを実践しているんです。ブログとかインターネットとかで見れるホームページがありますよね。パスワードを持った人だけが見れるサイトを作って小学生の親子さんもそのパスワードさえもっていれば、見ることができる、学校の人たちも見ることができる。そしていわゆるインターネットの公の場所には、そのコンテンツがないような設定ができるサイトが今、沢山でてきています。そういうサイトを利用すれば勝手に映像が流れてしまうことは、避けられます。

来場者　映像を使うことによってコミュニケーションが非常にスムーズになるというのは、すごく分かるのですけど逆にものを通過させないと会話ができなくなってしまう、それがないと逆に側（そば）にいてもはねつける、話しずらくなるというような部分は出てこないんでしょうか。

中村　それは、大丈夫ですね。国語の中でも話し合い活動ですとか、弁論のスピーチをやる、生の話をすこともやっています。ただ、国語教育の自分を表現するという中に文字だけではなく頭の中で文字的に論理的に考えるところもあるんだけれども今回、もう一つ、踏み出して映像でも表現する。自分のメッセージを伝える。どのように人に向けて語るか。今回やってみて良かったのは、少人数のグループを一斉展開をやりましたので、先ほども聞いていて一人一人スピーチして周りが、ワイワイガヤガヤあるんですが、１時間という授業の中で同時展開でそれをやる。iPadのデザインの問題が出るんですけど子どもたちがこうやって持つとマイクのところを指で隠してしまって変なボタンを押すとビヨーンとなってたり、映像が伸びてたり、そういう中で試行錯誤しながら、じゃ意外にマイクが弱いからもっと大きい声で話さなくちゃとか、カメラを持つことがあるからグループの中で役割分担しながら、こういう風に撮ってみようか、ここに床に立てかけてみようか、そういったちっちゃいコミュニケーションを産みながらやっていました。その機械だけのパソコンだけで引きこもってというのではなくやはり、これは、ワークショップという今回のシンポジウムのタイトルにもありますが、お互いに協力してやるということが、きっかけとして、それが、今までの授業とは違う、機材が使えるという可能性を今回、私自身も学ばせていただいたところです。いろんな場面での使い方ということでその一つということでこれだけが全てではないということでご承知おきいただければと思います。

斉藤　使い方の一つとして理解して下さい。

服部　誤解を解くために。映像ワークショップと言ったときに、映像を作ることが、主題に思われているんだと思いますね。ちょっと説明が、不足だったと思います。我々は、たまたま映像を専門としているので映像ワークショップをやっているのですが、ダンスのワークショップとかもありますし、絵画を描く彫刻をするワークショップもあるんですね。ここでポイントになるのは、実際に映像が作れるようになるとか、そういう問題は、ちょっとあるんですけど、もっと重要なことは、その中いっしょにああーじゃない、こーじゃないと言ってグループになって作るときにそのグループの中でまったく自分と違う、価値を持っている人たちがいるんだということを認識することなん

ですよね。それが、最終的に映像の場合は、ビデオとして見れるような形で、残りますよということなので映像ワークショップって聞かれたときに皆さんが考えてもらいたいのは、どちらかというとコミュニケーションの教育なんだよ。というように思っていただければ、いいと思います。道具を使えるようになる。というのは、一理には、あるのですが、一番、中心にあるのは、その道具を介して道具を使いこなす、理解するためにお互いに話し合う、そして共通の価値観を持つ、見つけ出すというところがポイントだと思っていただければいいと思います。

斉藤　よろしいでしょうか。はいどうぞ。

来場者　今、」iPadを見させていただいています。これ一人一台は、ありえないんですよね。例えばこれを一人一台づつもって、例えば、私は、パソコンでデジカメだめ、もちろん、携帯電話、全部持っているわけですから、その辺のね、ある組織で一台なのか、あるグループで一台なのか、そんな感じの使い勝手かなというのと、イニシャルコストは、どれくらいあるのかとか、そのあたりがね、実際、重いしね。いつもこれを持ち歩いてこれで写真を撮るというのは、いかんと思うのですよ。この辺の使い方がね。これから、いろいろかみあうとこかなと思います。

斉藤　米田部長さん。ソフトバンクテレコムさんから話してもらいます。

米田　一人是非、一台と考えていただけると。我々ソフトバンクの社員は一人一台配られてますし、個人持ちのiPadもありますし、一人で数台かかえている感じなんですけれどもそれぞれ使い分けしたりですね。組織に一台だとちょっと足りないのかな。という風には、思います。

初期コストは、5万円くらい。ということになりますが、その後は、月々のネットワークにつなげるための固定バケットの値段があると思います。2年間でおしまいということもあります。ですから初期コストは、そういう場合は、2年間使っていただければ、月々のバケット固定の値段と基本料ということになります。ただ、私は、営業ではないのであまり詳しいことは、ちょっと言えないのです。

来場者　このプロジェクトはお子さんやそこに住んでいらっしゃるみなさんにどう影響してどんな変化を作っていたかというそのあたりを聞かせていただけるとありがたいです。

斉藤　では遠藤さんからお願いします。

遠藤　子どもたちの成長に関してなんですけど遊び場がなくて小さなゲーム機で遊んでいる子どもたちが多かったですね。遊び場がない分ゲームするというのはどうかと思うのですがそういうことしか娯楽がない状態だったところにこういうiPadというみたいなので動画編集とちょっと大人びたことが、できるみたいな感じで子ども達もすごくくいついていた部分があってそういった意味では、新しい刺激というか今までやったことのないけど高度なことができるようになっただけでもすごく彼らにとって成長につながっていたと思います。雄勝（おがつ）って町自体全部ないんですね。それで思い出の品も写真も全部ないんですよ。だから新しく思いでを作っている状態にあるんですね。だからこういうそういう意味では、iPadとかというのは、すごくこれから貴重な財産になっていくと思いますし、今、市の方で震災の記録を残そうというアーカイブという授業を展開しているというところで皆さんそれぞれ状況が違う中で映像を撮ったり、写真をとったりしているんでそれは、みんな集めているところです。これが他の場所で震災が起るかもしれないからヒントになるようにということもありますし、伝えていかなければいけない責任ということもあると思うのでこれからこういったことが、震災が起ってからどういう風に変遷していくかという過程としても記録していかなければならないと思います。

斉藤　子どもへの影響について何かありますか。

佐藤　先ほど、服部さんの方からあったのですが、我々映像のツールとして使うときに考えているのは、映像作品を作ろうとわけではないということが勿論あってこういうツールを使ってワークショップをやって何しろ一番、面白いことは、関係がフラットになる。参加者それぞれの関係がフラットになって行くつまり、スキルをこういうことが、できますよ、やってみてください。はい、ちょっと良くなったね。

スキルを伝達するのではなくてゼロを1にするとか、ゼロから2にする1、2、にしていくという作業をするときに、我々が、その効果を感じるところですね。例えば、鳥取県での例なんですが、大人と子どもがまじっていたんですけども、ワークショップでは、よく大人チーム、子どもチームと分けたりもするんですが、我々の場合は、できるだけまぜて大人のグループの中に子どもが入ると子どもは、ちょっと頑張ろうとして関係をフラットにしようとしてちょっと背伸びをする。あるいは、大人がちょっと子どもの目線まで降りて行って一回、フラットの関係になったりする。元気な小学生が大人チームにいるとその人がリーダーシップをとって大人を動かしてこうして、こうしてこうして指示してたりする。そういう関係のギャップみたいなところがあったりするんです。そういうことが、できるように我々、デザインしていかなければならないんじゃないかな。という風に思っていますし、そこでこういう場が作られた時に、それぞれを発見していくプロセスが、僕は、一番、成長していくんだと思うんです。しりとりの遊びを撮影する場面があったのですが、最初は、ことば（セリフを）赤いカメラで撮っていくのですが、だんだんこう繰り返して行くと物だけ撮っていても面白くないなって気がついてくるんです。赤いカメラだったら、誰かが、赤いカメラを持ってカメラマンのようなかっこうをしてるときに赤いカメラというとか、そこに前後にすこし、こう演出を加えるとこれは、面白いぞというところになっていくそういうアイディアがその現場で出て来たりするんですね。それは、ゼロだったものが、1になって1だったものが2になっていく過程だと思うんですけど、プロセスを我々は、共有できる。ここのところが、面白いという風に思っています。

来場者　映像を通して皆さんイキイキとした子どもたちが、前に進もうとする姿、美しく思えて。ここにきてこの映像が見れてよかったと思いました。それと同時に、この先をどういう計画を進めて行ったらいいものですか？

川井田　私は日常性を非常に大事にしたくなるなっていう気がするんですね。やっぱり我が家の中になにがあるのか、母親が今何をしようとしているのか、漬物はどうやって漬けているのか。そういう日常的なこだわりを感じるようになりました。ですから、やっぱり映像っていうのはみんなのものだっていうのを最近ひしひしと感じてまして。まず、みなさんに日常にこだわっていただいて、その日常を記録することということを心がけられたらどうかと思いますね。ひょっとするとそれが10年後20年後、自分たちの子どもや孫がそれを見た時に、なるほどおじいちゃんおばあちゃんはこんなこと言ってた、こんなことやってた、っていう記録がですね。そこで本当に形となって。そういうものを、やっぱり引き継いでいくっていう、そういうことを自覚するようになるんじゃないかなあという気がします。身近にある道具、そういうのを大事に使って、後世に伝えていくということをぜひやっていただく、そういうことに可能性があるような気がします。

斉藤　あとは、大規模なアンケートを実施して国民の声を一番聴いた、野里さん。この先どういうのを考えてます？

野里　ひとつは、ここでも議論にでましたけど、カメラをむけられてそれが自分の知らない所でどうなっちゃうんだろう？例えが適切かわからないですけど、はじめて筆と紙を人間が発明しましたといったときに、同じような感覚だったと思うんですね。今までずっと面と面で、Face　to faceで会わなきゃ人に伝わらないって言うことが、第三者を介して情報も走ってしまうような状況というのと。それが映像に置き換わったというところで、根本はそんなに変わらないかなと思います。恐れるところはね。それをクリアしていけば、新しい可能性、たとえば、直接しゃべることが苦手、文字で表現することが、文章能力が、ちょっと

苦手ってという方も、映像を使えばもっとイメージで伝えられる人かもしれない。今はまだそれが手段として確立されてないのでちょっと苦手なところだねと、コミュニケーションが弱い子だねというような見方をされてしまうというのかな、という意味では、新しい表現方法をうまく使うということはすごくいいことだなと思います。そこは映像だけじゃなくてすべての方法を、色々駆使してまた新しいコミュニケーションを作っていくんだっていうのが、ちょっと見えてくるんだなと思います。

中村　子どもたちの成長っていうのを見守っていきたいですけど。できれば今回、石巻での子どもたちがまた次、もう一回次の年次の機会を経る度に今度はもっと伝えたいことをもっとまとめていくっていうのを、そういった力を身につけていってくれたらなあと思います。私自身は今回の中学生たち、まあ三年生で卒業していってしまうんですけども。これからも高校生になって大人になっていったときに、なにかできることっていう行動をおこす種がまけたんじゃないかなと思ってます。また私自身、来年度の人事でどうなるかわからないですけど、また中学校一年生、小学校から上がってくる子たちの担当になったときにはまたこういった活動で成長につなげていきたいなと思います。映像で編集してすぐその場で見れるというその行為が、自分自身がこうやって人から見られてるんだという気付き、自分の価値観とか、そこで何をしゃべるかっていうことで自分を編集、自己編集をして、自分を客観的に見る力、その中で他人とどう付き合っていくのかなとか、何か違う自分を見る目線というのは、今回の中学生たちもちょっとそういう機会ができたかなと思います。やってる中学生たちはまだまだ気づくこともないと思いますが、こういった授業を繰り返すことで、自分っていうのをつかんでいく自己肯定感、またみんなで見てもらえたという自尊感情っていうのかな、自分を大切に思えることっていうのは、今の子どもたちにとってとっても大事なことだと思うんですね。こういったことを成長の場作りを続けて行きたいなと思っております。

斉藤　仲條さん、何かありますか。

仲条　みなさん小学生中学生、大学生のお話をおっしゃっていましたので高齢者のかたの例でいいますと、今回仮設住宅へ行きましてipadをみなさんに触れていただきました。高齢者の方がどういう気持をもったのだろうかということをちょっとお話しておきたいと思います。実は相手を映すというのがカメラなんですが、ipadっていうのは、油断をしていると自分が映っちゃうんですね。そうすると自分が画面に映るということがやはりみなさんびっくりします。仮設住宅におられる方は、色々苦労なさっていますので突然自分が映ってしまうということになると、化粧をしたり、帽子をかぶってみたりとか。これってすごく大事なことで。映ること自体が、自分を他者から見るような感じで見えるわけですね。それが自分がこう映ってるんだというのが衝撃的だったという印象があります。場合によっては演歌でも歌ってみるとかですね。やはり想像がつかないことをやっていただくということが凄く嬉しかったですね。で、そうするとだんだん自分が映っているということが慣れてくると少しずつ自信を持っていただくことができまして、まわりの環境が変わって自分の友達を映してみる。そうすると映る側と映られる側のコミュニケーションが、結構面白い展開になってきまして、即興的に何か楽しいことやってみようかという話になるわけです。そうするとひとつの遊びみたいなのが見えてきて。自分が映って他人も映すことができるという、それの動機付けということで、今回、しりとりとか、いろんな仕掛けを考えていただいたんですがやる前とやった後では、全然コミュニケーションが違ったという印象がすごく強く感じました。特に子どもたちもそうなんですが、ご高齢のかたもそのへんで凄く変わった方っていうのがいらっしゃいまして。中にはご主人を今回の震災でなくされまして、結構沈んでた方がいらっしゃるんですが。じゃあ今度将来何をやろうかということになったときにですね、昔お父さんといろんな海外旅行行ったという経験談を話していただいて今度ここいってみたい、という話しになるわけですね。そういうなんか、ちょっとした誘発づけというのは、やはりみなさんの遊び感覚のなかの即興の中で、創造できるっていう一つのツールとして考えてみると、すごくいいかなっていうことを感じました。やはり誰もが他人から認めて貰いたいということがあるわけで、自分が映像でつくる、そこで自己主張するということがすごく大事で。映っている自分を見てこういうふうじゃダメだからやっぱりこういうやり方でとか。色々試行錯誤するというのが子供の世界も大人の世界も共通した面でそこで自信をつけて、みなさんで、子どもと、中年層と、高齢者と、お互いみんなで連携をとって一つの社会づくりをしていくっていうきっかけがこのツールの中では可能性が大きいかと考えています。

斉藤　そろそろ時間になって来ましたので私たちの実行委員会の活動に関する、事務局を担当している仲條さんから一言どうぞ。

仲條　みなさま長い時間、どうもありがとうございました。

御陰さまで２０１２年の夏と秋冬までの研究実践の様子を有意義に報告することができました。私たちには想像もつかない災害でした。色々な出来事に対して直視して、社会的に備えなきゃいけないということを考えています。備えるというのは、物質的なものではなくて、やはり、子供から主婦層、それから中年層それから高齢者と一体になって地域でコミュニケーションがとれるためのツールというものをいかに楽しく使いこなせていくのかということを考えて行かなければなと思っています。先ほどご指摘がありましたように、どこでも気軽に楽しくできるように、いろいろなコミュニティが活性化できるようなプログラムを作って行きたいと考えています。この点でみなさんからのご意見をお聞きすることができました。みなさまありがとうございました。

8

タブレット端末活用による
コミュニティーの可能性

9

可能性と研究

10

付録DVD

8 タブレット端末活用による コミュニティーの可能性

仲條雅昭
本研究事務局長

（社）美しく老いる会　代表理事
元気な高齢者の社会帰属意識を高め、持続させる意味から、
貢献に対する同世代・多世代からの評価を、
ICTを用いて明示化するシステムを構築することによって、
「徳積み」・「恩送り」の社会的意識向上の啓発を目指す。

「美しく老いる会」

「美しく老いる会」は毎年聖路加病院理事長日野原重明先生の講演会を開催しています。そのはじまりは日野原先生が気楽に講演をしたいということで聖路加病院の中にアリスホールというのがあるのですが、開催は２月か３月の月曜日に一番執務的には、時間がタイトではない時に、ひょこっと先生がホールで講演をできるような環境で、なるべくアクティブシニアと言われる方々の人たちに無償で、案先生のお話を聞けるような環境を作りたかったというのがありました。

昭和大学医学部の塩田清二先生は、脳、神経科学の先生ですけれども、「アロマセラピー」の研究をされていて、また日野原重明先生は、音楽での治療を臨床現場でその重要性を意識しておられるので「匂い」と「音楽」で患者の方を癒したいという意向がもともとにあってその話から日本の高度高齢化社会の中で何か自分たちでできることはないだろうかと、毎年１回の講演会をスタートしました。

美しく老いる会は、一般社団法人で組織をし、今年で実は、まだ２回目です。３回目くらいまでパイロットスタディをやってみましてその後、会員を集めるなり、方法を考えようかということで気楽にやっていこうとしています。

この活動に行き着くもともとは、東京厚生年金病院内科部長　溝尾朗先生と私とで、医療についての教育というのを考えていまして、特に「死」というか、「人が死ぬこと」に対してのアプローチというのが、デススタディとよく言われるのですが、この点についてよく考えてみなくてはいけないと思ったところから始まります。丁度、インドネシアの大津波震災の頃で、溝尾先生は、旅行医学の視点から、個人の医療健康データーの保管と活用について問題視されておられました。

また、お医者さんの臨床現場からですと「いかに自分が満足して一生を終えるか」という課題を先生も考えていらっしゃいまして多くの臨床現場を見ていらっしゃるところがあって、それをもう少し教育の現場で生かせないだろうかという話をずっとしていました。一度、埼玉県立大学の学生さんに協力してもらって「死について考える」という市民シンポジウムをやりました。日本というのは、国際基準The quality of death（© 2010 The Economist Intelligence Unit.）おいて、高齢化社会の国でありながら実は、世界で２０位後半でした。国際基準的には、看取られずらい環境の世の中であるというのが日本の状況だといえます。財務省官僚の試算では、高齢者すべてに、胃ろうなどの延命治を施すと国家財政は破綻するとの判断です。医療費を抑制する政策は、病院レベルでは、なるべく在宅介護看取りに誘導して在宅死を迎えるための医療介護環境に保険点数をスライドししています。

ちゃんと家庭と在宅レベルとでどうやって看取りを受け入れたらいいだろうか。特にその家族の繋がりということが、すごく大事であってなかなか今のお子さんは、家族で祖父母を看取る経験がないものですから、これをどう考えなくて行くべきかという点で、勉強会をスタートしました。日野原先生とお会いした時に先生はもともといのちや死についての教育を学校でやっておられますので、塩田清二先生（昭和大学医学部第一解剖学教室）から日野原先生をご紹介受けたというのが最初の経緯なのです。日野原先生の著書『生き方上手』は有名ですが、先生のお話しを聞きますと実は、『死に方上手』という本を書きたかったそうです。つまり死に方上手ということはちゃんと考えながら、自分をどう生きるべきかということを考えていかなければいけない。子どもたちにも、どう受けいれていくのかということを考えていかなくては行けないという先生の問題意識があったので、「美しく老いる会」という形に継承されて頂いているのが現状です。

講演内容の形は代わってきまして高齢者に、死に方上手ということを日野原先生はやろうという考えですが、ただそういうのはなかなかいきなりは難しいでしょうから、「いかにその老後を満足できる環境で次の後継者にゆずって行くか」ということについて特に医療の面からどうしたらいいか、例えば参加していただいた先生というのは、認知症をどうやって克服していくか、最近は「ライフヒストリー」というか自分史を編集編纂することによって実は、薬に依存しない臨床事例が数多く出て来ていて、過去に自分でやって来たことを整理させてあげるお手伝いをする活動も介護現場で結果が出て来ています。また、漢方で怒りを押さえるということも大分使われてきているところがり、この取組のご紹介とか。あと転倒防止ですね。ご高齢の方は、横断歩道とか、急いで渡ろうとしても転んじゃうわけです。それがきっかけで歩けなくなってしまうとそれでもう要介護状態になってしまうのでいかにその転ぶにしてもダメージの少ない転び方をするにはどうするのかとかですね。歩き方を。リハビリを含めやっておられる先生方に話していただいております。また、車椅子になってしまうと世間体でお買い物行くにも、ああ、あの人が車椅子になってしまったという視線で外になかなか出られないというケースがあります。最近、介護旅行と言って、温泉旅館が受け入れて尚かつそのケアをする方にちゃんと旅行計画を立てて緊急時には、どう対策ができるかという連絡をとって温泉に来てもらう。そのなかで出ているご意見は、やはり「家族で食事が出来る」という繋がりが喜ばれています。部屋になかなか引っ込んでしまうと家族全員で食事ができない、旅館で料理を用意していただいて子どもとか、含めていっしょに旅行しながら食事が出来ることは、メンタル面、健康面でとても評価を頂いています。いかに要介護になった時にそれでも如何に自分に満足できる環境を用意できるかというようなご紹介というのを講演の中に入れました。

今後、どうしても要介護になってしまうと何も自分で決められなくなってしまうのでその前に出来ることを医療面と臨床面から、健康寿命を楽しみながら延ばす＝美しく老いるを、ご紹介するというテーマになっています。

このような活動を通して、私としてはもう少し家族の単位でやはり死について考えておかなくてはならないのかなというところがあります。特に皆さん要介護になってしまうと何も決められないですね。

いろいろなケースをお聞きしていますと、何かというと一人暮らしをしている方がいて、急遽、要介護になった時、息子、娘は地方といった場合に、これは大変だと、介護施設へお金を払って入れるわけです。病院からは早く退院してくださいという訳で！ところが、その高齢者の方というのは、まだ自分で自立して生活できる能力があるのに、要介護専用施設に入ってしまう。ずっと寝たきりでやって行くのかというのは、まだ分からないというところがある。いきなり、まだ自立できる可能性があるのにその寝たきりの要介護を前提とした介護施設に入れられちゃうとぜんぜん自立した行動が出来ないわけです。また、逆に、夫婦で

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3・11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

まだ元気な内に要介護になる前にまず、居住型自立型の介護施設に入る。元気なうちは、まだそこに住めて、いざ自分や配偶者が、倒れたときは介護のサービスを受けられる自立型介護施設にに入る方もいらっしゃいます。都心から住み慣れた環境から離れた場所ですと、生活パターンが違い飽きてしまったり、途中で人間関係が面倒くさいと出ていっちゃったりといろんなケースがあります。

ここは、やはり家族全員でその辺の軌道修正は、気軽に話し合うというものが必要になってくるのかなと思いますし、家庭内での看取り、死に方上手について取り組んでしていかなくてはと考えています。

東北支援での
ボランティア体験について

３.１１の大震災の後、埼玉の医療グループでもともと中国の北京で病院を経営されている 田中健一さんというのお医者さんがおりまして、四川の大地震の時にも震災現場に入られたお医者さんです。そのお医者さんが今回の東北の地震の翌日には、東北の現場に入って岩手県の大槌というところですが、町長さんも亡くなったところですね。そこに物資を持って入られて現場でいろいろと支援されてこられた先生なのです。丁度、震災から２ヶ月たったゴールデンウイークの時に、私にも声をかけられました。ゴールデンウイークの４泊５日を使って一緒に大槌の方へボランティア（清掃や炊き出しをしながら）に行きました。それが、最初のきっかけです。まだ船が民宿の屋根の上に乗っかっていたりする頃で感じたのは、混沌とした状況はあったのですが、仕事のある釜石市に若い方は、出ていかれてほとんど高齢者しか残っていない状況で街の復興なんてというのは考えられない状況でした。実は、大槌にもちゃんとした病院があって、そこには大きな施設があるのですが到底そんなものは維持できないし、その街の機構としてはとてもこの人数で機能できない状況の中で高齢者の方が残っていらっしゃる。当時、仮設住宅に移れとうことは、三度の食事の支援が出来なくなるし光熱費の支払いが発生することを意味します。自分で生活用品を買えなきゃいけないという話になります。そうすると生活ができないから体育館にまだいたいという方も実は、多くいらっしゃって仮設住宅に入りたくないという方もいた訳です。この状況の中で街としての再興はありえないだろうなと感じました。

リーマンショックがあった以降、日本の経済というのは停滞感があってそれ以前の問題として、日本の人口というのは、２００６年を頂点に１億２千万人だったのですが、１００年前には５千万人しか人口はなかったわけで、１００年かけて７千万人増えて２００６年に頂点に来た、ところが後１００年かけて１００年前の最悪５千万人に人口が減という試算があります。ということは、どういうことかというと１００年かけて７千万人増えて１００年かけて７千万人減る人口で、何が起きるかというと今まで価値のあるものが、価値がなくなってしまうわけです。

例えば、車なんていうのは、昔はどうしてもほしいとモノでしたが、今の若者は車の購買意欲が低下していますし、需要と供給で人口が減るということは、需要がなくなるということですから携帯電話もそれから土地も価格が安くなるというという状況になるということで、今まで価値のあるものが、今まで供給の仕方ですと、需要が少なくなってしまい価値がなくなってしまうという状況という超高齢化社会が世界で初めてこの日本で体験するケースだと言われています。大槌は、この近未来が早く来てしまっている状態です。右肩上がりではなくて右肩さがりの状態の中でどうやって復興していったらいいのかというと、「違う価値観」でやっていかないと難しいのではないだろうかと考えました。

震災の市町村の復興はもともと人口が少ないですから、そこに土木建築を駆使して大量のお金を使うところで使う人が少ないという状況になりかねないわけです。基本的な解決手段ではないだろうなというのが、すごく頭の中にあって、じゃあその時にどうやったらいいのだろうかと考えていたのです。そうするとやはり、高齢者は実年層の人がいて尚かつ世代形成層の若い青年と主婦と子どもがいてその中で皆さんが、相互連関しながら、各世代の役割で、そこの町を盛り立てて行くような形を作っていかないと成り立たないだろうなと痛感しました。

「日本の将来」「近未来で起きること」が３.１１の問題で早く来ちゃった状況が見えてしまっているところがあって、その状況で今までみたいな右肩上がりのやり方ではなくて違う方法でやっていかないとだめなのだろうというのが、実感したことです。そうするとさっきお話ししたいわゆる「死」というものは、財産（文化、経験、歴史）を次の世代に残すというか引き継ぐという意味合いがある訳で、次の世代に引き継ぐという連関というのは、やはりそういう意味ではちゃんとした子どもからお年寄りまで家族で連携していく流れがないと、とても今後難しくなるのかなということを痛感しました。

つまり各世代連携によるコミュニティで、新しくデザインがきるようなものが必要なのかな、例えば、災害地の復興といった場合にどうしても家族のつながりとか、家族で何か町を起こすとか、何か吸引力がないといけないわけです。

特に今回の場合は、悲惨な状況の中でそのメンタル的なものをケアしていきながら、その新しいものを作り出していくという話になった時に、そこに住んでいる皆さんが「コミュティを作って行くということ」にはただ設備を整えるだけでは難しいのではないかと思います。

被災現場は、生きる意味がなかなか見いだせない状況の中で限界状況を見て来られている訳ですから、その中で次に想像できるものというのは何なのかということになると、如何に、今まで暮らして来た伝統とか風土を継承していくかというのが大事かということを考えなければならないと思うのです。グループ現代の川井田ディレクターもおっしゃっていたのですが、柳田国男が、「先祖の話」という本を書いたのですけれども要は先祖から見守られていると、自分のやっていることに対して励ましてくれながら、やっぱりそこで生きていく意味を見いだして次の世代に引き継いて行くというそういう意識みたいな構造が日本にはあるのではないか。そういうことに共感することが、すごくありまして復興ということを考えた場合に物だけの復興ではなくて精神面も含めてどうやるのか、何か若い世代の方とみんなで何かをやっていかなきゃならないことを考えた場合には、何かのきっかけというか未発の契機なものをツールとして使えればいいのかなということを感じていました。

そこで、コミュニケーションツールとしてのタブレット端末の可能性について、ソフトバンクテレコムの米田進部長と話す機会ができ、最近若者の間でも普及しているタブレット端末に関心を持ちました。

現在の機種類は、簡単に片手で映像も音声も撮ることができます。他者も撮れるし映っている自分を見ながら、自分も撮ることができます。撮ったものをすぐに見返すことができます。

特に興味を持ったのは、その映像を使って家族で何か連携してやることができるとかですね。それまで映像を撮ったことのない人が撮ることができるようになります。それでお互いに撮った映像を共有することができるということがあります。このワークショップの体験で何か次の行動へのきっかけになるのかなということがありました。そこでそれを活用できれば、これまでの解決策のヒントがあるのかなということを思いました。

石巻での
ワークショップについて

最初は、実証フィールドがこうなるだろうなというのは、全然考えていませんでした

いろんな発見がありました。

今回のワークショップで分かったのは、楽しみ方をみんなで考えるということです。参加者にとっては、いきなり即興みたいに課題をやってくれということ

だったのですが、通常、仮設住宅の中で見えてこないものが、ワークショップで違う視点や方向で見えてきてみんなでコミュニティーを作るきっかけを作れたらいいなという、そのきっかけがこうして見えて来てくれたのではないかなという気がします。何気ない「しりとり」の中でもその言葉の語彙が施設の何かと照らし合わせて発見して見えたり、実は、今回はなかなかできなかったのですけどもそこにおじいちゃん、おばあちゃんや、家族が加わってその中で一つ、何かができるということをアワードとして、同じ大学生とか小学生とか、ボランティアとか、みんなでそれを共感するというところから意味のあるものをみんなでやっていこうかなという共通の共感、共通の土台みたいなものができるいいツールの一つになると思います。

河北総合センターでの映像ワークショップでボールをつなぐ撮影と子どもと取り組んだとき、各世代の参加者は、楽しそうでした。何かをやらされていることではないと思います。そこにたとえば、実際にボランティアに来ていたぜんぜん違う外国の宗教法人のボランティアの方もいっしょに遊んじゃってもいいわけでして、そこでみんなで何かをつくれることは、できるのだということが大事で、共感があれば、その参加者たちが言っているメッセージをうまく拾いあげて地域のコミュニティに繋がりができるの可能性が生まれるというところがあります。

人間というのは、応援してくれると励ましてくれると嬉しいわけでやっぱり自分もみんなの役に立ちたいというか、人から喜ばれて、助かるといってもらってそこで自分のやっていることの意味が見つかる。(「生きる意味」そして「生きている意味」の認識)、つまり、どんな小さいことでも喜ばれたり、認められたりすることの繋がりが発見できることの大切さを確信しました。

大学生の作品「わたしの３．１１」について

参加した大学生本人たちが、記憶を映像に残したということは、いいことだと思います。悲惨な経験をなさった方とその状況を考えていなかったという人が、正直にそれをお互いに映像で見てみなさんがたぐり寄せられてくるというのは、大事だという気がします。3.11の経験を大学生が正直に映像で述べる。当事者の話を聞いてみる。どうしたらいいだろうという話になった場合、共感することって大事ですがそこからお互いに何かを作っていくということを踏まないといけないと思います。そういう時には、一種の映像という手法が、効果的だと感じました。お互いに見てお互いに感じるところで何かいっしょにつくっていくということでつながっていく感じがしました。

(一人でタブレット端末カメラに向かって語る　自分で自分の語りを撮影する行為について)自分を他者の立場に見ているわけでそうした時に自分が、どういうことをすれば、意味のある行動ができるだろうかということをみつけるきっかけになるかなという気がします。

福島県飯館村のタブレット型通信端末の記事について

福島県飯舘村が福島第１原発事故で避難する村民に情報提供の目的で配ったタブレット型 通信端末について～村によると、１２月の１カ月間に１回でも電源が入れられた端末は約１５７０台で、残り約７３０台は１度も使われなかった。使用実績のある１５７０台の中でも 日常的に使われているのは約８００台にとどまる。村の話では、苦手意識が強くて使いこなせない高齢者が多いという。 中には「使い方が分からないので返す」と返品した人も数人いた。村総務課は「導入時に使用説明会を開いたが、操作には慣れが必要。時間をかけて浸透を図りたい」と話している。

ソース:河北新報 より抜粋

実は、今その国家成長戦略を現政権やっていますがそうすると総務省も経産省もそのための予算づくりをしているわけです。そこで出てくる問題は、タブレット端末を高齢者に使いやすいような環境をどう作るかということから論議されているのです。

今回の経験で良かったことは、タブレット端末を使っている方々が、それに意味を感じてくれるということが大事だということです。それって自分が褒められたり、やっている行動を評価してくれる前提がないとだめなのです。

被災地の放射能で入れないところの今の状況が見られますよ。役場の情報が共有できますよ。じゃ、何かが足らない。何かみんなで参加してもらって、そこで自分がやっていることがいいことだと感じられるような、なにか次にこんなことをやってみたいと想像ができるようなものを一緒に作って作品にしていかないと、機械の機能だけだと多分普及しないと思います。

撮影、編集、上映というタブレット端末機能を使ったワークショップには、参加者を同じ土台の上にのせ、自分たち一人一人を認め合い、そして共存、共感により、自分たちのそれぞれの存在の意味を見いだすことができるツールであると思います。それは、美しく老いる日本の環境づくりにもつながっていくことだと思うのです。

今回の映像ワークショップの成果は、他者から見られている自分から→他者から見守られている、役に立つ事が出来る自分の発見、そして、それは、生きる、生かされている意味の発見であり、新たな、コミュニケーションの新たな契機に繋がると可能性があるという点かと考えます。

タブレット端末の良いところは、簡単に動画を撮る事が出来る。そして、油断をしていると自分が映ってしまう点が、コミュニケーションツールとしてとても役に立つ事を痛感しました。自分が画面に映るということがやはりみなさんびっくりします。仮設住宅におられる方は、色々苦労なさっていますので突然自分が映ってしまうということになると、化粧をしたり、帽子をかぶとか、他者から見られている自分が見えてしまいます。これってすごく大事なことで。映ること自体が、自分を他者から見るような感じで見えるわけで、それが自分がこう映ってるんだというのが衝撃的だったという印象があります。その中で、だんだん自分が映っているということが慣れてくると少しずつ自信を持っていただくことができる。そして、自分で自己紹介を考えたり、自分の友達を自分で撮ってみる。映る側と映られる側のコミュニケーションが、即興的に何か楽しいことやってみようかという話になり、役に立ちたい自分が、他者に認められ、見守られる。

今回、この映像ワークショップを通して、子どもと、中年層と、高齢者と、お互いみんなで連携をとって一つのコミュにティづくりをしていく切っ掛けが、タブレット端末の活用によつて、見えてきました。

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3.11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

9 可能性と研究

米田進
技術協力　ソフトバンクテレコム(株)

最近の仕事は、国関係研究のプロジェクトリーダー的なこと。
専門技術を活用し省エネ等の実証や報告書、
問題解決的なことを行っている。
本プロジェクトでiPad１０台を貸し出しをいただいた。

被災地とiPadについて

今回の事務局長の仲條さんと、医療と介護の連携において、iPadやiPhoneを用いて、介護士の方とか、ご家族の方が、介護をされる方のいろいろな状況が見られる電子カルテの開発研究会の事務局を一緒にやっていました。この電子カルテ「どこでもマイカルテ」は、自分の健康・医療履歴、介護をされている方の状況記録を、いつでも何処でもクラウドやiPhoneを利用して見られるというものです。他のお医者さんに見せたり、海外で具合が悪くなった場合に、マルチ言語にしなければならないのですが、こういう状況でこういう薬をいつも飲んでいますというようなことを見せられるようにと考えたのです。

3.11の時は、立派な病院でも、ずたずたにされ、紙のカルテは流されちゃっています。そうするとおじいちゃん、おばあちゃんは、自分が飲んでいた薬がなんだったけと、しっかり言えないのもあって、それが少なくとも正確に伝えられたらいいと思いました。被災地には、ボランティアの先生が沢山入ってくるのですが、1週間、1ヶ月いると次の先生に代わってしまうので、診断してもらった記録を1カ所にまとめておくことを、紙でやっていたみたいですが、これからは、電子的にして、尚かつ、クラウドに貯めておくべきだと考えました。病院が流されても、クラウド上のデーターは、残るという仕組みが必要でしょうということを考えています。

石巻ワークショップと西生田中学校の授業について

佐藤先生と中村先生とでは、かなりアプローチが違うと思います。佐藤先生のようにiPadを使いこなせる方が増えて、もっと学生さんとかに、その良さを教えて接していただいて、実際やっていらっしゃいますが、iPadが広がって行くといいのかなと思います。大変大事な方だと思います。中村先生は、学問的で映像を使ってコミュニケーションをとることそのものが、広まっていくといいと思います。今までですと歴史的に言うと文字を書いて紙に記録するように、録音ですとか、映像ですとかで記録することが、身近なものとして使えるようになりました。そのような記録を蓄積していくことも、簡単な時代に突入しました。そういう時代の教育として、映像をどう取り扱ったらいいのか、映像でのコミュニケーションをちゃんととるための学問的、学術的なことを中村先生が考えられているのが、すごく関心しています。まさしく次の教育の柱となると思います。読み書きそろばんと言ったところが、自分で映像をとって編集を加えるそういうスキルが、これからの人には、必要だと思います。また、そういう教育で日本がその先端を行くようになるといいのですけどね。

今、ものづくりは、器用だということはあっても表現力とか、他の欧米と比べると落ちると言われるし「ことば」の問題というのは、一応あるのだと思いますけれども、それ以上の、それ以外の部分というのは、大きいと思います。今回のプロジェクトで話を聞いていて、自分を撮影して人を撮って一皮むけるというのは、小中か中高か教育としてやっておくべきことではないでしょうか。そうすると世界観も変わってくるでしょう。

高齢者への期待

iPadを高齢者が使うというのは、老いを止めるとか社交性をもたせるには、若返ることはないのですから、年齢相応に止めようとかですね。日本の福祉の問題を考える場合、重要なところです。それにiPadが役立つのであれば、いいことだと思います。佐藤先生が高年齢になる頃には、問題なくまったく不自由なくみなさんが使っていますね。今いる高齢者に、面白さをどう伝えるか、誰が教えるかという問題があると思います。専門の方が教えるというのは基礎としてあるべきなのですが、隣のおじいちゃんとか孫ですとかが教えてくれるとインパクトが強いのかなと思います。そういうのが、増えると爆発的に広まって行く、ほっといても広まると思います。

シンポジウムの来客者の質問への返答

（iPadは撮影だけの機能か印刷はできるのか）

米田：iPadはプリンターにつなげられますし、パソコン機能も一般的なものは使えますし、実際に我々はパソコンと同じ画面をiPadに出して業務を行うとプリンターにはつながるのですけど、会社の方針としてペーパーレスということですので紙は使わずに、ただ、紙を出す代わりにiPad上にPDFっていわれるものになるんですけど出すことによって、紙を何枚も使わずにiPadで見るということで済んでしまう。で、拡大もすぐできますし、色々と使い方はあってですね、iPad、iPhone自体はプラットフォームといわれるように基本的なツールというか機能を提供して、その上に色々なアプリケーション、先ほどもありましたように300円出すと有料ですごく良いものが沢山あります。これは別にソフトバンクが出しているわけじゃなくて、色々な開発をされる企業の方が、またはベンチャーの方が作ってこられるというのがたくさんあるということで、非常に使い勝手というか、アプリケーションの機能としても活性化されますし、日々いいものがどんどん安く出てくると、まあ、こういう循環が良い方向に行くものですので、今日できなかったことが明日には誰かがそのアプリケーションを出してくるということも考えられます。先ほどあった香りや匂いを出せといわれると、それはちょっと難しいかもしれないのですけど、将来的にはそういうものもどんどん出てくるかもしれません。

スマートカタログについて

「スマートカタログとは、サービス提供が許可された特定のモバイル端末向けに、マルチメディアコンテンツを作成し配布するものです。特定された端末でのみコンテンツが閲覧される為、セキュリティの高いコンテンツ配信を可能とします。モバイル端末の操作は容易で、高齢者から子供まで使い熟すことが出来ます。また、コンテンツは、高価な専用ソフトや専門的なスキルがなくても、誰でも簡単に動画や静止画、音楽、Webサイトのハイパーリンクを組み合わせて作成できます。今回は、埼玉県立大学にて行われた授業にて、学生さん一人一人に端末を配り、石巻でのワークショップ、中学校での授業風景、被災地にて活動されているNPO法人の方のお話し等をコンテンツとして観て頂きました。一人一人が、違うコンテンツを選び、閲覧出来る為、興味の在るコンテンツに十分に時間が費やせ、授業の効果も向上しました。」

1 研究概要
2 被災地の現状と課題
3 石巻映像ワークショップ研究報告
4 ワークショップ的な授業研究報告
5 私の3・11
6 95万人アンケート
7 ワークショップがつなぐもの
8 タブレット端末活用によるコミュニティーの可能性
9 可能性と研究
10 付録DVD

10 付録DVD

DVD撮影　岩田まき子

DVDと報告書の編集　西条美智枝（立姿）

本実行委員　学生　シンポジウム参加者

本報告書添付DVD「映像ワークショップダイジェスト」40分

1. 石巻市仮設追波川多目的団地と河北総合センターでの石巻ワークショップ

「道具の使い方」「自慢できるもの」「色（赤　青　茶　紫）」「しりとり」
「質問」「ボールをつなぐ編集」「作品づくり・撮影/編集/上映」

2. 川崎市立西生田中学校３年生

「ワークショップ的な授業～映像で考える3.11子どもの人権」

3. 埼玉県立大学　（情報）

「学生と家族や故郷　そして「私の3.11」」映像ワークショップがつなぐもの

DVDと報告書制作　（株）グループ現代
160-0022　東京都新宿区新宿2-3-15大橋御苑ビル７階
電話03-3341-2863 FAX03-3341-2874
担当　本実行委員会事務局　川井田　西条

デザイン：岸田文香
印刷：株式会社 マステック